聖空海

82
39

82
82-39

聖空海

丹生實榮著

傳燈會出版部

聖空海の卷首に序す

吾人は正傳に於て年譜に於て、はた遊方記、行狀記に於て、其他諸先德のものせられたる諸傳記に於て、常に神的弘法大師を見、三地薩埵の權化を拜しぬ、而も曾て人的弘法大師の面影を拜せず、吾人の遺憾何者か此に加へん、世間また吾人と感を同うする者これ有らむ乎、故に吾人は今茲に、吾が人的智鏡に映じ玉ひにし高祖、弘法大師の面影を寫し參らせて世間に示す、其意惟だ吾が景慕信仰する高祖の生涯を廣く世人に紹介し、最も我國の文明と關係深き聖僧の面影を多數に知らしむるに在るのみ。思ふに香染の衣かい合せて、珠數つまぐり玉ふ淸僧方よりは、高祖の神聖を辱しむるの非難を蒙

り、純粹世間の諸士よりは、まだ〳〵人的弘法大師と認められぬ節多からむ。然も吾人は今偏狹なる吾〻人的智鏡を通じて、都率天上に在します高祖を拜しまつりし者、其の純然神的ならず、純然人的ならぬは素より當然のことのみ。惟だ此の光榮あり威德ある御生涯を、彼の曖昧杜撰なる靈驗記的、若くは麁漏蕪雜徒らに傳說を羅記列載する史料的傳記の間より救ふて、幾分の光明を共上に貢獻するを得ば吾願足る矣、吾豈に多きを望む者ならむや。

明治三十一年八月十日東寺の塔影蓮香浮動する所に於て

著者しるす

目次

聖空海之年譜

聖空海之要目

第一章　平安朝の宗教思想……一頁

第二章　在俗時代……二十頁

其一　生家と御誕生と其幼時……二十頁

其二　京畿の修學と脫俗と……三十一頁

第三章　開宗時代……四十八頁

其一　不二經探尋の十春秋……四十八頁

其二　入唐留學の三星霜……六十二頁

第四章　高祖の品性と人生觀……七十七頁

其一　高祖の御品性……七十七頁

其二　高祖の人生觀……八十六頁

第五章　成功時代……百五頁
其一　大同弘仁朝に於ける高祖……百五頁
其二　神道との關係一班……百六十四頁
其三　天長時代に於ける高祖……百七十三頁
第六章　退隱時代……百九十五頁
其一　御入定以前の光榮……百九十五頁
其二　御入定後の餘光……二百四頁
第七章　結論……二百七頁

聖空海之年譜

寶龜　五年（一　歲）　紀元千四百三十四年、光仁天皇卽位五年六月、讃州多度郡屏風ヶ浦に誕生、稱して眞魚と云ふ、是年最澄既に八歲。昨年　桓武天皇東宮に立たせ玉ふ。一昨年道鏡下野の配所に死す。西曆七百七十四年

同　六年（二　歲）　十月　帝御誕生の日を以て寡を群臣に賜ふ是れ我國天長節の濫觴なり。法王レオ第四世立つ

同　九年（五　歲）　四五歲の間夢に諸佛と語。最澄年十二歲南都大安寺に入て出家す。

同　十年（六　歲）　當時父母鍾愛して貴物と云ふ。

同　十一年（七　歲）　是年鄕里倭斯濃山に釋迦牟陀尊の出現に遇ふ、今の出釋迦寺は其跡なりと云ふ。

天應　元年（八　歲）　四月二十五日桓武天皇御卽位。

延曆　元年（九　歲）　時人稱して神童と呼ぶ。宇佐八幡宮大自在王菩薩と稱すべき由の詫宣あり。

同　三年（十一歲）　長岡遷都のことあり。

同　四年（十二歲）　始めて儒學に入る。今年最澄叡山に登る、年十九歲。

同　七年（十五歲）　初て京畿に出でゝ、石淵勤操僧都に就き虛空藏求聞持の法を受く。外舅阿刀大足に從て益儒學を研む。最澄根本中堂を立つ。

同　八年（十六歲）　甥智泉生る。

同　十年（十八歲）　大學に遊びて詩書經傳を諸博士に聽く。

同　十一年（十九歲）　去冬聾瞽指歸三卷を造りて、出家の本意を告げ、今年近士と成る。南海の絕嶮を跋涉す。　以上在俗時代

同　十二年（二十歲）　和泉國槇尾山寺に於て勤操和尙に從ひ得度す、名は敎海、後ち如空と改む。佛前に誓願して不二の經典を求む。

同　十三年（二十一歲）　名を空海と改む。平安城遷都。

同　十四年（二十二歲）　東大寺戒壇院に於て具足戒を受く。

同　十五年（二十三歲）　敎王護國寺立つ。

同　十六年（二十四歲）　先に着せし聾瞽指歸を訂正して、今日の三敎指歸と爲す。最澄內供奉となる。

同　二十年（二十八歲）　智泉高祖の門に入て出家す、年十三。　昨年眞濟、今年眞雅生る

同　二十二年（三十歲）　大日經を久米寺東塔に感得す。

同　二十三年（三十一歲）　五月入唐求法の勅許を得、六月難波を發し、八月十日福州に着し、十二月二十三日長安城に入る。

同　二十四年（三十二歲）　靑龍寺惠果和尙に就て兩部の大法を受く、十二月惠果入寂。

大同　元年（三十三歲）　般若三藏より華嚴經幷に梵夾を授かる。　八月唐土を去り、十月筑紫に着し觀音寺に居る。今年三月十七日　桓武天皇崩御五月平城天皇卽位。

同　二年（三十四歲）　入京して新帝に謁し密敎弘通の勅許を被る。

同　三年（三十五歲）　課役を免ずるの宣を蒙る。

同　四年（三十六歲）　槇尾より高雄山寺に移り住す。平城天皇御遜位、嵯峨天皇御卽位。

弘仁　元年（三十七歲）　南都東大寺別當となる。上足弟子實惠に灌頂の職位を授く、是れ本朝密灌の最初なり。淸涼殿宗論本年に在りとの說あり。

同　二年（三十八歲）　寺主願演の請に依りて暫らく城州乙訓寺に住す。

同　三年（三十九歲）　最澄高雄寺に來て灌頂を受く。

同　四年（四十歳）　藤原冬嗣のために奈良南圓堂を鎭ず。五月晦遺誡を制す。
同　五年（四十一歳）　沙門勝道のため日光山の碑を撰す。
同　六年（四十二歳）　有緣の道俗を勸募して祕密藏經を書寫す。　眞濟儒冠を脫して門下に歸す
同　七年（四十三歳）　地を紀州高野山に請ふて祕密修禪の道場を立つ。
同　八年（四十四歳）　高野山に於て結界の法を修す是れ伽藍建立の最初なり。
同　九年（四十五歳）　大疫に當り宣旨を受けて　皇帝書寫の金字の心經を講ず是れ心經祕鍵なり。　宮門の額を書す。
同　十年（四十六歳）　高野山金堂大塔等の造營成就す。　大乘圓頓戒の議論、南都北嶺の間に起る。東國巡化の道に上る。
同　十一年（四十七歳）　最澄顯戒論を著はす。
同　十二年（四十八歳）　讃岐國萬農池、造築の別當と成る。其功を賞して新錢二萬緡を賜ふ。
同　十三年（四十九歳）　廢太子高岳來て出家す、即ち眞如親王なり。最澄五十六歳にて入寂。　勅に應じて三長齊月及び夏中に息災增益の法を東大寺眞言院に修す。太上天皇灌頂を受けらる。

同　十五年（五十歳）　嵯峨帝御讓位、淳和御即位。東寺を賜ふて長く密宗の道場と定め、定額僧五十口を置く。
天長　元年（五十一歳）　神泉苑に雨を祈る。其靈驗を以て少僧都に進む。
同　二年（五十二歳）　東寺の講堂を立つ。大法師智泉死す。
同　三年（五十三歳）　東寺の塔を造る。
同　四年（五十四歳）　五月大極殿に雩す。大僧都に轉ず。勅操和尚入寂。實惠河內觀心寺を立つ。
同　五年（五十五歳）　綜藝種智院を京都九條に立つ。
同　六年（五十六歳）　南都大安寺の別當に補せらる。
同　七年（五十七歳）　十住心論十卷を奉獻す
同　八年（五十八歳）　病を以て大僧都を辭す許されず。　叡山の圓澄師等祕密の受學を請ふ。
同　九年（五十九歳）　高野に遷り住す。　穀味を絕ちて專ら禪定を好む。
承和　元年（六十一歳）　遺誡の文を製す。正月御修法を禁中に行ふて玉體安穩國家靜謐の祈禱を致す。　十二月奏請して勘解由廳を內道場とし、眞言院と改め、後七日の御修法を國家の永式と定む。東寺の三綱を

置く　一

同　二年（六十二歳）　正月眞言僧毎年三人を度するの勅許を被る。三月十五日遺告を諸弟子に賜ふ。　三月二十一日高野山奥の院に入定す。

天德　元年　文德天皇より大僧正を贈賜せらる。

貞觀　六年　淸和帝より法印大和尙位を贈らる。

延喜廿一年　醍醐天皇より弘法大師の謚號を賜ふ。

以上

聖空海

瀨川　丹生實榮著

第一章　平安朝の宗教思想

茲に吾人は平安朝と云ふ、而も吾人が今言ふ平安朝は通常稱する平安朝時代、即ち桓武天皇平安遷都より鎌倉覇府の開創に至る上下四百餘年を總括せる者にあらず、彼の奈良七代の朝廷が、一たび動きて長岡に遷り、平安に移りたると同時に、天武の系統が再度、天智の流に歸りさゞ波や滋賀の都は荒れにしも、今また山河襟帶四境を繞らし、加茂桂の流水淸き處、比叡愛宕の嶺岳高き處に、千載の鼎を据ゑにし當時の宗教一班を描かゞと欲するなり。故に平安朝の最高潮時と稱すべき天曆以後に亙り、藤原氏の最盛時代に於ける華奢風流を描き、花鳥風月の交に忙はしき才子佳人と、權門豪家に出入して權力爭奪の爪牙と成りたる武士の宗教を描き、宮廷深殿に輦輿牛車を軋らせ、梵唄聲

明の音澄み渡り誦經、念持に感涙の袖しぼらせたる高僧知識を描かんと欲するにあらず、即ち吾人は眞雅圓珍を描かず、最澄空海を描き、以て寧樂朝の末葉より平安朝の初代に於ける宗教と其思想の一班を描きて、以て當時の宗教即ち佛教が、如何に平安朝に至て一轉したる乎を論ぜんと欲するなり。

今熟〻佛教輸入以來、平安朝に至る迄の趨勢を觀察するに、其初め種々の障礙と迫害とを蒙りたるに拘はらず、徐々と新勢力を養成し來り、奈良朝に至て一時其絶頂に達し、就中聖武の朝は其の最盛時代なりと言ふべし、蓋し推古の三十三年、高麗の惠灌三論宗を傳へ孝德の四年道照法相の南寺傳を傳へ、降て元正の靈龜二年玄昉其の北寺流を傳へ、聖武の天平八年唐の道璿律師華嚴を傳へ、鑒眞和尙同朝に渡來して律宗を傳へ、其他俱舍成實の兩宗は法相と三論とに附屬したれば、聖武の朝に於ける佛教は七宗の教義蘭菊美を爭ひ、諸宗の龍象英華を論談の鎚に吐き、其の興勢隆々として俱に類の比すべき者無し、當時　皇室初め蘇我大伴の族が、深く佛教に歸依したるは論無く、當初佛教に反對したる中臣氏、即ち當時の藤原氏も、鎌足以來無比の崇佛家となり、鎌足は長子定慧を出家せしめ、天智帝と共に數多の寺院を興すに至り、天下擧て其勢に靡き、佛教は殆んど上下の信仰を得るに至れりと言ふべし、而して佛教の信仰は當時上より下に傳播したる者なれば、今佛教渡來以後、皇室顯家が佛教に於ける關係の概略を觀察せんに、用明の朝聖德太子四天王寺を創立せしより、崇峻の朝に、馬子法興寺を立て、推古の朝に至り僧正僧都の官を置きて僧徒を取締り、秦河勝は峰岡寺（今の太秦廣隆寺）を立て、舒明の朝百濟寺（後の大安寺）を新にし、皇極の朝に十禪師の位を定め、孝德の時蘇我山田麿山田寺を立て、二千の沙門大藏經を宮中に轉讀し、齊明の朝川原寺を興し維摩會盂蘭盆會仁王會、また是朝に初まり、天智帝建福寺を立て、百の佛像を慶讚し給ひ、皇后藥師寺を創せられ、與多王三井寺を造り、天武帝諸王公卿に度者一人づゝを賜ひ、天下に令して家毎に佛壇を構へしめ、宮中の別處に僧尼を置きて後世所謂る內道場の基を爲し、持統帝無遮會を藥師寺に設け、金光明經を天下に頒ち、最勝講を宮中に設けられ、

文武帝は天智の造られたる丈六の佛像の前に大鏡を懸け、五百僧を延いて供養を設け玉ひ、元明は天智の志を繼で、筑紫觀音寺を檢校し、藤原不比等父の菩提を弔ふため、興福寺を立てぬ、これ後世佛教史上に名を留めたる南都坊主の濫觴なり。元正の朝には宇佐八幡宮の託宣に依りて放生會を創始し、施藥悲田の兩院を興福寺に置き、聖武の朝は歴代崇佛の結果が其絶頂に達したる時にして、行基は和州長谷寺を創建し、皇后先妣のために興福寺の西金堂を營み給ふ、是朝天下に國分寺を立てゝ、官租を此に納れ、封戸を頒ち、毘盧遮那佛の像を東大寺に造り、天皇皇后皇太后皆な佛戒を受け、孝謙の朝に至り天皇上皇以下百官東大寺に至りて大佛の慶讃會を行ひ、淳仁の朝　藤原の仲麿觀音殿を興福寺に興す、又此の朝筑紫觀音寺と下野の藥師寺とに戒壇を立てゝ、東西邊陲の度者を受戒せしめ、稱德の朝には西大寺を立てられたり、是に因て之を觀れば佛教は當時唯一の國教にして、造寺寫經諸齋會は國家の重要なる事業なりしなり、殊に聖武帝が此がために國庫の藏を傾け給ひしは、後世史家が密に譏笑して佞佛者と誹議する所なりと雖も、當時の政策より推考せば決して非笑すべきことにあらず、其は兎にも角にも、聖武の朝は政治上奈良朝の最盛時期にして、又佛教が當初渡來以來、其絶頂に達したる第一期なり、今熟〻當代佛教の景勢を考ふるに、内には義淵、道慈、行基、玄昉、良辨、鑒眞の諸高僧ありて教義を宣揚し、弘法利生是れ務め、外には皇帝初め橘諸兄藤原氏の一族ありて、此を保護し、官令權威を以てこれを宣敷するが故に、萬事意の如くならざる無く、愛撫珍重し過ぎたる兒童が、遂に一種の頑童と成り菓子食べ過ぎたる子供が蛔蟲をわかすに至れるが如く、諸種の弊害其間に生じ、遂に道鏡の亂に至て其醜態を極むるに至れり。

蓋し當時の佛教は名譽の歸する所權威の集まる所なれば、希世の名僧輩出して、一方には佛陀の眞意を發揮し、熱心誠意に眞福音を傳ふる傍ら、一方には無耻の姦民が邪惡を墨染の衣に隱して、私利私福を營むの具に濫用するに至りしは、又免れざる數なりしなり、噫甘味の在る所蟻これに集り、花瓊花匂ふ牡丹の樹根常に毒蛇の蟠蜿するあるは悲

むべきの至に非ずや、曾て推古帝戊午の詔に曰く

夫道人尚犯法何以誨俗人故自今以後任僧正僧都仍應檢校僧尼

と、乃ち僧觀勒を僧正に鞍部德積を僧都に阿曇連を法頭に任じ給ひ、又文武の大寶令を發し給ふや、特に僧尼令を設けて

凡任法綱必須用德行能化徒衆道俗欽仰綱維法務者所擧徒衆皆連署牒官若有阿黨朋扇浪擧無德者百日苦使一任以後不得輒換若有過罰及老病不任者卽依上法簡換云云

と規定せらるゝを見ば、其の朋黨阿附佛敎を經節に掻きて姦曲を其間に弄する者ある、由來久しきを知るべきなり、殊に弓削道鏡が大政大臣禪師として猥りに俗權を弄するに至ては、其の弊害の浸潤する所殆んど計り難き者あり、豈に一大刷新一大革命を此間に施さずして止むべけんや。

桓武英明の資を以て此間に生れ玉ひ、東宮に立ち給ひし時、寶齡既に三十七、躊躇し玉ひしは早や四十五の御年なれば、御齡生は聖武天皇天平十三年なり、去れば孝謙淳仁の朝には既に靑年の君に在まして、親たり仲麿道鏡等の亂を見、奈良朝の末年に於ける社會上宗敎上の諸弊害を悉知し給ひたれば、其の寶位に上り給ふや、年來の經驗と天稟の英資と、智慧盛りの壯齡とを以て、奈何でか此の革進に躊躇し玉はんや、是に於て僧徒を戒飾し、非法を沙汰するの敕勅は、續々僧徒の頭上に降りぬ、蓋し　桓武の叡慮以爲へらく、若し政治上の改革を成就せんと欲せば先づ須らく當時信仰の中心となり、國民の思想を支配したる佛敎の積弊を洗滌し、僧尼を淘汰し、度者を吟味し、僧綱を精撰し、寺院の財務を監督して、姦曲の覬覦を其間に絶つに在りと、偏へに此點に向て熱心し給ひしが如し、彼の卽位以來度々勅詔を發して寺院の弊曲を誡しめ、僧尼の不法を禁じ、以て大に根本的改革の基礎を固めんとし給ひしが如き、固として此に由れり、延曆二年六月十五日の勅に曰く

定額諸寺其數有限私自營作先既立制比來所司寬縱曾不糺察如經年代無地不寺自今以後私立道場及將田宅園地捨施並賣易與寺主典以上解任見任不論自餘蔭贖決杖八十官司知

而不禁者亦與同罪

と同年十二月六日の勅に曰く

（上略）而今京内諸寺貪求利潤以宅取質廻利爲本非唯綱維越法抑亦京司阿容云云

同四年五月二十五日の勅に又曰く

出家之人本事行道今見僧衆多乖法旨或私定檀越出入閭巷或認稱佛驗大誤愚民非唯比丘之不愼教律是抑所司之不勤捉搦也不加嚴禁何整綱徒自今以後如有此類擯出外國云云

と以て　桓武が如何に當時腐敗せんとせる、否な腐敗の極に達せんとする寧樂朝佛教を鞭撻し、強硬手段を以て奈落に沈淪せんとする佛教を救濟し玉ひし乎を見るべし、即ち延暦十七年四月十五日の　勅に曰く

（上略）年分度者例取幼童頗習二經之旨未閑三乘之趣苟避課役繞忝緇徒遂棄戒法頓廢學業爾乃形似入道行同在家（中略）自今以後年分度者宜擇三十五以上（中略）又沙門之行護持戒律苟乖斯道豈曰佛弟子而今不崇勝業或事生產周旋閭里無異編戶衆庶以之輕慢聖教

其陵替非唯濁亂眞諦因亦違犯國典（中略）三綱知而不糺者與同罪（下略）

此等の勅詔に依て考ふれば、當時奈良朝の佛教が末流頗る濁りて佛教の本旨を忘れ、戒法を護らず學行を修めず、漫りに佛菩薩の靈驗を說て愚民を惑はし、閭巷の間に出入して營利の業に汲々たりし者多かりしや明なり、又斯く僧侶の品格下落するに從て、丁重嚴肅なりし齋會講式も、徒らに虛儀虛飾を衒ふの演藝會と成りしやの虞あるは、桓武が延暦二年十一月の詔令を以て、「梵唄讚頌は雅音正音以て眞乘に則り俗耳を警るに在り、此の頃僧尼の讚唱動もすれば則ち哀蕩叫吟し、曲折萬態、技藝を衒ふに似たり、頗る鄭衞に近し、有司諸寺に往きて濫唱を戒告せよ」と沙汰し玉へるに依りて明なり、彼の聖武の朝に盛へたりし南都の諸高僧は當時既に或は逝去し、或は老衰し、秋風一たび吹て禪林轉た落寞の感あり、其に繼げる善議、善殊、勤操、道證、護命、豐安等の諸師あり と雖も、何れも第二流の人物にして、單に師說を傳唱し舊慣を墨守して、寧樂佛教の餘喘を保持するに過ぎず、焉んぞ此の關頭に臨みて佛教の新生命を發揮し、桓武の英慮を

資けて精神界の革命を成就し、延暦の改革をして其實を全くする者を其の間に求むべけんや、今此の天職を負ふて閻浮提豐葦原の中つ國に誕生したる者は、卽ち聖最澄聖空海の二大偉人なりしなり

今や進みて少しく奈良朝より平安朝の初代に於ける宗教思想に論及せんに、當時最も勢力ありし宗教的觀念は輪囘轉生に伴ふ因果應報の觀念と、神佛同體の本地垂迹の思想なるべし、蓋し人生無常の悲觀は當時既に頗る强き者ありしや勿論なりと雖も、日本人の如く快活なる性質に富み、人情に厚き人民に於ては、到底此がために家を辭し妻子を棄てゝ山林に隱遁し、難行苦行に身を任せて、無明煩惱の迷雲を拂盡せんとするが如き容易に望み難き者あり、天下泰平に四海波治まりて浮世の快樂を平和の中に得らるゝ間は先づ絶無と稱すべき乎、故に古來我國に於ける隱遁者を見るに、他の厭世的人民の如く思索研究の結果、沈思冥想の到達點として、人生の無常を感じ、塵界を脫離し、松風露月の間に生涯を了するに至りし者甚だ少く、其の多數は最愛の妻子を失ひ、肝膽相許せる主君に離れ、若くは位地權勢の競爭に失墜し、失望落膽交〻至りて、遂に人事の味氣無きを悟りたるにあり、勿論彼の諸宗の開祖高僧の如く、眞面目に人生の問題を講究し佛旨の難有きを體して、佛道修行の道に入られたる者少からずと雖も、此等の人々は皆な自身の無常を悟り、其の得脫を希ふがための入道と稱するよりは、寧ろ廣く慈悲の光明に迷妄の衆生を攝取し、相俱に涅槃の樂果に到達せんず本願に驅られたる者なれば、其出家と言ふも强ち家族の絆累を斷ち、煩惱の桎梏を破りて、灰身滅智の境界に逍遙せんが爲にあらず、反て一小家族を捨てゝ宇宙的大家族を打建てんが爲のみ、一身一家の榮枯盛衰に留意せず、廣く人間の昇沈苦樂に同情の涙を絞りたる結果のみ、故に我國の名僧知識と稱讚せられ、國民の尊敬と感謝とを價ひする程の大僧伽は、皆な社會に住し其混濁を救濟するの道に一身を獻げて、而も其塵を受けず、人間のために熱涙紅血を灑ぎて、而も破らざるの人のみ、是れ或は我日本帝國が大乘相應の地と稱せらるゝ所以なるべくして、吾人が平安朝時代の佛敎に於ける重要なる觀念は、人生無常の悲觀に非ず

して反て他の二種の思想なりと謂ふ所以なり。

抑〻佛教渡來以後因果應報の觀念が、深く國民の腦裡に印刻せられたるは、彼の聖德太子が、崇峻天皇の崩御に際し「過去世の因業なり」と言給ひて、後世痛く儒家國學者の非議を被り玉ひたるが如き、或は是より先き敏達の朝に當り、瘡患頻りに流行し其患に罹る者皆な身を打擲かるゝが如く感じたりし時、人々が是れ即ち佛像を燒きたる罪ならむと言囃せしが如き、既に其觀念が明に、當代の人士に認識せられたる明證にあらずや、降て奈良朝に至り、佛教の勢力益〻擴張すると同時に、此の觀念强く深く成り行きしは言を待たず、彼の山上憶良が沈痾自哀の文に

竊以朝夕佃食山野者猶無災害而得度世、晝夜釣漁河海者尙有慶福而全經俗、汎乎我從胎生迄于今日、自有修善之志曾無作惡之心、所以禮拜三寶無日不動、敬重百神鮮夜有闕、嗟乎魏哉我有何罪遭此重疾、初沈痾已來年月稍多、是時年七十有四鬢髮斑白筋力尪羸、不但年老復如斯病、諺曰蒲瘡灌鹽短材截端此之謂也(下畧)

と云へるが如き、堅く善因善果惡因惡果の理わりを信じたる者にあらずんば、得て想起し能はざる觀念なり、彼の行基菩薩が

おろ〳〵と鳴く山鳥の聲聞けは父かとそ思ふ母かとそ思ふ

と詠せられたるも、亦因果應報と輪回轉生との觀念を根本思想と爲せる者にあらずや、其他前に述べたる寺觀造營伽藍建立の如き、皆な同一思想の發顯なりと言はざるべからず、尙是が遂に高尙なる道德思想の範圍を脫し、只管ら奇誕怪說を弄し、法華經を誦讀するを嘗りて口歪み、村民の材を掠めたる村長の、後世牛に生れ、漁夫の生れ乍ら火炎に燒れ、馬に重荷を負はせて惡報を得、蟹を放ちて恩を報せられし等、奇々怪々の謬信を唱ふるに至りしは即ち因果應報の觀念が、姦僧の狡智と愚俗の惑信と合體したる結果なりと云ふべし、次に本地垂迹の說に至ては、實に當時有識の佛教家をして滿腔の思想を傾注せしめたる大問題大思想なりしなり、其の起原に關しては世上種々の憶說ありと雖も、大抵行基これを唱へ最澄空海これを大成せりと云ふに歸するが如し、此に就き本朝

神社考に依れば　垂仁天皇二十六年十一月卯の日倭姫皇女託して曰く

各愼勿怠當諦聽神代人心淸淨而正直故無諸罪咎然自地神末萬人其心黑而吟于根國底國依之西天有眞人代皇天隨機說法彼詞將來是故神明停託宣讓如來佛者代神出世說法此神託宣譯化道于西方彼佛經文顯利益于神明故悲華經曰我滅度後於惡世中現大明神廣度衆生云云

と、然れども垂仁の御宇は佛法未だ渡來せず、否な曾に我國に傳らざるのみならず、支那韓土にさへ傳らざる時代なれば、此の託宣の眞僞は頗る疑ふべき者なり、縱し又これを眞實なりと許すも、此は唯神明託宣を止めて、如來の隨機說法に跡を禪るとの意味のみなれば、未だ直に此を以て全く本地垂迹の說なりと爲すべからず、此事を分明に託宣ありしは宇佐八幡大菩薩なり、今其の八幡大菩薩の緣起を尋ぬるに　欽明天皇三十一年(十二年と爲せる書もあり)豐前國廐の岸菱形の池の上の民家の兒に託して曰く

我は是れ第十六主譽田天皇廣幡八幡なり我を護國靈魂威身大自在王菩薩と名く迹を諸州の神明に垂る今顯に此地に在り

と、卽ち此を上に奏す、勅して祠を建て八方に八色の幡を立つ、故に託宣して八幡と號すと。

是れ明に神の口より日本の神明は菩薩の垂迹なりと宣へる者なり、其後ち　桓武帝延曆元年五月四日又託宣ありて

吾れ無量劫の中に三界に化生して方便を問らし衆生を導く名をば大自在王菩薩となむいふ

と、斯く宇佐八幡は本朝に於て、いち早く本地垂迹說を唱導し玉ひしが故に、或人は我國の地勢と文化傳來の跡とより推考し、佛敎は百濟より大和朝廷に傳はる以前に於て、既に久しく九州地方に傳播したる者ならむと言ふ、左もありなむ、要するに本地垂迹說は宇佐八幡の託宣に起因し、其後ち聖武の朝天平十三年、行基菩薩が伊勢神宮に於て受けたる

實相眞如之日輪照却生死之長夜本有常住之月輪爍破煩惱之迷雲我今逢難遭大願如渡得船又受難受寶珠如暗得炬師其持舍利藏埋飯高鄉以無邦家

の託宣と及び、其十一月十一日　聖武が親から受け玉ひし

本朝神國也可奉欽仰神明給也而日輪者大日如來也本地者盧遮那佛也衆生者悟之當歸依佛法也

の夢告とに依りて、其信仰を固め、其基礎を爲したる者と斷言して不可無かるべし、然れども本地垂迹說は我國民の宗教思想に取りて一大革命なり、宇佐八幡の一託宣果して爾かく强大なる勢力ありしや頗る疑無き能はず、縱令ひ又迷信深き當時に在りて、託宣は非常の力を有し能く此種の新信仰を造りたりと許すも、今一歩進みて其託宣が如何にして起るに至りし乎が寧ろ本地垂迹說の由來を說明する要點にあらずや、此に就き古來の歷史家は、概ね我國の僧侶が弘教の狡猾政手段畧より唱說し初めたりと斷言すと雖も、吾人は反て此れ印度傳來の舊說にして、彼の婆羅門教及び佛教に於ける化身說は、即ち其の源泉なることを信じて疑はず、其證は佛教の垂迹說たる敢て我朝のみにあらず、既に支那に於て頗る盛に唱導せられ、列子に於ける「西方有眞人」の眞人は佛陀なりと解釋せられたること由來久しく（其の當否は論外として）且つ老子孔子は儒童迦葉の二菩薩が、佛教輸入の先驅として迹を、震旦に垂れたる者と信ぜられたるは、實に僧侶間のみにあらざりしなり、是に因て之を觀れば不動明王を大日如來の化身、閻魔大王を地藏菩薩の化身と云ふも、譽田天皇を大自在王菩薩の垂迹と云ふも、孔子を儒童菩薩の再誕と云ふも、天照皇太神宮を大日如來の垂迹と云ひ、老子を迦葉菩薩の再來と唱ふるも、皆同一思想に基づく者にして、三國一致、三道融合、以て佛教の廣大無邊なる教義組織が能く宇宙の諸宗教を該羅するに堪へたる、宏量あるを示す者に外ならず、去れば聖空海は十住心の教義を唱導して、儒教の三綱五常を第二愚童持齊心の分齊に攝入し、秘密曼陀羅の一相、大日普門の一德に外ならずと判釋せり、何んぞ彼の基督教が至る處異教を排斥して、これを絕滅せずんば止まざると相似ざるの太甚しきや、故に吾人は此の本地垂

迹説を以て、僧侶が殊更ら弘教の手段政策として唱出したる者とのみ考へず、佛教々理の根本思想たる法報應化の四身説より演繹し來り、含弘宏量以て其の宇宙大の宗教たる實相を發揮し、遂に神佛融會して兩部神道なる者を生ずるに至りし、自然的進歩發達なりと信ず、尚其の結果が遂に佛教を日本化するに至り、日本の凡てを佛教化するに至りしは、其の佛教々理が能く我が固有の思想と國體とに冥合したるが爲のみ、凡神教的教理が、多神的的思想を容れて餘ありしが爲のみ、

以上の如くにして此等二大觀念は、無常的悲觀より遙かに勢力を有したること明なり、從て未來の觀念に就ては未だ、平安朝の後代若くは鎌倉時代の如く、眞面目なる嚴正忠實なる思索を經ざりし者の如し、加之ならず當時の上流社會が佛法王法相持して國家を經營せんと欲し、攘災祈福を以て佛教の專務と解したると、一般庶民の惑信甚だ深く、其智識の程度未だ甚だ幼稚にして、常に信を陰陽卜筮に取りたるとは、佛教を大に現世的ならしめ、所謂る加持祈禱を盛にし、鎮護國家を旨とする天台眞言兩宗の勃興を見るに至らしめたり、之を要するに奈良朝の末葉は政治も宗教も俱に、盈て虧け昇て降る時期に際し、腐敗の毒臭紛々として、是非とも一大改革の迫まれる者あり、此を爲し遂げたる者、即ち平安朝初代の光景なり。吾人は其の政治上の改革主として山部親王を得、宗教上の改革主として最澄空海の兩師を得たり、其改革の成功が那邊に及びし乎、又其の改革主の品性爲人の如何なりしやは、再び題を改めて論ずる處あるべく、今は唯だ吾が高祖と仰ぎ奉る聖空海に就て最も光榮あり多趣味なる御生涯の一班を描かむ而已。

雖然も大人は多方面なり、廬山八面の觀察を施すも、尚其其を盡す能はず、況んや偏狹なる吾眼光を以て、特に多方面なる高祖大師の面影を寫さんとす、其結果固より推知すべきなり、故に吾人は努めて評論的筆法を避け唯だ敬意蕭々其の御事歴を列記して高祖御一生の眞事實を傳へんと欲するのみ、彼の教學に就き文學に就き、美術品神作に就き、教育上の高見に就て、其眞を叩き其微を摘み、縱横談論するが如きは、世間別に其人あり、豈に今日吾人が容易に企及すべき所ならむや、唯其の一面の側觀が、事跡列記の間

に勢力現出するを得ば甚だ幸と爲すべきのみ。

吾人は今高祖の御傳記を物するに際し先づ其御一生を畫して四期と爲すの甚だ適切なるを信ず、曰く在俗時代、開宗時代、成功時代、退隱時代、是なり、其年月の如きは、記敍の間自ら明了なるべきなり。

第二章　在俗時代

其一　生家と御誕生と其幼時

古來英雄豪傑の士にして、往々貧困の間に生れ、艱難と戰ひ、輕侮と戰ひ、水火と戰ひ衣食と戰ひ、誘惑と戰ひ、所有る凡ての戰に打勝ちて、月桂冠を自己の頭上に戴くに至りし者少しとせず。是れ實に宗教社會が必然見るべきの運命にして、殊に西洋に於て其實例顯著なりとす、彼の基督が猶太の寒村に生れたるは論無く、マホメットも亦零落の間に長じぬ、然るに佛教は教主釋尊、既に人類のために九五の尊位を捨て玉ひし緣由に由るか、古來王族貴種の地位名譽權勢利慾を放棄して、專心一意佛法弘通に盡瘁したる人蓋少しとせず、他國の事例は且らく措き、今我國のみに就て觀察するも、諸宗の高祖と仰がれたる高僧にして門業の極めて卑賤なるは甚だ少く、皆相當の門閥血統の人に有らざるは無し（或老居士は諸宗高祖の傳記は頗る潤色したる者の如しと言はれたれども、容易に信據し難し）思ふに是れ佛教歷史上頗る注意すべき者にして、其本來の性質が至極平民的なるに拘らず、大に貴族的臭味を帶ぶるに至らしめし大源因にあらざる乎。

今熟〻高祖の家系を案ずるに兩說あるが如し、一は皇胤に出づと爲す者にして、彼の廣傳に俗姓佐伯直原出天孫と稱し、遊方記に父君姓佐伯直、名田公諱眞氏、源祖出天尊と言へる者是なり、思ふに之れ姓氏錄に佐伯直は、景行天皇の皇子稻背入彥命の後なりと有るに據れる者にて、頗る確實なるが如しと雖も、後年伴善男（大伴氏は善男の父國道に至て伴氏と改めたり）が、高祖の一族を指して吾支族と呼べるを見ば、其の天孫に非ざるや分明なれば、吾人は年譜の說に從ひ讃の佐伯氏亦た大伴氏の一族にして道臣命に出づるの說を取らむと欲す、然らば彼景行の朝、日本武尊に從ふて東夷を征したる、功

臣大伴武日、及び仲哀の朝に始て大連たりし大伴武持（或は武以）、允恭の朝以下に大連たりし、大伴室屋は皆大師が家の祖先にして、倭故連始めて允恭の朝に、讃岐國造と成りて彼國に下り、血統連綿として高祖の父佐伯直田公に至る、卽ち是れ奈良朝の末造なり、

家系の示す所に依れば、田公の下に

- 田公
  - 男　智泉法師の母
  - 女　大師　眞雅
  - 女　和氣宅成妻智證大師圓珍の母
  - 男　後僧正眞然の父

而して其長末二男の事迹知り難しと雖も、長男は蓋し家督相續の任に當りしなるべく、末男は後僧正眞然の父たりと云へば、又尋常人ならざりしならむ、而も當時讃の佐伯氏が頗る數運に屬し、國造の廢止と共に漸く祖先の餘光を失ひつゝありしは、一門出身の高僧皆な顯榮を極めたる後、僅に其宗族正三位行中納言兼民部卿、皇太后宮大夫伴宿禰善男の奏請に依りて、貞觀三年十一月十一日佐伯直の十一人に、佐伯宿禰の姓を賜ひ、左京職に隷せしめたるに依りて知るべし、然れ共其一族が頗る文學の業に達し、許多の鴛鳳を養成するに堪へたりしは、高祖大師を始め、道興大師實惠、法光大師眞雅、智證大師圓珍、海印寺道雄、後僧正眞然、及び弘法門下の阿闍、顏同と稱せられたる、智泉大法師の如き、諸高僧を輩出して、佛教界に偉大の光彩を添へたると同時に、高祖の外叔朝散太夫、阿刀大足は伊豫親王の學士と成り、一族佐伯直葛野酒麻呂、同野雄の幷に書博士たりしを以て知るべく　其一門より斯の如き諸高僧を出せしは、蓋し天下稀有の事實なるべきなり。

吾人は高祖の託胎誕生に關して、彼の例の神異不可思議的傳說の纏へる者多きを見る、諸傳說皆曰く、「父母一聖人來夢入懷中母乃娠成胎十二月而誕焉、時有種々靈瑞」と又大

江匡房卿大師之贊に「合掌而生」と稱す、其眞僞固より今日に判定すべからずと雖も、世出世を問はず、古來英雄豪傑の士が必らず持する奇瑞靈相は、後人の假託に出でゝ、反て其靈德を煩はす者多々なれば、決して盲目的に信奉すべき者にあらず、又偉人の偉人たるは、此等奇蹟靈瑞の怪光中に祭らるゝが爲に存する者にあらざれば、吾人は寧ろ此等の怪說を喋々して祖德を讃嘆するの甚だ卑劣なるを信ず、故に吾人は固より偉人が偉人の異相靈德を具ふべきを信ずと雖も、强て茲に此等を維記するの煩を學ばざるべし。

また其の誕生の年が、光仁天皇寶龜五年なるは諸記の一致する所なりと雖も、其月日に關しては、諸傳記多く明了の說を明さず、唯だ中性院賴瑜法印の眞俗雜記に、或傳云六月十五日生未知所據と云ふのみなりと雖も、今日眞言門徒通じて此說を奉じ。頃は水無月、望の月、圓圓々、光皎々たる間に、呱々の聲を上げられたる者と信ぜらる、當時後年の最澄傳敎大師は、琵琶湖邊漣波靜なる所に、八歲の春秋を迎へて、他日比叡山頭に天台の敎風を宣揚する因緣を爲し、中興の英主桓武天皇は、客年正月十四日寶壽三十七歲にて、東宮に立たせ玉ひ、靜に政治上の改革を企つる素を養ひ玉ひければ、是に於て平安朝の序幕に大伎倆を演じ、世出世兩界の大革進を遂行したる三大役者は、各重大なる天職を負ふて樂屋內に現はれたる者と謂べし。

高祖幼名を眞魚と呼ぶ幼より聰明岐嶷能く人事を知り（日本高僧傳）繦繈の間より種々の異靈ありしと傳へられ、長ぜらるゝに及で益〻多し、曰く二三歲の頃夜な〳〵、大佛頂經或は大隨求陀羅尼を誦せりと（本朝高僧傳）又御遺告に曰く

夫以吾昔在父母家時生年五六之間夢常見居座八葉蓮華之中諸佛共語雖然毋不語父母況語他人云々

或は七歲の時近鄕の出釋迦山（當時倭斯濃山と云ふ）に登り、捨身誓願して釋尊の出現證明を得玉ひたりと云ひ、或は延曆元年九歲の時、巡察使某讃州に下り、道に四天王蓋を捧げて大師を擁護するを見、馬を下りて敬拜せしと云ふ類枚擧に遑あらず、事往々後人の假託附會と思はるゝ者無きに非ずと雖も、亦悉く虛說と否定すべきにあらず、唯だ當

時の迷信多き社會に在りて、斯る種々の妄說を生ずるは當然の事、固より怪むべきにあらず、又佛敎の信仰が天下を風靡し、家庭に浸潤する深きに於ては、異常の少年が斯の如き信仰を起し、名譽あり理想に合する出世間的生活に入りて、幼少より薫染したる偉大の信仰を實現せんと欲し、雲の如く霞の如き希望に驅られて、廣大無邊の睿願を致す決して、絕無のことに非ざるべしと信ず、故に吾人は高祖が果して、世人の信ずる如き意味に於ての權化の菩薩なるや、否やを斷信する能はずと雖も、其の尋常少年と異にして、夙に異大の理想を有せられ、大人も得て考及する能はざる大希望大信仰を擁持せられたることを疑はず、故に此の意味に於ては權化の菩薩と言はましや、尙其の幼來異常の行爲と品格との具はり有りて、鄕黨族戚の光彩たりしは、父母之を鍾愛して貴物と呼び、鄕里尊稱して神童と稱へたるを以て分明なり、豈に吾人の蛇足を要せんや。

高祖が幼時の敎育の如何なりしやは勿論、其敎育の有無如何さへ今定かに知る能はざるは遺憾の至なりと言ふべし、此に關し曾て或老儒が「弘法大師も十五歲迄は素讀さへ爲さぬ人なりしと思はる」と語られたるを聞く、然れ其當時は既に久しく大學國學の制度備はり、孝謙の朝詔勅を下して、天下の家毎に必らず孝經一本を藏し、精讀講習せしめたる程にしあれば、今其の一族に幾多の博士學士を出したる佐伯氏の子弟、豈に十五歲迄無一丁字に過ぐべけんや、或人の如きは彼の三敎指歸にある余年志學就外氏阿二千石文學舅服膺鑽仰云々の文に拘泥したる者のみ、此の文の古語を襲用したるものにして文字通に解釋すべきや否やは、頗る疑の存する處なり、縱し又表舅の許に學びしは、指歸の文分明なれば、必然十五歲なりしとするも、表舅大足は伊豫親王の學士なりしとすれば、始終讚岐に在りしと思ふこと奈何あらむ、或は高祖十五歲京師に上られし時、初て外舅の許に學びしものにして、其以前既に舅氏の勸誘に由り、在國の日孜々俗典を研究せられし者と見る方、妥當なるにあらざる乎、斯は敢て無根の憶測にあらず、彼の遺告にも

爰外舅阿刀大足大夫等曰縱爲佛弟子不如出大學令習文書立身任此敎言受俗典少書等及

文章云云

廣傳には

生年十二舅從五位下伊豫親王學士阿刀宿禰大足語雙親曰縱成佛弟子不如暫學文章依彼教先讀論語孝經等

と云へれば、十二歳の時舅氏の勸誘を受けて外典を繙き始め、「余年志學」の文は、其後正しく舅氏に就て勉強せられし者と解釋すること、甚だ穩當の推測なりと信ず、勿論遺告の文は明に年月を記さざれば、未だ以て其の十二歳説を證する能はざるが如しと雖も、雙親既に久しく高祖の出家得度を希望し、高祖十二歳の時に至り、是を高祖に告げて幼來の決意を固めしめたるは、御遺告に

年始十二爰父母曰我子是昔可佛弟子以何知之夢見從天竺國聖人僧來入我等懷如是妊娠產生子也然則賣此子將作佛弟子吾若少之耳聞喜以泥土常作佛像造宅邊童堂安置彼內拳體爲事云々

と見えたるにて分明なり、去れば外舅の勸誘の來る必らず當時に在りしや必然なり、豈に十五歳を待て始て學に就かれむや、思ふに當時より漸次俗典を學び、或は佛理を聞き、其の穎達の資、固より邊鄙遠陲に躋躇すべき者にあらざれば、遂に十五歳の時、師を尋ねて京師に上り、俗典を外舅に聞き、佛教を石淵勤操に學びて大虛空藏求聞持法を受けられたる者なるべく、無一丁字の少年が學を尋ねて京師に上るが如きは到底想像すべからざる事柄にあらずや然るを古來高祖の始學は必らず外舅の許に於てせりと定め、又た阿刀氏は必らず讃岐に在りとのみ思へるが故に、所々の考證文に矛盾を感じ「余年志學」の文を解するに甚だ困難を極めたる者なるべし、故に吾人は高祖の學問が表舅阿刀氏の勸誘に始まり、氏の提撕の下に大に發達したるを信ずと雖も、唯だ表舅の力のみとは信ずる能はず、茲に當時の事情と佐伯阿刀兩氏の社會的地位を考へ、斷然十二歳の年、外舅の勸誘に俗典の稽古を始め、十五歳京師に上りて、外戚の許に其學を續くると同時に、勤操に就いて佛教を受け、孜々として將來の資料を貯へつゝあられしものと信ずる

り。

古來深山大澤、神氣の鍾まる處、多く稀有の英雄を生ず、然るに此の裏面的英雄は、反て玉藻寄る所の嶋、慘樟日を蔽くす邊浦に生れられたり、即ち讃州多度郡屏風浦にして、前には水鳴灘の群嶼點々として散在し、後には五岳中岳など並び立ち、

宇多津かたこの松かけに風立は嶋のかなたもひとへ白波　道範

なる所是れ高祖生誕の地なり、滄海變じて桑田と成り、今日に於て、固より當時の地勢を精細にする能はずと雖も、彼の誕生院善通寺は是れこの偉人が、生誕の宅跡に建立したる者にして、院號は高祖の誕生に取り、寺號は其七世の祖、善通の名に取れる者なりと云ふ、今其地を見るに善通寺は多度津を去ること二三里、而して多度津に隣れる海岸、別に屏風ヶ浦と呼ぶ處あれば、地理上の變化を考へざる者は、一見甚だ惑ふが如しと雖も、長日月の間に海潮の變化に依りて、屏風ヶ浦の名、遂に他方に遷りたる者の如し、故に土人は今尚ほ海港を去る二三里の地にある善通寺を、屏風ヶ浦と稱して怪まず、蓋し此地が屏風ヶ浦と稱せらるゝは、其の寺背に屏列せる山岳、恰も屏風を立てたるが如くなればなりと、思ふに今日多度津が、四國の要港たるが如く、往昔の屏風が浦は又一の要津にして、讃岐に於ける船舶出入の衝路に當りたれば、國造廢せられて後ち、地方の豪族となりし佐伯氏、また此處に家したる者なるべき乎、此の近傍に大師幼時の因緣を傳へたる遊仙ヶ原、出釋迦ヶ嶽、捨身山等皆な在り、今繁を恐れて委くは畧しつ。

其二　京畿の修學と脫俗

上に云へるが如く、幼時に於ける高祖の教育が、果して如何なりしや、今分明に推知する能はざるは、最も遺憾の極みなりと雖も、吾人は尚ほ御遺告等に由りて、家庭の狀態高祖の宿志、父母君の素願等を髣髴の間に認識し得るは望外の幸とせざるべからず、蓋し其家庭が佛教の信仰に厚く、文學の修養に便利に、且つ其門地系統よりするも、地方有數の家柄として、充分此大偉人の品性を涵養するに堪へたりしこと、決して疑ふべからず、又高祖が幼來脫俗の念勃々禁ずる能はず、區々たる一官人として畢生を俗了する

には、餘り偉大の天稟を有せられ、垂天の鳳翼、到底藩籬に翅つ者にあらざりしは、其幼時の御述懷、及び隣里鄕黨の敬推に知られ、尙御兩親共に、深く其の出家を希望せられしは、上に引ける年始十二云々の御遺告に明なり、嗚呼內因外緣相應じて、此の寧馨兒に天然自由の飛揚躍動を許さんとす、其鵬翼を南溟に垂るゝ固より智者を待て初めて知るに非ざるなり。

果然鳳雛は荊棘の間に棲まず、蛟龍永く池中の物に非ずして、遂に遙に京畿の空に飛躍し去りぬ、是れ其の後年廓朗たる太空を凌ぐの第一翼なりし、蓋し高祖が十五歲御上京のことは、諸傳記皆一致して疑無く、水鏡には「弘法大師讃岐より京へのぼり給ひき、生年十五歲にぞ成り玉ひし」と記し、又御遺告には然後及于生年十五入京初逢石淵贈僧正大師受大虛空藏等并能滿虛空藏法呂入心受持云々と說示せらる、然れども高祖は未だ決して出家得度し給ひしにはあらず、唯だ儒學研究の傍ら、時々佛敎の深義を聞き、或は祕法を傳承して心、密に益〻其れに向はれしのみ、十六十七の兩年は如何に過されけむ、諸傳記毫も記する所無しと雖も、孜々矻々儒を極め、道に入り、佛を尋ね、苦學精勵只管ら身神の鍛錬に餘念無く、且つ心常に脫塵の念あるも、外叔等の情義恩愛并び鎖れる留諫に遇ふて、斷然其志を果す能はず、身空しく忠孝の敎網に縛せられ乍ら、心獨り眞如法性の月に遊びて、理想と現實、人情と道念の衝突に幾多の苦惱を感じ、進んで浮世の羈絆を脫せん乎、幼來腦裡に薰染せる忠孝の觀念に乖くを如何せん、退て世俗に混せん乎電光朝露の感、我が精神を刺戟するを奈何せん、嗚呼去らむ乎去る能はず、居らむ乎居る能はず、進退兩つの間に歎息すること夥かりし者、豈に曾假名乞兒のみなりしならむや、當時高祖が如何に儒敎に感化せられ、忠孝の思想に支配され玉ひしことの深かりしやは、僅に三敎指歸を綴く者の直に感ずる所にして、指歸の全篇唯ゞ忠孝二字に對する分疏のみ、「縛我以五常索斷我以乖忠孝」したる輩に對する辯解のみ、故に或は「余思物情不一飛沈異性是故聖者驅人敎網三種所謂釋李孔也雖淺深有隔並皆聖說若入一羅何乖忠孝」と云ひ或は「僕聞小孝用力大孝不匱」と云ひ或は每爲國家先問冥福二親一切

悉讓陰功攄此恵福爲忠爲孝」と云ひ、一言一句皆な脱俗遁世の決して忠孝に叛く者に非ざるを辯護する者のみ、自己の思想斯の如く親誡の諫止斯の如し、故に心既に脱塵に決せるも、尚ほ容易に素服を脱する能はず、止む無く「二九游聽槐市拉雪螢於猶怠怒繩錐之不勤」の擧に出で又た御遺告に如く「經遊大學從直講講味酒淨成讀毛詩左傳尚昔復問左氏春秋於岡田博士博覽經史」の生活を營み、心ならずも、二三の春秋を俗界に消せられぬ然れども忠孝の思想は、既に舊時の思想なり、過去の信念なり、豈に長く新鮮躍活なる佛教的新信仰の前に拜跪せざるべき、又た呑象の大望ある乳獅、何んぞ淺薄卑近なる儒典に滿足すべき、乃ち朝市の榮華を厭ふ念益〻强く、風發の氣交〻動きて、遂に巖藪烟霞の間に塵世の喧擾を避け、靜に高遠幽妙なる人生問題に考及して、無上の眞福田を仰がひとするの念彌〻切に、其極三教指歸三卷に滿腔の鬱念を迸發し、出家の眞意を告げ、親誡の議論を說破し、斷然浮世の鐵鎖を截てば、天眞獨朗、諸法浩然として、更に局執すべき者有ることと無し、即ち近士と成りて、名を無空と改め、飄然去て南海の濱をあさり、名山絶嶽の處、嵯峨孤岸の勝に、俗腸を洗滌して茲に積年の企望を達せられたる者の如し。

吾人今密に當時、高祖の胸中に往來したる思想變遷の跡を忖度し參らすに、其脱塵の念幼より切々なりしと、父母共に其願望の深かりしは既に上に云へるが如し、然るに外舅阿刀氏は心密に、此の英敏聰邁なる外甥が、髮を落して腐敗せる僧界に投ずるを欲せず、寧ろ文學に依りて青雲の上に立たんことを望み、頻りに其脱俗の宿志を沮まんと試みたる者の如し。故に高祖は出京の當時、既に勤操和尚に値遇せられながら、容易く其本意を達する能はず、三四年間鬱々俗塵の間に、不平の日月を經過せられしのみならず、小獸を搏つに尚ほ全力を振ふ獅兒の本性は、凡ての事業に全幅の精神を注ぎ、儒教の研鑽に滿身の氣力を傾けたるが爲め、今突然其の儒教的思想を放却し、我精神の向ふ所を變更することと容易ならず、一朝儒教を捨て〻他教に歸入するには、忠孝の觀念餘り深く其腦髓に感銘し居りたる、是れ又た高祖の佛道歸入を遲滯せしめたる一源因ならずとせず、

然れども高祖上京の延暦七年は、傳教大師既に、奈良朝佛教の將來に挽歌を唱へて、叡山に登られしより茲に四年の春秋を經過し、山高く雲深き處に、根本中堂の基礎横へられ天台の教幢立られたりと雖も、未だ微々として天下の望を維ぐに足らず、回顧すれば、寧樂七大寺の伽藍は壯宏天を衝き、雲に聳ゆて輪奐の美を極め、玉欄朱楹金壁燦爛として、俗目を眩する者ありと雖も、僧風敗頽日光既に西山に傾きて、山々霞む入相の鐘に、諸行無常の理りを現はしたり。熱心誠意、佛恩を報じ眞福田を開拓せんと欲する者、此の情景を見て豈に一片憤慨の情無からむや、是に於て益〻自己が天職の重きを感じ、人世の味氣無きを歎じ、上古の俗教凡て眼前に利弱無し、矧んや一期の後ち何の功果乎あらむと儒教を破斥して、眞一文字に佛教の大道を志すと雖も、又直に寧樂佛教の濁流を追ふて、黄波を上ぐるを欲せず、優悠退て苦修練行の間に、自心佛の光明を開顯せんと決心せられし者の如し、即ち上京以後三四年間は、内心の希望と、外界の衝突と日夜に起り、煩悶苦惱殆んど其の達する所を知らざりしストラッグル時代にして、其衝突を避け撞着を和し、畢生の方針を決定せんがため、或は山でゝ儒に遊び、或は入りて佛を學び、一心不亂に三教を研究したる結果、益〻卑近僅に範を現世に垂れ、實際的生活に資するのみなる儒教の意に充たざるを感じ、柳腰娥眉に迷ふて有無の間に一生を俗了する陋を認めたると同時に、儒佛道異なりと雖も其精神同一にして、兩教の差異は其性質より寧ろ其淺深の程度に存することを悟り、是に漸く多年念頭に往來して決定し難かりし、内外の衝突を調和し得たれば、盍んぞ片時も逡巡躊躇を要すべき、直進猛前「金仙一乘法義益最幽深自他兼利濟誰忘獸與禽」と唱破して、博大遼廣なる佛教の大海に優游し、生來の宿志是に初めて成就するに至りし者の如し、嗚呼鯤魚遂に大洋に泳ぎ去りぬ、其快適果して如何ならむ。

蓋し初め高祖は、忠孝を以て人間無上の教範とし、且つ其の忠孝は儒説の域を出でざる者と考へられたる者の如し、然れども一方に於て道佛の研究彌〻進むに從ひ、其の幽玄深祕難解にしてパラドックスに富みたる厭世的思想は、漸く出世間的傾向ある偉少年の時

好に適し、次第に進みて次第に厭世的觀念に感染せらるゝや、悲觀的想念、油然湧くが如く胸に迫り、未だ圓熟を缺きたる少年期思想の常態として、殆んど其の極端に奔り、三界は火宅なり、家族は桎梏なり、自身は腐肉なり、女子は夜叉なり、告面省糞は畢竟小孝にして、差別相對の萬有相は皆我心を托するに足ざる者とし、空々寂々の裡に、悠久なる生命と、無爲の安穩とを得んと努められし者の如く、其後年に於ける寛容の氣、優揚の態を毫も當時の言動に認むる能はざるは、又以て厭世的觀念が如何に强く其思想を支配し居りし乎を知るべく、若し一たび三敎指歸を讀む者は、直に以て高祖が當時如何に浮世の權勢利欲快樂を卑まれたりし乎を見るべきなり、請ふ是より進みて其一班に及ばむ。

三敎指歸（原名聾瞽指歸）三卷は疑も無く、高祖の處女作にして、其生來十幾年間の思索研鑽は、滔々一帶の長流と成りて此一書に傾注せられたり。故に吾人は此書に依て、高祖が當時年少氣鋭、感情の焰炎々として外界と觸着する處、直に一道の火光を放ち、發憤感慨の念に驅られて、寧ろ此の虛儀虛飾に裝はれ、汚氣塵埃に埋るゝ現在を惡視せられ、齋直に其所思を貫かんとの斷信を得玉ふや、古來の習慣一族の家風、我に於て何かあらむとの大勇氣大信仰、脈々全身に漲りしを見拳ると同時に、其過去の思想と蘊蓄との果して如何なりしやを察知し參らするを得るなり。指歸の結構は既に諸人の知れる如く、龜毛先生（孔子）虛無隱士（老子）假名乞兒（釋尊）兎角公蛭牙公子等の虛構的人物を捉へ來り、假名乞兒を以て自ら擬し、筆を兎角公其の外蛭牙公子の暴戾放縱婬逸を悲みて敎誡を龜毛先生に請へるに起し、龜毛が敎訓諭誡の間に人倫五常の道を述べて、儒敎の道義を說き、其說の畢るや無虛隱士出でゝ、虛無自然の大道より無爲玄々の理に及び、其の鄒魯學派の平明切實より上りて、荊楚學派の濕晦暗幽に入り、儒の淺薄を笑破罵倒するや、假名乞兒又來りて、虛無隱士の猶は淺近膚薄なるを論じ、遂に佛陀の妙福音を開示して諸士の歸依入佛道に了る、其間だ皆な勸誡に言寄せて、三敎の敎綱宗要を示し、從淺至深の次第に依りて、百川の海に朝宗する趣を示し、諸道の根源皆な、渺茫無

涯、汪々たる佛敎の大洋に存し、乳水一味の甘露に限る旨を敎へられたる者なり。卽ち序分に於て自身が出家得度の止むべからざる所以を辯して、憤懣の逸氣を寫し、上卷は「三勸慇懃叵拒來命、今當傾竭微管標愚流之行迹盡涸拙鑫陳攝心之棟梁」に端を起して忠孝仁義の道を說き、中卷虛無隱士が「剏太上祕錄言邈儿耳天尊隱術如何妄說」云々の大氣焰に始まりて、老莊無爲の大道を論じ、下卷は卽ち高祖本懷の傾注する所、指歸三卷の骨目存する所にして「吾聞汝等論譬如鏤氷畫水有勞無益、何其劣哉龜毛之鴨脚未可爲短、隱士之鶴足不足爲長、汝等未聞覺王之敎法帝之道乎、吾當爲汝等略述細目、宜筌蹄王顚僞之鏡、早改葉公懼眞之迷、俱醒觸象之醉、並學獅吼之道」云々の慈論的辯論に靈山說法の本旨を開示し給ふや龜毛以下皆な感歎奇驚して

於是龜毛公等一懼一辱、且哀且笑、任舌俯仰逐音方圓、喜歡踊躍稱曰、吾等幸遇優曇之大阿闍梨、厚沐出世之最訓、往昔未聞後葉豈有、吾若不幸不遇和尙、永沉現欲空沒三途、今僅蒙提撕身心安敞、譬如霞蹤發響蛟開封、朝烏轉輪幽闇渙氷、彼周孔老莊之敎、何其偏膚哉云云

と讚歎歸命の聲を上げ、悉〳〵甚深微妙の釋敎に歸入すれば、假名乞兒の願滿ち、高祖述作の意足る。卽ち十韻の詩を作て、三敎の要旨を束ね、諸人の涵蓄に代へて曰く

居諸破冥夜、三敎褰痴心、性欲有多種、醫王異藥鍼、綱常由孔述、受習入槐林、變轉聊公授、依傳道觀臨、金仙一乘法、義益最幽深、自他兼利濟、誰忘歌與禽、春花樹下落、秋露葉前沉、逝水不能住、回風幾吐音、六塵能溺海、四德所歸岑、既知三界縛、何不去纓簪

と是れ一篇の大畧のみ、其の縱橫自在に故事を引用し、記事敍述の間だ、巧に高妙の敎理を說き、一々の字句皆悉く典故來歷の存するありて、一言一唱を苟もせず行文流麗奇思湧〳〵が如く、變幻出沒の妙、博覽强記の能、殆んど後人を驚絕せしむる者あり。

蓋し其著作年月に關して現今流行の本は歷然延曆十六年の文ありと雖も、尙種々異說の存するありて、此を決定するは、直に是れ高祖が思想變遷の跡を尋ね參らす者なれば、

吾人は必然茲に決定し置かざるべからざる重要問題なりと信ず、抑も指歸を繙て一讀直に其の脫塵の訣別文たるを疑ふ者あらざるべく、又御遺告にも明に

博覽經史專好佛經、恆思我之所習上古俗教、眼前都無利益、剃一期之後、此風已止、不如仰眞福田、因作三敎指歸三卷、成近士號無空云云

と說示し置かれ續日本後紀にも

十八遊學槐市、自此慧解日新、下筆成文、世傳三敎論、是信宿間所撰也云云

とあり以て其の剃髮染衣以前、卽ち十八九歲間の御著作なること毫も疑ふべきに非ず、然るに現時流布せる三敎指歸は勿論、高野山御影堂寶庫なる御眞蹟の稿本も、明に于時延曆十六年臘月一日也と書せられ、或は「未就所思忽經三八春秋也」の文在るあれば出家以後五歲の春秋を經過せる年の御著述と考られ、前後頗る撞着の觀無きに非ず、故に或は「延曆十六年」云々及び「忽經三八春秋也」の兩文を楯として、斷然二十四歲卽ち御剃髮後の述作と定むる者ありと雖も、吾人は飽迄脫俗の訣別書にして、高祖十八歲の年末、若くは十九歲の年初に當り、此一篇に數年ストラッグルの間に蓄積し給ひし沉思、冥想の結果を傾注して世出世間の別、大小忠孝の差を辨じ、親戚故舊に脫塵の眞意を告げ、恩愛苦の門を出でゝ、十九歲の春、漂然南海の濱涯、怒濤咆哮する間に淹留苦行し、或時は阿國大龍岳に躋り攀ぢて惡龍を退治し、或時は土州室戸崎に勤念して、明星の來影を感得し玉ひ、嚴冬の深雪に葛衣を着て精進道を顯はし、炎夏の極熱に穀漿を斷ちて、朝暮に懺悔せられし者なることを疑はず。彼の

法性の室戸ときけと我住めは有爲の波風立たぬ日そなき

と詠ぜられしも此時にやあらむ、何んぞ夫れ精進修行の間に洒々たる閑日月あるや。去れば高野山の眞蹟等に於て、明に延曆十六年の文あるは、既に誰人も一致せる如く、此の際匆卒信宿の間に書流されたる、聖壽指歸の未定稿本を訂正改竄して、一部秩然たる書籍となされたる時の年月なるや疑無し。蓋し聖壽指歸が出家以前の御作たること、既に御遺告の文證分明なる而已ならず、指歸の文章尙歷々其の面影を存し、決して一點

の疑難を挾むべきに非ず、彼の

看輕肥流水則電幻之歎忽起、見支離懸鶉則因果之哀不休、觸目勵我誰能係風、（中畧）
復有一表甥性則狠戾、鷹犬酒食晝夜爲樂、博戲遊俠以爲常事、顧其習性陶染所致也、

彼此兩事毎日起予云云

の如き、是れ豈に剃髪出家以後の文章ならむや、故に若し進で二十五歳出家說を取らば各別、最も正確なる二十歳出家說を捨てざる以上は、到底十八十九兩歳間の御著述たること疑ふべからず、嗚呼十八の弱齡既に此の大文章ありて、天下後世の耳目を驚し、此の大見識ありて世の瞶々者流を聾瞽視す、是れ眞に獅子は三日にして能く猛獸を搏にするの大手腕と大氣概とを併有する者。吾人は是に至て益〻高祖の大偉人たるに敬服せざる能はず、要するに指歸三卷は實に高祖が思想歷程の一轉化を報告し、多年腦漿を攪亂したるストラッグルの靜定を明示する者にして、眞俗間の去就に惱み、世出世の街巷に彷徨せしめし、紛想迷雲濶然として晴れ渡り、心虛朗廓、諸法宛然、柳は綠花は紅、鳥鳴き魚躍り、心地湛々澄める泉池の波無きが如く、是に專ら佛法修行の大道に精進する針路の確定したる者と言ふべし。

高祖は其の年南海より山陽に渡り、遠地邊土の修行を思立ちて、遂に東國に遊化し給ひ足跡の及ぶ所、餘薫を今日に殘せる者甚多く、伊豆國の走湯山、修善寺、皆な當寺の禪跡なりと傳へらる、左もありなむ、明る二十歳延曆十二年京畿に還り給ひ、勤操僧都に從ひ、和泉國槇尾山寺に得度剃髪して沙彌と成り、名を敎海と稱せらる、其月日は如何なりけむ例の如く雲隱れて分明ならぬぞ遺憾なる。

以上是れ高祖が在俗時代におかせらるゝ經歷の大畧なり、若夫れ學事の順序思想變化の跡に至りて到底、今日得て詳細にする能はずと雖、前來吾人が推測し奉る所決して大差有らざるべしと信ず。要するに幼來胸に佛陀の光明を感じ、指を金仙の大鼎に染め、口に慈悲の甘露を味はれたる高祖は、未だ情火焰々たる青年期、否な寧ろ少年期より、既に彼の肥馬に鞭ち輕裘を着て、東西に奔馳する世の官人を視て、忽ち電幻の歎を發せら

れ、不具貧賤の果報に苦み、日夜營々、衣食の獄に縛せらるゝ賤民を見ては、前世の戒行拙きを憐まれ、世尊が生老病死の四苦を救濟せんがため、斷然衰衣を脱して、檀特山に隱遁し、涅槃寂定の妙道を得給ひし如く、振意猛斷素服を脱却し、其の當時腐敗せる奈良朝佛教、驕奢婬逸を極めんため衣を緇くする僧侶の外に卓立して、天晴れ佛光の眞面目を發揮し、迷途の衆生を救濟せんず大悲願に驅られ、三教道異なりと雖も旨一なれば、寧ろ一時、世の小忠小孝に反するも、三世遍通の大忠孝を達するの方向を取らひと決定し給ひ、「小孝用力、大孝不匱」と喝破し「苟合其道何拘近局羅卜之拔母苦那舍之濟父憂寧非大孝哉、亦非善友哉」の語に滿腔の精神を皷吹し、數年の煩悶指歸の一篇に迸發せられたる者なれば、其愚想や必ず儒より道に進み、道より佛を高とし、世間の藩籬を脱して、出世の高空を翔るに至られしや分明なり。故に在俗時代に於ける高祖を知らむと欲せば、必ず三教指歸を讀ざるべからず、否な是れ其の唯一材料なり、殊に年少氣鋭の際に於ける憤懣の逸氣遂に溢れて、此の雄篇と成れるが故に、思想猛烈、論鋒鋭利、風の如く急湍の如く、逸氣奔放其の撞く所を破り、觸る所を摧かずんば止ざるの概あると共に、其の文章、華の咲き行く如く雲の飛ぶが如く、悉く遣るに四六駢麗の體を以てす、其絢爛典雅眼を奪ひ心を動し、靈活壯快なる宛然一箇の無韻情詩にして、又得易からざる所なり。故に吾人は今此の段を結ぶに當り、其一節を抽出して、文例を示すと共に、其思想傾向の一班を示すを禁ずる能はず。

飈埃脆體機散之朝、與春花以繽紛、翔風假命緣離之夕、共秋葉以紛紜、千金瑤質先尺波而沉黃扉、萬乘寶姿伴寸烟而厲玄微、嬋娟蛾眉逐霞以飛雲閣、的皪貝齒添露而戚零落傾城花眼忽尒爲緣苔之浮澤、垂珠麗耳倏然作松風之通谷、施朱紅唇辛爲青蠅之蹋蹴、染丹赤唇化爲烏鳥之哺宍、百媚巧咲枯嚇骨中更難可値、千嬌妙態腐爛體裏誰亦敢進、峨々漆髮縱横而爲藪上之流芥、纖々素手沉淪而作草中之腐敗、馥々蘭氣隨八風而以飛去、涓々臭液從九竅而沸擧、綢繆妻孥無異楚宋之夢、退神女、磊阿寶藏宛同鄭交之空承仙語、颼颼松風颼颼吹襟、玲忻之耳更在何所、玲瓏桂月可憐映面、視娛之心亦之何處。云

云

嗚呼是れ非凡の大學生將來の大宗教家が、春海洋々たる浮世の快夢を徹透して看破したる人生觀の一片なり、何んぞ夫れ悲觀の愴絶にして未だ弱冠に達せざる少年の觀察としては、異彩赫々千丈の紅焰あるや、尚は近時高祖の三教指歸を以て既に本地垂迹說の思想に考へ至られ、後年の兩部神道を豫想せられたる者の如く論ずる人ありと雖も、其は餘り穿鑿の議たるを免れず、彼の憤懣の逸氣は蓋し親戚間に於ける儒教思想家の留諫と、奈良朝佛教の腐敗等に對せる者と爲す方妥當なるを信ず、其の詳論に至ては後日に讓らむ。

第三章　開宗時代

其一　不二經探尋の十春秋

吾人が今是に開宗時代と稱する者は、其の延曆十二年癸酉、春秋二十歲にして、和泉國槇尾山寺の道場に沙彌の十戒七十二威儀を受け給ひ、名を敎海と改められしより、大同二年三十四歲、芽出度神密不二門を我朝に傳へ、勅に應じて始て京師に入り、平城帝に拜謁して留學の恩を謝し、密敎弘通の　勅許を得玉ひし上下十五年間を總括せるなり。蓋し祕密眞言宗は三國傳來の宗旨にして、敢て高祖の開創に非ずと雖も、高祖は實に敎理に於て大成の地位に立ち給ひ日本的眞言宗の開祖として、幾多の改造新說を師傳の上に加へられたるや疑ふ可らず　故に此を開宗と稱する敢て些の不可無るべしと信ず。又高祖の開宗事業は、決して大同二年の　勅許に了れるに非ず、僅に此時を以て其第一步を蹈出したる者なりと雖も、吾人が强て此時期を開宗時代と稱する者、彼の久米寺得經と、入唐求法と、弘敎　勅許とは是れ、實に眞言宗の基礎を我が蜻蛉州裡に橫へたる三大事にして、其後に於ける幾多の事業は、凡て此の三大事の結果を收めたる者、卽ち成功の時期に屬すべき者と信ずればなり。尙吾人は此時代を祕密不二經探尋の十春秋と、渡海求法の三春秋とに別ちて、高祖が胸に懷かれたる堅忍不撓の大道念大信仰と、正しく眞言祕密乘が、天照す日の本國に流布するに至りし次第とを敍述せんとす。

抑〻高祖御剃髮の年度に關しては、十九歳說二十歳說二十一歳說二十二歳說二十五歳說等の不同ありと雖も御遺告に

及二十歳從石淵勤操大師、向和泉國槇尾山寺、於此剃除髫髮云々

の明文歴然たる者あれば、敢て疑を容るゝを要せず、當時法名を教海と稱し、後ち如空と改めらる、然るに二十二歳の四月九日、東大寺具足戒の牒、既に空海稽首和南と記されたるを見る、即ち三年三度の御改名なり、而も其の何故に斯く屢〻法名を改められしや毫も聞く所無し、當時の世態如何を見れば、桓武皇帝精勵鋭意、最も熱心に弊政改革の方針を取りて、奈良朝末造の惰風を一掃し給ひ、高祖剃髮の翌年には、平安遷都の大事あり、其翌延暦十四年正月には、眞に征東大將軍の節刀を受けて奥羽征伐の途に上り、昨十三年功を畢へて振旅、京に歸りたる大伴弟麿等の參賀あり、傳教大師は德光赫々今や新都の鬼門を鎮じて、叡岳に雄視し、威風堂々天台の教風を宣揚して、其勢力既に朝野を傾動する者有る而已ならず、奈良の諸宗は其實況既に西山落日の勢なりと雖も、赫赫たる夕陽尚は俗目を眩す者あり、然るに高祖は未だ初學の一小沙彌、佛教海中の一滴に過ぎず、一は巖頭に長嘯せる猛虎の如く、一は巖下に匍匐せる乳獅の如く、其勢の懸絶到底比肩の地だも望むべからざるものゝ如し、然れ其金毛の獅兒豈に搏象の念無からむや、年少黄口の比丘、眼中既に權實大乘性相の諸宗を無視し、眼光高く天の一方を睥睨せり、其の剃髮の際佛前に發せられたる誓願に曰く。

吾從佛法常求尋要、三乘十二部經心神有疑、未以爲決、唯願三世十方諸佛、示我不二、一心祈感、夢有人告曰、於此有經、名大毘盧遮那經是乃所要也云々

と即ち知るべし、當時既に大小權實三乘一乘の諸經論を涉獵し、國内に流通せる諸宗の奥義を極めて、皆未だ其意に滿たず、更に不二眞實の妙典を尋求せられつゝ有りしを。

嗚呼年弱冠、既に世出世内外の諸教に通達し、其蘊奥に至らる、當時に在りては實に驚く〻べき早熟速達と謂ふべく、殊に深く人生問題に考及して、生死解脱の直路が、闡菊美を爭へる南北兩宗中に存せざるを覺り、瑜伽眞實の大道を尋ねて、此を我國性に適應せ

しめ、時勢の風潮に勘へて革新的旗幟を揚げんとせらる、其識見抱負殆んど匹儔無からむを疑ふなり。蓋し最澄大師法華經を得て如來出世の本懷、一心三觀の妙門と渴仰せらるゝの時、高祖は更に進んで唯一不二の眞佛乘を得むと祈誓し、尋求探問毫も意を眼前の諸經に觸れさせられず、是れ高祖が物の源極に達せずんば、止まざる大勇猛心の致す所にして、即ち後年最澄大師が、高祖の門に詣りて、祕密灌頂を受くるの止無き所以なりし。

延曆十四年御年二十二歲、南都東大寺戒壇院に於て具足戒を受らる、寧樂七大寺の大德皆な法席に臨みて、鏘儀嚴重萬事慇懃を極めたり、是れ或は南都の諸德が、偉傑高祖の如き新人物を得て、彼の痛く奈良の舊宗を排擊する、新都北嶺の天台大師傳敎に當らしめん底意に非ざりし乎、嗚呼疑に聾聾指歸に依りて道俗を惑かしたる偉少年は、是に嚴然たる大僧と成り、靜に氣を養ふて垂天の翼を振ふの期を待てるなり。

然れ共前年夢告を被りたる、不二の法門大毘盧遮那經は、未だ感得せられず、前途茫々雲山幾千ぞ、歲月匆々として白駒の隙を過ぐるが如く、探問頗る捗むる間に忽ち經過す幾春秋、「未だ思ふ所に就かずして、忽に三八の春秋を經たり」の一句、此間の苦悶と消息とを漏し得て餘あり、今諸傳記を案ずるに二十二歲東大寺受戒より、三十歲久米寺得經に至る迄、前後八年間唯だ僅に三敎指歸の再治訂正と、阿州大龍寺造營の二事を傳ふる有るのみ、思ふに彼の靈夢の敎旨に從ひ、佛陀の無妄語を固信して、唯一心に祕密大日經の所在を尋ねて、東西に跋涉し南北に奔走し、佛陀と衆生と自身との爲に、幾多の苦艱を凌がれし者か、遊方記是を記して曰く

師思念域中潯尋經無覓處、雖然佛無妄語指授豈唐捐乎、信心決定念慮愈堅云々

と實にさも有りなむ、雙肩に億萬群生の解脫と救濟とを擔ふて、慈氏下生の曉に至らむとするの救世者、豈に這般の決意無くして可ならむや、然りと雖も信心決定意思確立、自己の所信を貫徹せずんば止まざるの不動心、固より深く敬服せざるべからず。嗚呼孔席暖なるに遑あらず、墨突黔きを待たず、基督が敎に殉じて十字架上に斃れたる、ソク

ラテスが所信を守りて毒に死せる、薩埵が四句の偈を求めて身を雪山の餓虎に與へたる、大事業には大障礙あり、大誘惑あり、大試驗あり、大鍛錬ありて大々的修行を要すること、世出世東西其揆一なり、高祖が祕密大乘の法門を感得せんとして、探問周遊前後十星霜を費されたる者、豈に偶然ならむや。

漸くにして希望の曙光は頭上に輝き、南天鐵塔の鐵扉鐵鎖は、時と共に開かれんとせり、是に人あり告て曰く

大和國久米之道場昔天竺聖人遥見我東域有佛法相應之地來普問四裔八埏擇止彼地若能祈必有靈應云々

と高祖大に歡喜して高市郡久米寺に赴き、誓願を凝して言はく

我れ諸佛の寂を扣くに、門々人ありて應ふること恰も鐘谷の響の如し。救世大悲に歸命し奉る、往昔指授し給ひし所の經を尋ねて、徧く域中を問るも未だ其經を得ず、願くは我ために其所在を示し給へ。

と右終りて佛前に退座し更に血誓して「我此願を成就せずんば此座を起ず」と身心を佛陀の冥應に供へ、晝夜凝然として目子を動せず、以て其の不二法門に殉ずるの決意を固め給ふ。一夕聲あり告て曰く

佛慈機に應じて汝の願に隨ふ、汝が求むる所の經は露柱の柱心に韞む。

と即ち物色して其の東塔心柱の蠹蝕に

馱都是釋迦遺身、經王亦遮那之全體也、然而小國之邊域大機未熟留此法於是地正待機待時矣未來有弘法利生菩薩必來可恢此經云々

の銘記あるを見給ひ、歡喜踴躍直に封處を鑿て、大毘盧遮那神變加持經一部七卷を得られぬ、打播て始終を覽らるゝに疑雲濛々胸に充ち、種々凝滯ありと雖も、我國既に彈問するの人無し、是に於て即ち、入唐求法の念願鬱勃として禁ずる能はず、遂に此事を勅操和尚に計らるゝに至りぬ。嗚呼佛意と境遇とは遂に高祖を導きて最高臺に上ずんば措さらむとするなり、

蓋し不二經探尋の十春秋は高祖の御傳記中最も暗黑の時代なり、密雲重疊、深く其の幽跡を鎖して殆んど窺知する處有ざらしめ、從て其の決して得意の境遇に非ざりしを推知せしむ。思ふに高祖當時の生活と思想とは、恰も千四百九十二年八月三日、萬衆喚采の中にパロス港を出發し、カナリー島に碇泊して遂に、渺々無涯の大西洋に浮びたるコロンブスの如き乎。胸には不動の信念と前途の希望とを擁し、智慧の光は目的の彼岸を示すと雖ども身は漫々茫々たる太洋の一浮游、勇猛精進は遂に能く萬里の波濤を凌ぎて、希望を達するを信ずと雖も、他人は容易に我言の虛ならざるを信ぜず、滿身の勇氣と信念とは、毫も消する無しと雖も、人間の弱點として時々、自からも危虞曖昧の念萌すを如何せん。內には煩惱惡魔の誘惑あり、外には雲山溟濤の我を遮ぎるあり、誰か此間に在りて吾が成功を導く者ぞ、他無し唯だ一大信仰の光明ある而已、コロンブスは滿船の反對と陰謀と在るに拘はらず、固く地球圓形の說を信じて針路を轉ぜず、高祖は世人の嘲笑と苦言とに顧みず、偏へに佛陀の不虛妄を仰ぎて勇進せらる、不出世の資に非ずんば豈に能く斯の如くならむや。

吾人は告白す、吾人は到底此の暗黑期に於ける、高祖の行跡を今日に確知する能はざるを、然れ共當時の事情と、今日に遺存せる斷傳零說を推考せば、復た其陰影を髣髴し難きに非ず。抑〻當時高祖唯一の志望は、不二經の探當に在り、故に其年月の多數が行脚周遊に費されたるや疑を要せず、而も邊陬遐浦は固より斯る妙經の存すべき樣非ざれば、其の周遊必らず近畿南海の間ならむと憶はる。而して親鸞日蓮の諸師が先づ叡岳高野を歷遊して其親地を鍛錬したるが如く、高祖は內心固より寧樂佛敎に嚮はずと雖も。尙ほ時々奈良七大寺の間に往來して、沙漠の中に金塊を拾得せんと試みられし事あるや疑無し、故に依然籍を大安寺に置て、身は漂々雲水の行くに委せられし者なり、加之ならず、當時に於ける高祖の地位を忖度し參らすに、未だ渺々たる一小沙門にして、恆沙の一粒海洋の一滴に過ぎず、亨々たる千載の松樹、僅に雙葉の芽を萌したる而已、未だ獨立して社會の視聽を惹くに足らず、殊に彼の直情嚴固なる傳敎に於ては、十九歲の年斷然衣

を振ふて叡岳に上り、高祖當時の年配に於て、既に、根本立脚の地を得たりと雖も、頗る優和温雅の性情なる高祖は、未だ容易に斯般の英斷を許さゞりし乎、將た事情の不可なる者有りし乎、毫も自家立脚の地位を有せざれば、到底嶋を負ふて一大咆哮を上ぐる能はず。是れ其當時最澄師に對して、數着を輸せざるを得ざりし所以なりとす。

嗚呼寧樂の七大寺は固より吾が欲する所に非ず、去りとて根本立脚の地は未だ得られず、況んや胸は懐疑の雲に鎖されて、三乘十二部經心神疑ありと雖も、不二眞實の光明容易く吾胸を照さず、前途茫々雲山幾千ぞ、卓犖不出の士と云へども、豈に躊躇の念萌す無きを得むや。是れ或は高祖が未だ斷然、寧樂佛敎と絶つ能はざりし所以ならざる乎。

吾人は當時高祖が唯だ莽の如くに諸州に遊び、蓬の如く異境に轉じ、或時は金巖に登り或時は石峰に跨て、益〻苦修錬行以て心神の鍛錬を致し、佛陀の冥護を祈られたるを想ふ、而も此間に三敎指歸の訂正成り、智泉法師の來從ありしを見れば、往々定住の時有りしや疑ふべからず。而して其定住の地は葢し、大安寺若くは槇尾山寺の間なりし乎。

吾人は其の入唐上表の文が大安寺沙門と記され。又歸朝入京の際直に槇尾山寺に入られたるを見て、必然其兩寺の内なりしを推定し得るなり。嗚呼大安寺は勤操和尚の寺、槇尾は自身剃髮の道場、高祖にして當時尚ほ、其他に自家獨立の根據地を占領し給ふ能はざりしを見ば、未だ如何に其勢力の微弱にして、惟だ偉才大器、望を將來に囑すべき一青年僧を以て、社會より遇せられ給ひしやを知るべく、自ら不二宗の開祖を以て任ずる者、彼の最澄の勢威、德望駸々として朝野に漫るを見、飜て自身の位地と年齒とに考及べば、豈に悲憤慷慨の念に堪へざる無からむや。吾人は高祖の後半期に於ける異常の成功と收果とが必らず此の流離失意の際に於ける發憤激厲の致す所たるを信ずる者なり。

年譜は延曆十七年高祖二十五歳の條下に大龍寺緣起を引て

于時延曆十七年五月日應桓武天皇之御願、阿波國司藤原朝臣文山、謹承綸旨、建當伽藍、爰大師自彫刻諸佛諸尊數體形像、安置山上山下五所伽藍、是則酬弟子多生之宿願、致皇帝永代之歸依云云

と言ひ　桓武皇帝、高祖の遊跡に就て伽藍を建立せられ、高祖既に頗る皇帝の歸依を得玉ひしが如く記すと雖も、當時高祖の位地德望は決して、九重雲深き邊に達するに至らず、思ふに是れ例の浮誇張大なる緣起的記載に留らむ而已

（併し此緣起は眞然僧正の作と稱せられ、強ち一槩に排斥し難き邊無きに非ず、若し此緣起眞ならば、大に高祖當時の位地を明了ならしむる者なり尙は追考せむ）

要するに當十春秋は、春海洋々滿帆の順風潮流を追ふて進める高祖の生涯中に、少しく黑雲逆風の變調を挿入したる者にして、稍や失意逆境の時たるに相違非ずと雖も、又決して社會の風潮と箇人の意思との衝突、若くは源空、日蓮、親鸞、の場合に於けるが如き、外界の大勢力と吾信仰との衝突にも非ず、畢竟鍊磨鍛冶の爲に天が斯人に下したる、試金石と鐵鎚とに外ならず。故に縱令ひ內心の苦心、焦慮の激甚なる者有りしとするも、毫も呑天沃日の涙、排山投海の風を胃すの悲壯慘劇を見る能はず、是れ吾人が高祖の傳記を拜するの際、每に物足らぬ心地する所以なり、然も是れ時勢の好運兒、宗敎改革の受命者として、我國平安朝の精神的潮流を導くべく、又其に乘すべく定められたる高祖に於ては蓋し已む無き所ならん乎。

今や吾人は終に臨みて一言大日經の傳來に及ばざるべからず、抑〻善無畏三藏斯經を持ちて我國に渡來せられしは、我宗の傳說と所々の遺跡とに徵して分明なりと雖も、或一派の傳說は西大寺德誡法師入唐の日、善無畏三藏より此經を授けられて我國に請來し、久米寺の塔裡に納められし者なりと云ふ。吾人は未だ此點に關して充分の研究を盡さず、從て容易に何れとも斷定する能はずと雖も、寧ろ三藏御自身の傳來と決定し留くの妥當なるを信ずるなり。

古記に依れば善無畏三藏は中天竺の一王子にして一時九五の位に陞り、蒼生に君臨せられしも、實弟の謀叛に人世の味氣無きを感じて、斷然王位を脫蹤し、龍智の門下に佛法を學び、祕敎の玄底を探りて、唐の玄宗開元四年（我元正天皇靈龜二年）長安に著し、支那に於ける密敎傳道上に偉大の功績を殘され、尙進んで開元十六年（神龜五年）我國に渡

り、眞言教弘通を企てられしも、機緣未だ熟せず、止無く錫を大和久米寺に留めて一寺を創立し、傳來の經卷を是に納めて、唐に歸られたりと、此の經是れ今高祖が感得せられたる大日經なり、嗚呼高祖果して無畏の所謂る、弘法利生の菩薩なりしや否や知らずと雖も、其行蹟を以てこれを推せば、卽ち其人なり、勅諡して弘法大師と言はれし者豈に偶然ならむや。

（延曆十四年內侍の宣に、昔天竺上人雖垂降臨不勅請受、徒遷堅舟遂令眞言秘法絕而無傳云云の文あり是れ三藏の來朝に關して頗る考べき證文なり）

其二、入唐留學の三春秋

既に朝野の信仰を一身に集めんとし、殊に　桓武英主の聖意に投じたる最澄は、延曆二十一年九月を以て入唐の勅許を得て、彌〻畢生の希望を遂せんとせり、高祖は其翌二十二年を以て、遂に不二眞實の經典に探到されたりと雖も、疑義紛出而して一人の彈問すべき無し、是に於て乎彼れの勅許に藪せられたる、入唐求法の念慮は一層鬱勃禁じ難く、遂に勤操和尙に謀り、和尙爲に表を具して入唐求法の勅許を請へり、其表に曰く

去十四年登戒壇僧空海、受諸佛之指授、所溫之經在大和國久米道場、得無畏三藏之遊趾、彼三藏讖曰、此地大機未熟、止經待時來世有弘法利生菩薩來可恢此經云々　然空海受諸佛之指授、當古聖人之讖文、今國家產此靈恐天下泰平之豫標乎、伏請陛下勅擢求法、令攻玄珠於異邦致大慶之材云云

と是れ延曆二十三年五月上旬なり、澄師は髮に　桓武の內勅を被り、和氣弘世と議りて表面の勅許を請ひ、高祖は漸く勤操の力に依りて此の奏請を致す、兩師の當時如何に其地位を異にせし乎を知るべきなり。五月十二日勤操に伴はれて朝覲し、帝に謁して具さに大經感得の因緣を奏し、入唐の勅許を得て直に其準備を整へ、大使の發船を是れ待てり、嗚呼金獅兒漸く時を得て將さに大陸に飛躍するの機會に接せり胸感幾許そ。

六月朔遣唐大使藤原朝臣葛野麻呂（唐人に對し其名の雅醇を欲して賀能と稱せり、當時の唐化主義は前年の歐化主義の如し）の船に乘じ、橘逸勢等と共に難波を發す、（賀能

の出發は通常五月と云ふ、思ふに五月京師を發し難波出船は六月朔日なりし乎）前年勅許を被りたる最澄師は昨年風に拒まれて出發し得ず、今年又た副使の船に乘じたるが爲め、七月漸く難波を發し、遂に高祖に入唐の先鞭を着けられぬ。蓋し澄師は既に叡岳の主となり、內供奉に列し其入唐するや沙彌義眞を伴ふて、求法譯語の僧とし、勢威堂々たるに反して、高祖は唯た大安寺の一衆僧、孤影颯然上句表を奏し、中旬許を得、下旬途に上る、其輕易到底一介の書生が、特旨の下に入唐の殊遇を辱くしたるが如き觀あり、彼の當時智泉を伴ひ眞紹を從へたりと稱するが如き頗る疑ふべきの極と言ふべきなり。

海上の風波は非常なりき、暴雨帆を破り戒風柁を折り、凱風朝屠擺肝耽羅之狠心、北風夕發失膽留求之虎性（耽羅は朝鮮濟州島、留求は琉球なり）の間を出入して、八月十日漸く福州（今日の福建省福州）に漂着しぬ、傳へ言ふ此時大使葛野麻呂手書を呈して來聘の意を通じ、且つ明州（今日の浙江省寧波）に着すべき者、風に遇ふて此地に漂着せし由を陳ずるも、州吏深く其言を疑ひ、書辭又た大國の使人たるに應せずとして容易に上陸を許さず、空しく船中に淹留して文書の往復に二月餘を消す、十月十二日大使遂に高祖に囑して書翰を草せしむるや、州吏一見其文に感じ直に意解け情通じ、館に請じて優遇を極めたりと、今其文を見るに初め

高山澹默禽獸不告勞而投歸、深水不言魚龍不憚捲逐赴（中略）伏惟大唐聖朝霜露所均、皇王宣宅、明王繼武、聖帝重興、掩頓九野牢籠八紘

と先づ彼を揚げて呈書の體を備へ、兼て彼が中華的浮誇心に投じ、次で航海中の艱難を精述し一轉して

又大唐之遇日本也、雖云八紘雲會膝步高臺、七戎霧合稽顙魏闕、而於我國使也殊私曲成待此上客、面對龍顏自承慈諭。

と充分自己の地歩を占め、次に

載籍所傳東方有國、其人恕直禮義之鄉、君子之國蓋爲此矣

と氣燄萬丈、更に

伏願垂柔遠之恵、顧好隣之義、縱其習俗、不怪常風。

と人情の極致に訴へ、滔々數百言整々として殆んど其の留まる所を知らず、彼の禮文を尊ぶ支那人を感動せしめたる者、決して偶然ならざるを信ずるなり。

此年十二月二十三日、長安城に入る、唐德宗貞元二十年なり、翌永貞元年仲春十一日大使等勅を本朝に旋へす、高祖は留りて西明寺永忠和尚の故院に寓し、城中を歴問して、名德を訪ね、偶〻青龍寺東塔院慧果和尚に値遇し、直に其門に入り玉ひぬ。

當時眞言宗は無畏金剛智不空三藏の後を受けて、其勢頗る盛なる者あり。殊に不空は玄弉以後の大譯者として、玄宗皇帝の歸依僧として、一時朝野の信仰を傾動し、眞言宗は直に帝室の宗教と成り。長安城は眞言密教の中心と成り、惠果和尚は實に其跡を繼ぎ、眞言正統の第七祖として、帝室の護持僧として、當時最も德望高かりし碩德なり、胸には兩部の祕奥を藏め、理智の法水を湛へ、四曼三密の法門悉く其掌に存し、求法の輩雲の集る如く、訶陵の辨弘新羅の惠日、劍南の惟上、河北の義圓、其他智璨、玫瑰、操敏、堅通、皆な三昧耶に入て毘鉢に達し、印可紹接の者には義明供奉あり、俗弟子には代宗皇帝を始め、金枝玉葉皆な其德に歸し實に一代の宗、四海の珍たり、然るに高祖いま海外求法の小沙門を以て、突然和尚に謁するや、和尚莞爾として告げらく

我先知汝來相待久矣、今日相見大好、報命欲竭無人付法、必須速辨香華入灌頂壇。

と高祖の歡喜知べきなり。即ち六月上旬學法灌頂壇に入り、大悲胎藏大曼荼羅に臨みて、五部の祕灌三密の加持を受け、七月上旬更に金剛界の壇に入り玉ひぬ、和尚の滿足高祖の歡喜如何なりけむ、其の入壇授華得佛の際、兩度共に中臺毘盧遮那の上に着く、和尚即ち讃じて曰く不可思議々々々々と感歎再三なりきとぞ。八月上旬遂に傳法阿闍梨の職位を授けられたり、此日五百の齋會を設けて普く四衆を供養し、青龍寺大興善寺の供奉大德皆な隨喜して齋筵に臨み、法儀の嚴式を極めたりと、嗚呼高祖遠來の孤客を以て、他の先學に越え、僅々數月の間に兩部の大法を受學し、室に入り奥を極め其玄底を盡すこと、恰も瀉瓶の如し。素養深きに非ずんば、豈に能ふ所ならむや、殊に其がため毫も同學の

猶忌嫉視を受くること無く、反て此の隨喜臨筵の榮を得られたる、以て其德望隆々、能く同門を壓したる者有るを見るべく、彼の和尚門下の俗弟子吳殷が

此沙門是非凡徒、三地菩薩也、內具大乘心、外示小國沙門相。

と歎稱措ざりし者、又過評に非ざるなり。

大法の授受是に終るや、和尚更に告げ玉はく、眞言祕藏之經疏隱密不假圖畫不能相傳と、即ち供奉の丹青經生鑄博士を喚集めて、祕密の經疏、陀羅尼佛像佛器曼陀羅等を書寫鑄造せしめ、圖像寫經皆な老和尚指揮の下に成る、斯くて諸般の業終るの日、和尚親しく遺誨を垂れて曰く、

如今此土緣盡不能久住、宜此兩部大曼陀羅一百餘部金剛乘法、及三藏轉附之物、並供養具等請歸本鄉流傳海內、纔見汝來命恐不足、今則授法有經像在功畢、早歸鄉國以奉國家、流布天下增蒼生福、然則四海泰萬人樂、是則報佛恩、報師恩爲國忠也、於家孝也。（中略）努力々々。

と嗚呼高祖半生の志望是に達し、出家修道の本懷たる大忠大孝を報ずるの機會是に至りぬ、殊に老和尚最後の慈誨は、是れ高祖畢生の道途を指導したる者、其の奉國家と云ひ、增蒼生福と云へる者、是れ密宗本來の眞面目にして、高祖の一生、眞言宗の盡未來際、豈に此言の實現に存する無きを知らむや。

斯くして高祖は不二法門の玄底を極め、歡天喜地も啻ならざる間に、宿契深き恩師老和尚は、其年乙酉師走望の日、住世六十、僧夏四十の春秋に浮世の名殘を留め、淹然として長逝せられぬ。思ふに高祖が和尚の門下に投ぜられたるは、春光駘蕩百花爛熳たる彌生の空にや有りけむ、而して其冬忽ち幽明境を異にし、顧れば法契僅か一歲にだも及ばず、師資の情誼豈に懷に憮然たる無らむや、是に於て乎追慕の切情を滿足し、師恩の萬一を奉答せんがため、碑文を撰し墓碣を立てゝ、親ら其碑を書し以て追思哀慕の情を陳べらる。蓋し此文は高祖傑作の隨一なるべし、嗚呼當時唐代の盛化、漸く衰へたりと雖も、文運の隆興駸々乎として、杜李韓柳輩出の前後に當り、多士濟々、學士文官雲の如くな

る間に立ち、高祖海外の客納を以て、此の大事に當る、以て其徒が如何に高祖の大手腕に敬服したりし乎を見るべく、又其の漢文を彼土に留めて、唐人の感歎を博したるが如き、寔に國光を異邦に輝す者と云ふべきなり。

追思の營み既に了りて後ち諸名師を歴問し玉ひ、越州に遊び會稽神秀和尚の許に於て、華嚴章疏二部を傳承し、又長安城醴泉寺に於て、罽賓國(迦濕彌流なり)般若三藏牟尼室利三藏及び、南天竺婆羅門等に値遇して種々有益の談を聞き、又其經論を請受せらる。高祖が新華嚴六波羅蜜經等、及び巨多の梵夾を般若三藏より受けられたるは當時に在り、其他順曉曇貞(俱に不空三藏の資惠果和尚の同門なり)の如き皆な親しく會話せられたる所なりと雖も、高祖が惠果和尚以外に於て、請益最も多きは般若三藏にして性戀集にも

著草履歴城中、幸遇中天竺般若三藏及内供奉惠果大阿闍梨、膝歩接足仰彼甘露。云云

と稱せらるゝを視ば、其の高祖が三藏を師視し、敬重せられたるの深きを知るべし。思ふに兩部の大法は惠果和尚の傳燈遺す所無しと雖も、梵語研究に於て大に般若三藏の提撕を蒙られたる者乎。三藏曰く

吾生緣屬賓國也、少年入道經歴五天嘗誓傳燈來遊此間。云云

以て其の梵學に精通なりしや知るべし、故に高祖は其教導に依りて梵字悉曇の奥を極め、眞言教義の根基を固め、遂に我國文化の礎を致したる平假名等の發明、若くは大成の位地に立たれたる者なるべし。

高祖が多藝多能の性質は啻に佛道修行に於て而已ならず、世間萬般の事柄に當りて可ならざる無く、繪畫、彫刻、詩文、書法、音韻の學、造筆、製墨の末技に至るまで、眼界に映ずる者皆な自家藥籠中の者と成り、高祖在唐中の一部は、確に此の世間的方面の觀察に費されたる者の如し、其の曾て書を越州節度使に致し助成を請はれたる書中に

今見於長安城中所寫得經論疏等、凡三百餘軸(中畧)竭力涸財趁逐圖畫矣、然而人劣教廣未拔一毫、衣鉢竭盡不能雇人、忘食寢勞書寫(中畧)伏願願彼遺命愍此遠涉、三教之中經律論疏傳記及至詩賦碑銘卜醫五明所攝之教、可以發愛濟助者多少流傳遠方云云

嗚呼渺たる一留學の軀を以て、內外の文明を該攝し、國家の開明を裨補すべき諸學藝を我に傳へんとす、其抱負の大なるは論無く、其の辛苦經營眞に容易の業に非ざるなり、尙ほ今の越州節度使たる者、其名字を詳にする能はずと雖も、顧彼遠命愍此遠涉等と云へるを見れば、蓋し靑龍門下の淸信士なるべき乎。

高祖の天才と德望とは又大に唐帝憲宗の欽崇を得られたる者の如し、彼の宮中の壁に五筆を振ふて彼の君臣を驚し、五筆和尙の稱を得られたるが如きは、遠く人口に膾炙する所にして、在唐の間屢〻恩賜あり、殊に其歸朝に臨み。皇帝永別の餞として、菩提子の念珠一貫を賜ひ、

仁以此爲朕代莫永忘、朕初公留將師、而今遙欲還東惟道理也、欲待後紀朕年已越半也、顧一期之後必逢佛會云云（遺告）

と一留學僧を以て此の異數の崇重を辱くす、眞に國家の光榮を添る者と云ふべし。其他在唐中の出來事に關し、奇談怪說甚だ多しと雖も神祕的信仰の境界、今は且く畧しつゝ高祖は入唐の初め二十餘年の留學を希望せられしも、本懷皆な早く達したる而已ならず、惠果和尙掩色の夜、高祖に告て曰く

汝未知吾與汝宿契之深乎、多生之中相共誓願弘演密藏、彼此代爲師資非唯一兩度也、是故勸汝遠涉授我深法、受法云畢吾願足矣。汝西土接我足、吾也東生入汝之室、莫久遲留吾在前去也云云

と高祖卽ち深く師命を畏み、在唐前後三年にして、平城天皇大同元年、唐の憲宗元和元年八月、歸朝の船に上り給ひぬ、吾人は其の果して何月長安城を辭去せられしやを知らずと雖も、當時長安城より我國航通の門戶たる、明州海岸に來るは僅々日子の能く辨ずる所に非ざれば、愈に貞元二十年十二月二十三日、長安入京より今此の城都を背にし、東海の空に錦を飾る旅路を取られし迄は、到底僅か一年半有餘の短日月に過ぎず、何んぞ其の先志と相違せるの太甚しきや、思ふに是れ前條の理由の存せる在りと雖も、亦當時唐朝の國勢既に衰運に傾き、文物法制の隆昌固より昔時の如くならず、殊に佛敎に於て

は法相の玄奘、慈恩、眞言の金剛智、善無畏、不空、華嚴の賢首、淨土の善導、禪の慧能、神秀、律の道宣等、皆な逝去し、義淨三藏、實叉難陀、菩提流支等も亦涅槃の雲に隱れ、代りて天台の行滿、道邃の如き、眞言の惠果、順曉の如き、禪宗には偏然和尙、石頭無際大師の如き、其他般若三藏、大智禪師、大明律師、淸涼國師の如きありと雖も、要するに立敎開宗の大任に當りし大偉人は悉く物故し、支那佛敎の黃金時代は既に去りて漸く第二流第三流者の手に落ち、最澄師或は高祖の如き大人物が十數年の日月を費して、其玄底を叩き要する底の大偉傑無く、且つ我國宗敎界の事情は、到底高祖等が優悠海外に逗留するを許さゞりしならむ乎。然らずんば先に二十年を期せし者、豈に僅々二年內外の短留學を以て歸朝するの理あらむや。

傳へ言ふ高祖明州に達し、歸朝の朝發願新誓して曰はく

我所傳得之祕密聖敎、今將奉去而於大東國遍ト建法基之靈區諸佛諸神豈無冥助哉。

と乃ち三個の金剛杵を雲中に投ぜられけるに、三杵空を凌で紀伊國高野山、京都東寺及び土州室戸崎の法林に落つ、今日高野山御影堂前の三鈷松は之れ其の跡なりと、吾人は此の神秘的大威神力を以て。廣く衆に信仰せらるゝ高祖の大品性を景慕する者なり。

飛帆の間屢〻漂蕩の苦艱に遭遇せられしも、洋中大難無くして、大同元年十月遣唐使判官高階眞人遠成と俱に無事筑紫に歸着せらる。紅葉なす鎭西の山々、咲んで我を迎へ、不知火の波光は躍て我が船路を照す間に、芽出度求法の大旨を遂げて、歸着せられたる高祖の喜悅如何なりけむ。直に表を具して歸朝の旨を奏し、請來の經典等別紙目錄を附し、遠成に依て此を朝廷に奉じ、身は暫く鎭西に留住せらる、吾人は此の滯留が果して何故なりしやを知ずと雖も、思ふに未だ京畿に根據地を有せざりし高祖に在ては、且く身を西地に留め、朝廷の命令に依りて進退すること、反て得策なりしが爲め乎。將た其の太宰府に着せらるゝや先帝桓武の崩御(本年五月崩)を聞き、己が受命の主の喪に居らむがため、喪服を着けられしと聽けば、或は遠慮の意味にてや有りけむ。

斯て大同元年は邊塞風寒く、旅舍雪深き間に暮れぬ、嚴島春秋は、高祖が此間に藝の嚴

島に詣でゝ、求聞持の法を修せられしと言へど如何にや、二年の春は如何に暮れけむ、吾人は性靈集に依りて丁亥二月十一日田小貳の爲に、先妣の齋忌を修せられしを見るのみ。夏四月二十九日官符を以て筑紫觀音寺へ高祖の假住を牒す、思ふに歸朝後常に彼寺に住せられ、今改めて此牒有りし者ならむ。此間た高祖が夜々密敎宣揚の將來を夢み、日々入京の勅詔を望み、優々の裡に而も匆々、偉人も亦意の動くを免れざりしは、其の假住の間に一寺を創し、密敎東漸長く未來際に傳はらむことを希望して、東長密寺と名けられたるを見て知るべし。嗚呼鵬翼既に成りて、未た萬里の長風に駕せざる輩が、自ら我力量を危疑するの狀、世出世東西變異無しとや言はまし、其の南溟に飛揚する果して何れの時ぞ。

斯くて春過ぎ夏も暮れ、梧桐一葉秋聲を傳ふる頃に至り（行化記殘本今年の條下に　今年准勅入京、卽請來法文等可流布天下宣下云々而も其月日を知らず）入京して密敎流布の宣旨を得、且つ勅して槇尾山寺に居らしめらる、是れ眞言宗漢土傳來後、九十二年の後なりと。十一月八日和州久米寺に於て大日經疏を講じ、以て往日斯經感得の恩を報ず。徒衆陪り聽き諸神影現し玉ひ、講筵甚だ盛なりきと云ふ。嗚呼往年大安寺の一小沙門として入唐せし者、今や本朝眞言宗開敎の勅許を受け、堂々として本朝未曾有の大日經を講ず、雄辯高辯意氣昂然として星漢を衝き、南都北嶺を振動する者有りしや必せり。祕密の敎幢是時初て立ち、三密の法鼓今初て鳴る、向後の佛敎界は卽ち天台最澄と高祖との晴舞臺なり、吾人は今より次第に進みて其活動の轉改如何を眺めんと欲するなり。

第四章　御品性と人生觀

其一　高祖の御品性

夫れ達人は大觀し小人は小觀す。思へば佛陀の大慈眼は三世に徹し、法界を窮めて毫釐を過らずと雖も、衆生の翳眼は目前の微物尙は其の眞相を穿つ者尠し。目前の微物既に爾り、況んや廣遠の事相をや。形有る事相既に爾り、況んや無形の眞理をや、特に況んや今吾人の醉眼を以て過去一千幾百年の往昔に於ける大偉人を捉へ來り、其傳を考へ其

思想を伺ひ其眞相を究めんとするをや、吾人は曩に盧山八面の一覧を讀者諸君に紹介するを得ば既に望外の幸なるを誓へり。然るを進んで其の御品性を描かむとするが如き、固より不愼潛上の極、恐懼措く所を知らずと雖も、海水盆水同じく月を寫し得て誤らずとせば、吾人胸中の盆水も豈又高祖が大品性の小影を映寫せざる理あらむや。是れ吾人が敢て不遜を顧ず、別に一章を設けて其の最も景慕する大偉人の品性を描寫する所以なり。尚ほ吾人が是に高祖の品性を紹介するの微意他無し、唯だ立教開宗の基礎既に立ち、自利の修行是に圓滿して今や將に化他の大行に遷らせられんとする、最重要の過渡時代に屬し、向後還相回向の位に在る高祖を知り、其眞意を誤らざらんとせば先づ其品性の一班を知り、其化他門に於ける千差萬別の運動が由來する、根本動機を了知すること最も必要なるを信ずればなり。品性は行爲の根本、行爲は品性の花葉、故に花葉を知らむと欲せば、必ず根幹を知らざるべからず、吾人豈に漫りに筆を弄する者ならむや。

抑〻宗教は平和的教具なれば、此が傳道の任に當れる宗教家の傳記は、無論平和の傳記なり、靜穩の記錄なり。彼等は常に社會の裏面に立ちて、罪惡の爲に泣き不幸の爲に泣き、弱者の爲に泣き、暗黑の内に光明を投げ、困頓の者に救助を與へ、飢ゑたる者に食を與へ、凍えたる者に衣を與へ、泣ける者に乳を與へ、渴せる者に水を與へ、昧き者に智を與へ、滯塞に轉せる者に手を授け、涙と血とを生命とし膏油として、此の障碍多き社會機關の運轉を圓滑にし、此の衆生盡ずんば吾願も盡ずの大悲本誓に住して、攝化利生の大任を果さゞるべからず。故に世の所謂る英雄豪傑の如く、長劍を振ひ大旆を擁して、千軍萬馬の間を縱横するの壯擧無く、又高論横議一言の下に天下百千萬の人民を左右し、經綸の偉策能く坐して世界を動すの快事無しと雖も、而も能く匹夫にして百世の師となり、一言して天下の法となるの大感化はこれ有り矣、其間往々折伏降魔の門に住し、毅然として滔々たる世の濁流に逆行し、壯烈の心、激越の行、以て俗物の混濁を洗滌せんとし、遂に身を敎敵の刃頭に斃せる基督、提婆(龍猛門下の)の如く、或は遠國孤島に流竄せられたる親鸞日蓮の如き、之れ無きに非ずと雖も、斯の如きは其の逆境に處

し、世間の風潮に反行したる稀有の實例にして、頗る異數のことゝ云ふべく、今云ふ平安朝の二大宗教的偉人の一人たる高祖の如き、能く絶世の力量と德望とを兼有し、他の一偉人最澄師と互に相提携して新佛教の生命を皷吹し、國民の元氣を皷舞し、上は一天萬乘の陛下を初め奉り瓊枝玉葉百官百僚、皆な其風に靡き、且つ勢ひ自ら反對の地位に立つべき、寧樂七大寺の大德は、初め其力に依て自己の新勢力を張らむと考へ、終には其の旭日の勢に壓倒せられて既に反抗の勇氣無く、皆な受働的寧ろ服從的地位に立ちたる者の如し。故に高祖の如きは畢生の行路棘して坦々、大道砥を爲せる間に駟馬の車を驅れるが如く、殆んど抑揚波瀾の其間に見るべき者無らむとす、從て機に觸れ事に應じて、其品性の眞相を映發するに足るべき大出來事甚だ少く、其思想の奥底を研究すべき材料に乏しき頗る遺憾の極と云ふべし。殊に古來一宗の開祖と尊崇せらるゝ偉人に於ては、世人の是を見ること猶ほ神佛を見るが如く、其身や權化、其行や神聖、其智や非凡、其言や靈妙、固より人類以上の者、此に向て人間的批評を下すが如きは、不敬不倫の太甚しき者と考定せられたり。故に今吾人が人的智鏡を以て人間的批評を高祖の品性上に加へんとするも、殆んど其方面の材料に乏しく、其一言一行一擧手一動足皆な多くは奇怪不可思議の靈光を帶ぶるを見ると雖も、尚ほ高祖の眞面目は、決して或一派の佛教家の如く、默禪靜觀を以て佛者の眞致と爲玉はず、彼の枯禪主義の如きは寧ろ、其の修養時代の極めて淺薄なる者と考へられ、白蓮の汚泥に出でゝ汚泥に染まず、金剛石の塵に塗れて塵に染まざるが如く、和光同塵の念に住し世俗に交はりて、而も俗塵に穢れざるを第一義とし、眞俗融會世出世一味を、其觀念の極致と定められたる者の如し、故に在唐の年月僅に一年半有餘、且つ精勵苦學の間を以てして、尚ほ越州節度使某の如き、前御史太夫馬聰の如き、前試衞尉寺丞朱千乘の如き、越府鄕直進士朱少瑞の如き、其他大唐の沙門曇濟、鴻漸の如き、鄭壬字申甫等の如きと、詩文贈答の交を結び、又歸朝後朝野の間に奔走せらるゝの際に於ては、嵯峨天皇の如き、淳貞王の如き、野岑守の如き、野陸州の如き、良岑安世の如き、伴半

章事の如き、藤原葛野麿の如き、同冬嗣、園人、三守の如き俗者に對する、勃海王子、青丘上人等の外人に於ける、傳教大師如寶大德等との道交に於ける、其交情の密にして温なる、殆んど塵外の禪客たるを忘れられたる者の如く爾り、是れ豈に枯禪者流の能く爲す處ならむや、若し夫れ紛々たる俗事に累るも敢て辭せず、其胸懷開豁、清濁併せ容れて、尚ほ餘有るの大度量に至ては、彼の元興寺の僧中臣が艶詞を宮人に通じて獄吏に下さるゝや、高祖表を具して寛大含弘の處置を請はれたるが如き、又大學頭藤原朝臣眞川の爲に、其師淨村宿禰淨豐が伊豫親王の學士たりし罪を慍れて亡人と成れるを救護し、書を右大臣園人に致して爵祿復舊の榮を得せしめ、寃を清められたるが如き、又同じく伊豫親王の事に坐して官を失へる藤原宗成の哀請を容れて、其免敎に力を致されしが如き、又天長六年九月護命僧正八十の賀を祝せんため、自ら主人と成りて東大寺に僧正を請し、諸德と共に終日茶菓の幽賞を試み、祝詩の清筵を列ねて自ら其序を作られたるが如き、讀者或は是を六年、禪關を閉ぢて高雄に屏居し、青年の日嚴冬の深雪に藤衣を着して精進道を顯はし、炎夏の極熱に殺漿を絶ちて、朝暮に懺悔せられたる高祖に於て見る事の甚だ奇なるを怪まむ。然れども請ふ怪む勿れ、これ所謂滑脫洒落佛敎に入りて佛敎臭からず、味噌に交りて味噌臭からざる大偉人が大度量を存する所以の本分にして、平等の智見明朗たる前には、染淨清濁善惡眞俗の差別を見ず、外人の叩く處鎭谷卽ち應ず、晴れてよし曇りてもよし富士の山、豈に此間に些の局執之れ有らむや、卽事而眞の宗要、當相卽道の極致、夫れ是に有る乎、吾人は擧手投足皆成密印、開口發聲皆是眞言の眞相を、高祖の行動云爲に於ては見る心地するなり。

去れば高祖は家を出られたるも、家を捨られたるに非ず、世外の道人となるも、國家を忘れられたるに非ず、其の一家を出でられたるは更に宇宙的大家族を打建てんが爲なり。親識の留諫を聽れざりしは更に、一切衆生を同胞視し赤子視せんが爲なり、恩愛の門を出でゝ博愛の堂に入り、好惡の境界を脫して慈悲の天地に入る、深く青龍の遺誨を銘じて國家蒼生の福利を念頭に忘れず、親を親み國を愛し、忠孝人倫の大道を重んじ、社會

の風俗習慣に注意し文明の扶植に心を用ひ、實業の發達に意を盡し一身を以て世出世間方を兼濟し、天堂を斯界に建て正覺を斯身に成せしめんとす、其の品性の高くして大に、清くして廣遠なること、豈に彼の子々者流、枯禪的佛教家の企て及ぶ所ならむや。

斯の如く高祖は敢て世の俗情を捨離し玉はず、故に悲悼哀傷の情の如きも敢て之を畀しむことを爲さず、反て自ら其裡の人たるを辭せられざりし者の如し、高祖其門下の慶賢顔回たりし智泉法師を悼むで

我法化金剛子智泉俗家謂我舅入道則長子、孝心事吾二紀于今矣(中略)斗藪與同和王宮與山巖影隨不離股肱相從、吾飢汝亦飢吾樂汝共樂、所謂孔門回愚釋家慶賢汝卽當之、所冀轉百年之遺輪驚三密於長夜、豈圖請棺槨乎吾車感有慟乎吾懷、哀哉々々哀中之哀、悲哉々々悲中之悲、雖云覺朝無夢虎悟日無幻象、然猶夢夜之別不忍不覺之淚云々

嗚呼此の不覺之淚夫れ將た何の處よりか出づる、誰か其由來を想ふて其の慟哭に同感せざる者ぞ、熱き淚は温き感情の泉なり、温き感情は凡ての性情を和ぐる者なり、春風和氣此より發し、芳草香花此より生ず、之れ豈に石心鐵腸冷血なる者の能く得て喝破する所ならむや、加之ならず高祖が大納言安世家記に於て和歌を論じ「和歌是陀羅尼也依事物之感而說陀羅尼、感心者本分無念之外而大者也」と言はれたる是れ明に事物の感を退けず、花に附け鳥に附け、意の轉ずる所心の動く所、情の發する所に從ひ、天眞爛熳の感を表白するを以て、總持陀羅尼の一部と爲し、和歌が其骨髓とせる慈悲哀傷(慈無常)を以て、一種高尚なる情緒とし、樂而不淫悲而不傷の境界、皆な之れ優悠たる天地自然の事と許されたる者に非ずして何ぞや。

之れを要するに高祖は其身祕密教の開祖たるに拘らず、其思想甚だ平明、其品性甚だ靜和、常に理と眞とを事と物との間に求められ、彼の身心事物を外にして過境的境界に退住する者を以て、佛教の本意に反する者と考へられたるは彼の心經祕鍵に「夫佛法非遙、心中卽近、眞如非外、弃身何求」、と唱破せられたるを見て明なり、從て其教義が社會と密切の關係を持し、皇室と親近し現世的と成り、祈禱的と成り、遂には幾多の神祇を

其内に包含し攝取するに至りし所以を怪まむや、又其の佛教が社會的なるべく、眞言宗が山林的なるべからざる、豈に今日に初まれりと言はむや、吾人は實に高祖に於て最も現代佛教者が取て以て則るべき偉大の標準を見る心地するなり矣

以上吾人は高祖の御品性に就て其一班を描き了りぬ、請ふ序でに其人生觀の一班に及ばん。

其二　高祖の人生觀

彼の自然論者が論ずるが如く、人生は果して意味無き、目的無き、機械的運行に過ぎざるや。吾人は必然の勢ひ、必至の運に驅られて、生れ、働き、眠り、食らひ、而して死したる後に殘す者とては、單に一種の遺傳なる者に過ぎざる、憐むべき動物なるや。從つて吾人が生涯の目的は、最も多くの快樂を窮めて、樂しく、可笑しく、浮世を經るの一事にある乎。將た又宗教者中の或者が論ずる如く、人生は一種の墮落にして、罪惡の罰として、吾人々類に課せられたる苦報にしあれば、吾人は一日も早く此の浮世を去りて、彼の約束せられたる、天國に至らざるべからざる乎。或は此の人生は神が造り得る凡ての世界中、最も愉快なる、幸福なる世界として、吾人は靜に神の恩を念じ、神の命ずる所に從ふて、來世の救濟を望むべき乎。或は老子が吾所以有大患爲有吾身及吾無身「吾有何悲」と觀念せるが如く、ショーペンハワーが生活することは欲望することなり。欲望することは缺乏を感ずることなり。缺乏を感ずることは苦痛を感ずることなり。從つて生活することは苦痛を感ずることなり」と思念せるが如く、吾人は凡べて斯世の生活を苦痛なりと觀じ、世を遁れ、俗を脫し、成るべく意思の欲望を滅殺して、消極的脫苦の方を計り、若し成し得べくんば、彼の聲聞、緣覺等の如く、種々の工風を以て、心的活動を留め、生活の源を斷ち、灰身滅智して積極的に此の世の憂愁苦痛を免るべき乎。將たハルトマンの如く、吾人が現今の狀態は苦痛なるに相違無きも、次第に劣より優に、低より高に進みつゝ、遂に無覺の本體に歸する者なれば、吾人は永遠の進歩、悠久の幸福のために、利己の欲望を捨てゝ、世界一般の文化發達を企圖すべきものなる乎。吾人

が生を斯界に受けたる以上は、有意識に若くは無意識に、必らず此等の問題に關著し、これを解釋せずには到底止み難きものなり。吾人は此の世界を苦痛なりとするも、沙翁が

He that dies pays all debts. (死者は凡ての借財を拂ふ)

と謂へるが如く、一死以て「御去らば」を拂ふの外、此の世の苦痛を解脱するの方法ふること無く、如何に此世を快樂なりと云ふも、三寸の咽、ハタと塞がり、呼吸の風一たび休せば、「妻子珍寶及王位臨命終位不隨者」と云へるが如く、凡ての快樂を放棄せざるべからず。渺たる太洋の一滴、茫々たる無限の一刻、人生の果敢無きこと、人間の無力なること、眞に水上の泡、草頭の露の如き者あり。高祖は此の間に處して果して如何に人生を觀ぜられたる乎。

抑〻人の人生を觀ずるや、或は個人に重きを置き、個人の幸福より、凡ての幸福を打算する者あり。或は國家的にこれを觀察し、政治法律の點より觀察する者あり、或は人類を總括して一大理想の顯現とし、一の完全なる有機體としてこれを考ふる者あり。高祖の如きは卽ち是なり。所謂る道德的觀地に立ちて、人類社會を一の廣大なる道德的現象となす者にして善惡、迷悟、染淨、昇沈等の道德的意味（エシカルミーニング）の錯雜交叉せる者と考へ、其の昇沈迷悟の運動に依りて、社會の變化を爲せる者と思惟せらるゝなり。而して吾人は高祖が常に二種の立脚點に在りて人生を觀察せられ、其の立脚點の異なるに從ふて、其の觀察の殆んど正反對に出づる者あるを見るなり。

何をか二種の立脚點と云ふ、曰く一は智識（ノーレッジ）に由りて、分解的（アナロジカル）に凡ての差別相を研究する、始覺上轉門にして、迷より悟に、因より果に、勇猛精進する時の向上的差別觀と、他は慈悲（フィリング）なる感情を基とし、本覺下轉門たる、還相回向の位に立ちて。迷悟染淨畢竟平等なりと照見したる平等觀なり、前者は前半生期の思想にして、「三敎指歸」の如き、これを代表し、後者は後半生期の成熟したる思想にして「十住心論」「秘藏寶鑰」等に於てこれを見る、而して差別觀に於ける高祖は、明かに迷悟染淨の隔歷を見、善惡の區別を立てゝ、

未だ頗る圭角あるを免れざれば、其の觀察從つて厭世的にして、殆んど人生の價値を無視せるものゝ如し、此に反して、平等觀に於ける高祖は、超絶的中和說にして、寬優博大の氣の滿々たるを見る。即ち高祖は厭世觀より入りて超絶的中和說に達せられたる者と云ふべく。彼の世間の所謂る厭世觀に沈みて、而も是に留まらざる能が必らず自然に到達すべき最上地位に達せられたる者と云ふべし彼の李太白が沐浴子に於て、沐芳莫彈冠。浴蘭莫振衣。處世忌太潔。至人貴藏輝。滄浪有釣叟。吾與汝同歸。と考へて、尙は一片厭世の氣慨を其の間に漏せし境界より進みて、昇沈應已定不必問君乎（送友人入蜀）と覺り、超然として物慾に凝滯せず、苦樂得喪に關はらざる、中和正平の境界に進みたるが如き、一種の審美的直覺力に依りて、此の境に近づきたる者なり、其の他カント以後の諸大哲學者が常に美の境界に於て、感覺界と理想界との調和を求めんとするが如き、皆な同一思想の潮流を追へる者に有らざる乎。若し夫れ更に其の好例を言はゝ、世尊が生老病死の苦に惱める衆生を見、所有る世間の快樂を放棄して、身を山林に遁れ玉ひしも、一念大悟の曉は、染淨迷悟畢竟同一なりと覺り、再び以前の塵界に立ち歸りて、五十年餘の日月を浮沈流轉の間に消し玉ひ、毫もこれを意とし給はざりしが如き、皆な然らずや。

世人謂へらく、人間は二個の反對なる性情を有し、從つて世界も亦其の兩面を有す、靈性と肉性、理性と感性、道心と煩惱、博愛と利己、社會性と個人性の如き是なり。而して一は平等的公德を爲すの根本と成り、他は差別的私情を致す原因と成る」と。洵に然り、勿論斯く區別すればとて、差別的私情が直に感性的煩惱にあらねば、平等的公德が又靈性、理性、道心にあらずと雖ども、畧ぼ此等の思想は其の類を分ちて、二條の異なりたる方向に走れる者にして、是れ即ち人間が動物的欲望と靈性的道念とを併有せる所以、カントが理性と感性と毫も關係無き、否な寧ろ反對なる者と考へたる所以にして、此の兩者の關係と調和とは、常に倫理學者、宗教學者が思想を費す處なり。

今此等に對する高祖の觀想を考察するに、高祖が向上的差別觀よりして、厭世觀を打ち

立てられたること、先きに述べたるが如し。而して其の厭世觀の根本は、凡べて人間の思想と行爲とは、畢竟妄想の迷境なりと捨遣し、吾人々類が理性と云ひ感性と云ひ、或は平等心と云ひ差別心と言ひ、善惡の區別を存し、其の滿足と不滿足とに依りて、或は苦とし或は樂とし、苦しきが故に此の世を厭ひ、樂きが故に此の世に着し、唯其の自己が庶幾ふ所の者の、滿と不滿とのみに依りて、或は厭惡し、或は欣樂するの、甚だ陋なるを言ひ、吾人が法の眞相を極むる能はず、唯だ皮想の見に依りて、或は是とし或は非とするが如きは、是れ皆な迷中の是非にして、是非俱に非なる者なりと言玉へり。彼の言說に、相、夢、妄、無始、如義の五種を立て、心識に十種の區別を許し、又世界と住心とに於て、各十種を分ち、其の言說の前四、心識の前九、世界と住心との前九の如きは、凡べて皆な妄想無明の境界にして、唯如義語と、一々心識と、佛界と、祕密莊嚴心とのみ、眞實の境界なることを云へりしが如き、畢竟此の意にあらざる無きか。彼の「寶鑰」に、

九種住心無自性。轉深轉妙皆是因。

と說かれ、此を釋して、

如此乘々自乘得佛名望。後作戲論。前々皆不住故名無自性。後々悉不果故皆是因。轉々相望、各々深妙、所以名深妙。

と云はれたる者、又た此の意に外ならず。況んや高祖の眼光より見れば、言說の相、夢妄と、心識の前六識とのみより成れる、第二愚童持齊心の人界の如き、豈妄想の甚だしき者にあらざらむや。從つて其の妄說妄言說を以て、苦なり快なりと云ひ、或は公德なり私情なりとして、此れを褒貶するが如き、皆な是れ迷中之是非、俱非なる者に過ぎず。何れを可とし、何れを否とせむ。去れば此の觀地に立ちて判斷せば、哲學者が理性感性と稱する者、俱に迷中の妄想たるを免れず。況んや感情の波に漂はされて、變幻極まり無き人心の動轉をや。大師が「祕藏寶鑰」に於て、

三界狂人不知狂。四生盲者不識盲。生生生生暗生始。死死死死冥死終。

と說かれ、又た人情の定まり無きを見て、

悪しとも善しともいかに言ひはてむ折々かはる人の心を

と詠ぜられたるが如き、彼の夢我夢中に生死に流轉して、覺らざる業を憐まれ、至情默し難きの言にあらざる無きを知らんや。故に大師は彼の世人が人生の最上目的とせる名譽利益を視玉ふこと、蛇蝎の如く、人情派の人々が神聖なる者、天國的なる者と稱する戀愛を悪み玉ふこと、虎狼の如く、

趁逐遠近墜名利之坑。加之磁石吸鋼、則剛柔馳逐方諸招水、則父子相親、父子親々、不知親之爲親。夫婦愛々、不覺愛之爲愛。流水相續、飛焰相助。徒縛妄想之繩、空醉無明之酒。既如夢中之遇、還似逆旅之逢云々。

と稱して、これを退け、親子の愛情は佛敎中、餘り正面より排斥したる者少きに拘はらず、弘仁遺誡に「父子雖骨肉相親但是一生之愛、生死之縛」として、向上道の障害物と成し玉へり。殊に婦女の愛に向つては、例の外面如菩薩內心如夜叉的句調を用ひ、嚴格なる訓誡を垂れて、「女人者地獄之使也」と曰つて、これを退けらる。彼のスイデンボルグが、「愛に二種の源あり、一は眞理と善事に於ける愛を流出し、他は害惡と虛僞に於ける愛を生長す、前は神と隣人(同胞)を愛し、後者は現界と自己を愛す。而して兩者は常に反對の位置に在る者なり」と云へるが如き、又たカントが、理性に從ふて行ふことのみ尊き者なり」と爲せるが如き、世間的道德としては、固より峻嚴なる者に相違無しと雖ども、高祖は一層其の度を越ゑ、今斯く理性と云ひ、眞善を愛すと言ふが如き差別見は、吾人が未だ圓明の覺智を開かず、恰も月が尙一分の蝕を有して照すが如き者にしあれば、未だ充分明朗なる智解にあらず、無明の邊域に墮せる者なりと云はる。翌するに、高祖に宇宙論に於て、現象卽實體論（吾人は眞言宗の六大緣起を以て現象卽實體論と爲す者なり）を取られたれば、敢て彼の實體と現象との區別を立てゝ、現象は幻なり、影なり、夢なり、獨り實體のみ實存すと云ふが如き說を爲されざりしと雖ども、前九の住心は未だ天眞獨朗の覺智を開かず、尙は幾分の迷妄を存する者なれば、其の現象と實體との關

係に就て、彼等が畫ける幻と影とを退けざるべからず。差別的現象を離れて、平等的實體無ければ、敢て排すべきの差別相無しと雖ども、其上に描かれたる妄想は、飽迄排除せざるべからず。殊に人間の分齊は、極めて卑しき者にして、常に顚倒の妄見に執着し、無常を常とし、未到を到とし、未得を得とし、甚しきは物慾に束縛せられて、自由を得ず、「日夕營々繫衣食之獄」の境界なれば、此の間に在りて、或は世を厭ひ、或は世を樂ふが如きは、皆な夢中の妄想に過ぎず。殊に苦樂の觀念は定名にあらざれば、此れに左右せられて、悲喜欣厭するが如きは、畢竟感情に感動せらるゝ者たるを免れずとし、斯の如き迷妄的世相は、最も厭惡すべき者なりとする、是れ高祖の向上道に於ける厭世的人生觀なり。

然らば吾人は如何にして此の迷妄を解脫すべきやは、最も大問題にして、眞言宗は正しく此の問題に答へんが爲めに、此の世界に現はれたる者なり。彼の三密修行と言ひ、三力加持と稱するが如き、皆な其の方法なりと雖ども、吾人は一言せば、智慧の劍を振つて、戲論の羅網を切斷する、是れ其の正道にして、而も吾人は能く此れを爲すに堪へたる者なりと信ず。蓋し斯く智力に依りて、迷妄の境界を切り拔けんとするは、大乘佛敎の特色にして、卽ち高祖が生佛の關係を論ずるに際し、常に衆生、特に人間の價値を最高義に解釋し、生佛不二の立脚點に立ちて、個人の能力は無限に開展する者とし、若し其の道を得れば、宇宙を該羅し、法界を呑噬し、自身卽ち無邊廣大の法性身たる、故て難からずと爲し玉ふ所以なり。

抑〻古來厭世的悲觀に走れる輩を見るに、其の結果概ね意を制し、欲を絶ち、智を鎖くし、或は身を山林に遁れ、閭巷に隱れて、世間と交通を絶ち、消極的に其の憂を脫して、苦痛を遁れんとする者多し。彼の老子が、

俗人照々我獨若昏、俗人察々我獨悶々。澹兮其若海、飂兮若無止。衆人皆有以而、我獨頑似鄙。我獨異於人而貴食母。

と言ひ、或は

塞其兌、閉其門、終身不勤。

と言へるが如き、畢竟復歸說に出でたる、彼が脫苦法に外ならず。彼の近世厭世家の祭斗、ショオペンハワーが、意思の消滅を以て、世界の悲苦を脫する唯一良道とし、且つ其れに二種の階段ありとして、「博愛慈仁を行ふこと」と、隱遁すること」とを擧げたるが如き、亦然り。其の他印度の諸哲學者、小乘佛敎徒及び道家者流の淸高なる者、(竹林の七賢の如き是なり。其の末流に至つては、卑劣なる虛飾者のみ)等が世間と關係を絕ち、勉めて智意の作用を留めて、解脫を得んとするが如き、皆な消極的たるを免れず。思ふに、若し彼等にして、此世を喜樂なる者と觀せば、反つて世間に貪着すること、彼の快樂論者(Hedonism)と異なる無かりしならむ。故に此の意義よりせば、彼等は一種の消極的快樂論者(Negative Hedonism)と稱すべき者なり。此に反して、彼の希臘のストア學派が、堅固なる意思を以て、凡べての欲望と誘惑とを征服せんとするが如き、頗る積極的なる者ありて、高祖が今の場合に說かれたる者と相似たる者なりと雖ども、彼は意思を以て欲望を征服せんとし、此は智慧を以て妄想戲論の源を絕ち、其の迷のみを拂ふて此れを善用せんとする者にして大に相異なる者あるを見る。故に『般若心經祕鍵』に曰く

無邊生死何能斷。　唯有禪師正思惟。

と。知るべし、靜慮熟思に依りて、智慧(此は今日の心理學が智情意と並說する時の智Knowledge にあらず。寧ろ情に對して、意智の二を槪稱して智と爲す者、是れ高祖の胸中に存せる智慧なり。併し或は高祖の所謂る智は、聖智にして、今日心理學上に說くが如き者にあらずと稱する佛學者無きを保せず)を硏ぎ、以て一切の迷妄を破し、諸種の無明を平ぐるに在るを。これ卽ち向上的自利門に於ては、常に智慧を先とし、勝義心を主とする所以なり。

若し夫れ斯の如く、差別の觀に依りて、一々諸法の執着を破し了り、茲に平等無碍の觀智廓然として開くるに及んでは、其の上の差別は、平等を知りたる善差別、其の平等は、差別を忘れざる善平等にして所謂る善差別者、分滿不二、卽離不謬の心地に進み、迷悟

染淨、理性感性の間に處して、無碍自在を得、各〳〵其の用を誤らず、以て人世を利益すること猶良醫が藥物の能益を極め、調合其の妙を得て、藥毒共に藥と成るが如し。觀地若し是に至らば、豈に理性は貴く、感性は卑しき等の區別あらむや。豈に又偏へに平等心、若くは差別心の滿足を以て、苦樂の決を致し、厭世或は樂世の一方に凝滯するが如きあらむや、卽ち是れ苦樂の差別を超越したる、超絕的中和說にして、高祖が還相回向の位地に立ち戻り、世俗に混同して、而も世俗に汚れず、慈悲を旨として、凡庸の改善、社會文明の進步に、全身の熱血を灑ぎて、敢て辭せられざりし所以なり。

吾人は高祖が常に、差別平等は一法の兩義として、相忘るべからざる由を唱へらるゝを言ひぬ。高祖又た曾て凡聖不二の心を詠じて曰玉はく

見わたせは濁るも澄むもおしなへて一つ水より立ぬ波無し

と、實に高祖は向上的差別觀に於て、非常に嚴格なる人生觀を唱へられたりと雖ども、是れ決して高祖の本領にあらず、高祖の本領は春風和煦にありて、秋霜烈日にあらず、其の寬容の精神に富めるは、彼の敎學の汪洋たる、此れを證して餘りあり。其の性質の社會的なるは、彼の世間的事業これを證して餘りあり。故に一たび「迷中之是非是非俱非」と唱へ、凡べて感性的欲望は勿論、吾人が通常理性的性情として貴ぶ者さへ排斥して措かず。父子夫婦等の、世間に所謂る愛情を卑しむべき者、汚れたる者と考へられたる高祖は、其の歌論に於て、戀慕哀傷を以て和歌の本色なりとし、此等戀慕哀傷の情は、儒佛（此の佛とは眞言以外の諸宗を云ふ）の惡む所なりと雖ども、理智の兩部に達し、阿字本不生の理を明らむる者は、遠く是非の假名を絕し、稱讚歎美の是、戀慕哀傷の非の間に處して、是を好むにあらず、非を捨つるにあらず、唯だ心の動く所に從ふて行ひ、意の行く所に從ふて爲す。而して此の心と意との有樣を言葉に發し、吟詠する者、是れ和歌にして、卽ち陀羅尼なりと云ひ、非善知兩部人不知歌道之本意乎」と斷言せらる。何んぞ其思想の溫雅なるや何んぞ夫れ優美なるや。思へば彼の「秘藏寶鑰」に、

大山德廣、禽獸爭歸、藥毒雜生。深海道大、魚龍樂泳、鵲鬼並住。

と言ひ、禽獸藥毒、魚鼈龍鬼の諸屬を容るゝ、大山深海の德を贊せらるゝ所、是れ高祖が人生觀の本領にして、其の大山深海を以て、自ら任せらるゝ者にあらざる無きを知らむや。吾人は彼の善惡美醜の別、悲喜苦樂の念を、一定不變の者と固執し、善惡苦樂の間に處して、自由變通を得る能はず、飽くまで味噌の味噌臭からむこと、宗教家の宗教家臭からむことを望み、永久に世出世の隔歷を存して、其の淸を求め、其の潔を保たんとするが如きは、固より高祖の志にあらざるを信ずるなり。故に『寶鑰』に又た曰く、

大音希聲（ハレナリ）、大白若辱（ハシレタル）、大直若屈（ハシスルガ）、大成若缺（ハシケタル）、大盈若冲（ハシレシカ）玄德玄同云云。

と。以て知るべし、高祖が平等觀に達し、超絕的中和說に達せられたる後は、能く辱と屈と、缺と冲とを容れて、綽々餘裕ありしことを、去れば『文鏡秘府論』には大仙利物（ノスルハ）名敎爲基君子濟時文章是本也（ト ノフハテ レ）」と唱へ、孜々汲々として、彼の厭世家流が如露亦如電と冷視したる社會的文明に餘力を借すを惜まれず、或は綜藝種智院を立てゝ、內外上下の人々に、完全なる敎育を施して、圓滿なる人間を造らむが爲めに、自から其の校長と成り玉ひ、或は造池別當と成りて、俗吏と共に奔走するを辭せられざりしが如き、豈能く瞶々者流の忖度し得る所ならむや。其他、日本文明上に、大師が寄與（コントリビュート）せられたる功績は、精神界、物質界に亙りて、到底爰に委盡し得る所にあらず。思ふに是れ高祖が性來獅子の貪食するが如く、凡ての智識學問を呑噬して、各〻其の精微を極め、美術家として、文學者として、宗敎者として、哲學家として、敎育家として、能辯家として、能書家として、殆んど所有る方面に、完全なる發達を遂げ、所謂る遍通（パーフェクト）なる人間（マン）たりし結果にして、差別平等の調和と、其の滿足とを、人生の最上目的と徹悟し、身自ら其を實行し、範を後世に貽されたる者と云ふべく、彼の「心の欲する所に從ふて則を越えざる」の實境に契達し、擧手動足、皆成密印、開口發聲、皆是眞言の眞地に進みたる者にして、人間若し是に至らば、外界の窮達榮辱、悲喜苦樂の如き、固より我意を勞するに足らず厭世樂世の境を絕して、中和平靜、坦々として心內、虛の如き者あり。煩惱則菩提生死則涅槃にして、空有偏圓、邊邪中正、皆是れ自心佛の密號名字なり」と覺る。是に於て

乎、我が一心は遍じて法界を籠め、宇宙を該羅し、我も六大法身なり、佛も六大法身なり、衆生も六大法身なり、心佛衆生是三無差別にして、我れ若し進昇せば、佛陀と成り、我れ若し無導の覺智を開けば、世界と平等なり、我は人類の悠久と生命の不朽を信じ、無限の精進を期して、一切の衆生と共に、父母所生の身の儘、速に大覺位に登らむとする。是れ高祖が向下的平等觀に於ける人生觀にして、即ち慈悲を基本として打ち立てられたる者なりと言ふべし。

要するに、人間の思想は差別より進みて、平等に入り、是に滯る者と、尙一層進みて、差別平等は一法の二義なりと契達し、思想の循化に依りて先に一旦捨遺したる差別の念に立ち還る者あり。而して初め單に差別の事法にのみ局執する者は、多く世間に執着し、能く言へば、樂世、惡しく言へば、貪世的觀念に陷り、殊に其の貪世觀を多しとす。然るに平等の理を覩て差別の事を忘れ、差別と平等との間に、平等の觀を下す能はざる者は、差別の事法を見て價値無き者として、厭世の觀念に墮する者多し、若し夫れ一段進みて、差別卽平等と達し、差別の現象を離れて、平等の實體無しと覺ること、高祖の現象卽實體論の如くならば、厭ふべき世界も無く、又た着すべき喜樂も無し、所謂湛々として鏡池の靜なるが如く、中和を守りて動かざるなり。是を人生觀の最上なる者とす。

高祖曾て其相公に送られたる羅皮函の詞に曰く、

南峯獨立幾千年。松柏爲隣銀漢前。戴日蘿衣物外久。函書今向相公邊。

と覩地の淸透、得て推知すべきなり。嗚呼此の一詩以て高祖の人生觀を伺ひ知るべき乎。

第五章　成功時代

其一　大同弘仁朝に於ける高祖

大同三年戊子の年六月十九日高祖三十五歲の時太政官符を以て課役を免せらる符に曰く

太政官符

應免課役度者一人

留學僧空海　年三十五　讃岐國多度郡方田鄕戸主正六位上佐伯直道長戸口同姓眞魚

右得治部省解偏被太政官去延暦二十四年九月十一日符偏去二十三年四月七日出家入唐宜依得度之者仍今年夏季隠免課役申送者省宜承知依例符到奉行

大同三年六月十九日

符中の戸主道長は高祖の伯父なりと言ふ、父田公は如何に成られしにや、吾人は今日佐伯氏の家族が當時如何なる關係より成立ち居りしや精知し能はざるを悲むと同時に、高祖が留學歸朝の後ち尚ほ戸籍上に眞魚の幼名を留め、未だ課役の免除だに受玉はざりしを見て當時奈何に其地位の低く、其勢力の微に、且つ其出家得度以來常に社會の裏面に潛み、南都北嶺の法幢に蔽はれて陰影に沒し居玉ひしやを知るなり。四年己丑春二月三日刺を天台最澄に通じて好誼を結ばる、是れ高祖が澄師と直接交通し玉ひし最初なるべく、名聲漸く上らむとして先づ歡然手を澄師と握らむとす、以て高祖が社交的伎倆の巧妙なりしを知るべきなり。今茲七月十六日太政官符に從ひ、槇尾山寺より移りて高雄神護寺に住す、是れ其名聲漸く朝野の間に揚りし證左なり、蓋し高雄寺は和氣清麻呂の建立にかゝり、弘世眞綱等が澄師に歸するや、一時澄師に屬するの觀ありし者、是に至て遂に高祖の手に歸するに至れるなり、然れども此際高祖と澄師との社會的位地は恰も叡岳と高雄とが其高度を異にするが如き者有りしなるべく、地位の隔絶到底以て其追及だも望むべからざりし如き者、時勢は遂に反對の結果を持來らしぬ、

蓋し此際高祖が諸宗先進の高僧を凌駕して、一躍佛教界の棟梁と成られし者他無し

嵯峨帝の即位及び此に伴へる紛騒と、其の學習せられたる眞言祕密教が最も當時の時勢に適し、佛教を日本化し國家的ならしむることに於て、最重要の性質を具備したるが爲なり、抑〻嵯峨天皇は　桓武の諸皇子中最も英明の君に在まし、殊に文學の道に秀でさせ玉ひ、詩詠に巧に筆硯に妙に、深く大陸の文明に注意し、　桓武皇帝最亂反正の後を受けて、平和的經營の道に當らせ玉ふ、故に　帝は御自身の嗜好上よりも亦國家經營の上よりしても、到底高祖と離るべからざる先天的關係を有せられたる者と云ふべし。

即ち既に世人の了知せるが如く、高祖は天稟の異材と幼來の苦學と、在唐中の修養とに

依り　世間的文明の上に於ても、優に當時の群材を凌駕し玉ひ、就中〳〵　嵯峨帝が最も嗜好し且つ秀でさせ玉ひし、詩賦筆道は同じく高祖が最も秀でさせ玉ひし特技にして、互相に唱和し友遊せらる、其の優渥なる知遇を得ざらむとするも豈に得むや。況んや嵯峨帝即位の初に當り、高祖勅を奉じて寶祚安泰の新念を凝され、後ち又葉子の亂に當りて、高祖高雄の道場に怨敵退散寶祚延長の新願を修し玉ひ、高祖の新禱と田村麿の武畧とは偉効を奏して、直に其騒亂を鎮じたるに於てをや。

夫れ宗教が固有の性質として、個人の道德品性を修養し、人間の品格を高雅ならしめて、其所尊の靈物と契和せしむるに在るや勿論なりと雖も、これと同時に其社會文化の程度に應じて、一方に部落の團結を目的となすあり、國家の統合を主旨とするあり、社會の平和を目的と致すありて、一方に社會の單位たる個人を教化し、他方には其個人より成立せる社會の存立と進歩とを輔益せんとし、必らず兩重の目的を有する者なり。而して今平安朝初代の景勢を察するに、東夷漸く威を失ひ王化に服するに至りたりと雖も、西には唐朝の隆興して文化皇國を風靡せんとするあり、朝鮮の我治下を脱して反噬の勢を示せるあり、北には肅愼勃海の遥に蟠盤せる者ありて、縱令ひ直接攻伐のこと無しと雖も、專ら國民の統一、國家の團結を强固ならしむる必要の迫れる有る而已ならず、これを内に顧みれば、國民の宗教心未だ甚だ低劣を免れず、人々陰陽五行の説に惑ひ、神明靈鬼は擅に禍福吉凶を與ふる者なりと信じ、上は國家廟堂の大事より、下は巷間一家の私事に至るまで、皆な祈禱卜占に依てこれを決し、禁厭呪術は醫業の地を占むるの時にしあれば、此際最も要用なる宗教は、加持祈禱を主とし鎮護國家、天下泰平、息災安穩、疾疫息除を唱へ、此劣等なる宗教心を利導して、漸次佛教の眞義に引入する者ならざるべからず。然るに寧樂の六宗新都の天台、皆な高尚幽玄の妙理を説き、或は諸法唯心と談じ、八不中道を説き、或は一心三觀一念三千の妙理、或は十玄緣起法界無礙の極旨を唱ふと雖も、攘災祈禱の道に於ては僅に變則的仁王會を修し、最勝王經を講じ、法華八講を修し、其他一尊一契の法を傳へたるに過ぎず、復た此より以前既に役小角が、孔雀明王の呪を誦せ

る、越泰澄が密呪密器を持せる、道慈律師が求聞持法を請來せるが如き無きに非ずと雖も、此等は概ね山林隱遁者の間に傳持せられし者にして、又唯だ密敎の一零僣に過ぎざれば、是を今高祖に依て傳へられたる眞言敎が、嚴重なる壇を飾り種々の佛具を並べ、微妙端嚴の五智如來若くは忿怒奮迅の五大明王、或は諸天善神を祭り、劍を立て護摩を燃き、眞言を誦し印を結び、最も莊嚴可重にして人心を悅服し、畏懼し悚動せしむるに足るべき嚴儀を具へて、調伏息災請雨除疫等、其れ〳〵の場合に應じて特異の法を修し、一心不亂に珠數推揉みて、加持祈禱の祕奧を盡すに比すべくも非ず、去れば澄師が歸朝の當時　桓武が最も悅び賜ひしは其本宗法華一乘の妙經に非ず、又禪律の法門にも非ずして反て、歸途の片耽貨に順曉阿闍梨より傳承し來りし不完全の密敎なりし。嗚呼不完全なる者既に然り、況ひや高祖遠く長安に至りて深く堂に入り室を窮め、青龍の玄底を叩きて佛像佛具曼荼羅梵器物に至まで、悉く其精美を請來し還り、天が斯人に下せる三面六臂的大伎倆と大度量とを以て、其時勢に適應せる宗敎を弘布せんとす、是をこれ順流に棹すと云はむ乎、降路に車を推すと云はむ乎、天人相合ひ時人並臻る、其の民心に投合し、聖意に順逐し、天下を風靡するに至らむこと期して待つべし、況ひや鎭護國家國利民福は、これ高祖が靑龍に受けて開敎の劈頭に唱導し玉ひし所。卽事而眞は眞言宗義の根本にして、餘り思索的ならざる我國民に安心を與ふるの捷徑、一門普門の佛菩薩は本地垂迹說を立てゝ、神佛の調和を致す最要旨義なるをや、是に於て乎桓武が彗に澄師に寄せ玉ひし重望は、今や轉じて嵯峨が高祖に寄せ玉ふ所と成りたる而已ならず、彼の心、常に澄師の台敎が、南都を壓するを遺憾とせし七大寺の諸高祖は、皆な高祖に依て希くは最澄を壓せんことを望み、其の大安寺の出身にして勤操門下に成長せられたるを幸とし、直ちに東大寺の別當に推選し、良辨以來第十四世の別當として、東大寺に入り、僧房の西室に寺務を視らるゝに至りぬ。蓋し是れ　桓武が造東大寺司を廢せられし以來、稍〻衰へたる東大寺の復舊を　嵯峨が高祖の手腕と德望とに望まれたる者、其一因たるに相違無しと雖も、亦南都の諸高祖が尙一層の大希望を高祖の身上に囑した

りしや疑ふ可らず。吾人は此一事を以てしても高祖が歸朝後二三年内に於て、如何に朝野の耳目を聳動し、俄然其位地を高められたる乎を推知し參らすと共に、高祖の人物と品性と兼て其の教宗とが、如何に當時我國の情勢に適合し、滔々奔馬の勢を以て朝野を席捲したる乎を驚く者なり。

今年宮城諸門の額を書改められ、高祖も亦　大師神筆唐朝無比、宮城南面諸門之額可書之者云々の宣旨を被り、南面應天門始め諸門の揭額を書せらる、蓋し東面は　嵯峨帝、西面は小野美材、北面は橘逸勢の手に成り、當時の能書各畢生の技を振はれたるなり。傳へ言ふ此時高祖應宇に一點を忘れ、揭げて後ち此を覺り、筆を投げて補ひ玉ふと。思ふに是れ齊東野人の語ならむ而已、夫れ高祖が拋筆等の技にも精妙を得玉ひしこと或は之れ有らむ、而かも今勅を奉じて禁門の奉額を書する大切の場合に當り、豈に輕躁意を致さずして、點畫を過つが如き遺漏あるべき、有らば高祖亦た不愼の罪を免れざる者なり、思ふに是れ「綱綱の誤り」を轉訛して「弘法の誤り」と傳へ、愈〻附會して「弘法も筆の誤り」なる意味深き俚諺と化し、遂に此を實際視して奇怪の傳說を爲すに至りし者ならざる乎。吾人は斯る奇怪の傳說より附會して、偉人の盛德を構成し、反て荒唐無稽の虛談に墮して、純潔無垢の芳蹤に汚點を加へむとする者多きを悲しむ。高祖が筆道に匱せらるゝ榮譽は、豈に斯の如き怪說の得て輕重する所ならむや。

今や吾人は高祖の御生涯中、最も有名なる淸涼宗論の事に論及するの榮譽を荷ふ者なり、嘉祥の官符に曰く

我大師著淸涼殿論談之筵、勅駄放光、乾臨閣修法之砌、眞龍現貌、祕密之效驗奇異難計云々

是れを淸涼殿上、高祖顯得成佛の本據とす、傳へ云ふ高祖歸朝の初め盛に顯密二教の優劣淺深を唱へ、卽身成佛の祕旨を說かるゝや、諸宗の學匠痛く此を排擊し、遂に八宗論を淸涼殿內に開くに至り、華嚴の道雄、三論の道昌、法相の源仁、天台の圓澄、眞言の空海、其他俱舍成實律宗の碩德、各論鋒を鳴し智辯の戰を戰はす、時に高祖二經壹論八箇

の證文を掲げて、各宗の來難を會し、即身成佛の實義を唱へ、辯論精審典據確實、群が る難詰を破折し玉ふこと恰も朽を摧くが如く、諸師悉く服す時に　帝大師に告て曰はく、「義は玄極なりと雖も、朕證を見むことを望む」と高祖即ち南面して手に智拳印を結び、口に密呪を唱へ結跏趺坐して五相三摩地觀に入り玉ふや、面門忽ち開けて紫磨金色の摩訶毘盧遮那如來と現じ、頂に五智の寶冠を涌出し、座に金色の蓮花を顯はし、五色の光明赫燿として光輝四方を射る、帝驚異し座を下りて南無遍照金剛と拜し玉ひ、諸德百官皆地に下りて拜跪せり、彼の長承二年　鳥羽帝の官符に「初入間持觀現座開悟、後遊清涼殿卽身成佛」と稱せられたる者此が爲にして、彼　道雄道昌源仁の諸師が、自宗を捨てゝ眞言宗に歸するに至りしも畢竟此の結果なりと。

然れ共此の顯著なる出來事に就ては古來有無眞僞の疑無きに非ざるなり第一日本後紀、類聚國史等の正史に其記載有ざることなり。第二其年月の區々一定ならざることなり、第三當時論筵に列せりと言はるゝ諸高僧中、弘仁の初年未だ嶄亂或は出藍無き者さへ算入せらるゝこと是なり。斯る三箇の疑點存するが故に、清涼殿成佛說は畢竟後世の捏造說なりと唱ふる者、宗内にも頗る多く。既に正傳の如きも疑難を存して、僅に弘仁元年の條下に記入せるに止まるなど、稍や有力の根據無きに非ず、從て他宗の議論は概して此事實を否定する者の如し、然れ共吾人は思ふ、上に擧げたる三疑難は未だ、以て全然嘉祥官符の明文を拒否するに足らざるなりと、所以如何となれば今ま八宗論と稱す、實にさも堂々として廟堂の上に高議辯論せしが如く聞え、又後世の誇張吹聽に由りて大に其聲を高めたりと雖ども、既に清涼殿と云ひ御寢殿内の論議たるより考ふれば、其表面的宗論ならざりしや知るべく、或は帝の内意を蒙り龍象一堂に相會して、一場の議戰に彩花英發せし者に非ざる無き乎、然らば國史が表面此事を記載せざりし故を以て、直に此を無視する能はざるなり、又其の年月の區々一定ならざるは、啻に此一事に非らず、高祖の御傳記中多々算ふるに遑あらず、豈に此事にのみ限り年月不定の所以を以て、全然排除することを得べけむや。其他第三難の如き若し宗論を(遊方記の說に從ひ)弘仁十

四年と決定せば、道昌師は既に二十六歳の春秋に達す、又其の論席に列せざるを必せず、源仁師に至ては依然辯說に苦むと雖も、强て暗記の錯誤と庇護せむかな。

然れ共是れ固より窮辭なり、予は本心斯る窮辭を以て窮說を苦庇せんとする者に非ず、唯だ舊思想家の心に代て一言の囘護を試みたる而已。蓋し清涼宗論の事洵に之れ有りしとせば、事情必ず高祖歸朝の初め突然、眞言の敎義を唱導し、南北兩敎を誹睨せられたる弘仁の初年に起りしなるべく、豈に弘仁十四年の後を待たむや。彼の遊方記が眞言敎義の根本たる十住心論の製作、實に弘仁十四年四月（實は天長五年なり遊方記既に此點に於て誤れり）にして、是れ清涼宗論の結果なりと思はるゝが故に、清涼の宗論と成佛顯得のこと、必らず其年の春なるべしと論ずる如き、固より事體に通せざるの論、豈に耳を傾くるに足らむや、抑〻清涼宗論を事實と認めて、假りに其起因を想像せむに、既に延曆大同の間、最澄叡山に盤桓して、法華一乘の敎義を開闡し、南都七大寺の敎蠟を壓倒するさへあるに、今又爰に大安寺の一小沙彌たりし者、數年入唐留學の功を以て直に眞言一宗の開祖と唱へ、法身直說の敎、卽身成佛の旨を談唱し、其勢堂々として將に最澄を駕し、寧樂六宗を凌がむとし、其擧其志決して少小に非ず、諸宗の高僧たる者、誰か喫驚畏慮せざらむ。諸宗林立の間に立ち、渺々浮萍の身を以て、突然一宗を唱へ出す、實に既に大膽なり、況むや在來の諸宗を一括して、顯妄の執見と捨斥し、應化の釋尊隨機方便の假說に過ぎずと喝破して、此の祕密眞言敎、獨り法身隨自意の眞說、成佛得脫の直路なり、冒地の得難きに非ず、唯だ此法に遇ふことの易からざるなりと公言するに於てをや、早く論鼓を鳴して其妄誕を詰責し、大言の罪を正さずんば、何を以て寧樂七大寺の威光を保維せむやとは、是れ宗論の發端起因ならざるべからず。故に清涼宗論無くんば止む、有らば卽ち奈何すれぞ便々十七八年の歲月を重ね、新宗敎の根礎固まるの時を待たむや。殊に異常の尊信を高祖に寄せ玉ひし嵯峨帝が、一時も早く眞言密宗の弘敷を望み玉ひ、其踐祚の當初或は宗論の如きを試みて、高祖の力量を發揮せしめ、名聲藉甚たらしめむの　叡慮在せしゝと推測し奉るも强ち不當の推測に非ざるをや、故

に吾人は正傳が、或舊傳に「大師歸朝建眞言宗之初、諸宗大德猶未服焉」と云へるに考へ、孔雀經音義五輪九字祕釋等の文勢に徴するも、皆な弘仁元年嵯峨帝の勅に應じ、内殿に於て在りし事實と覺ゆ、故に且らく爰に附記す」と附言して弘仁元年の條下に記せるを至當なりと信ず。

斯くの如くなれば爰に清涼宗論の事實を認めば、其年次必らず弘仁元年（少くとも初年）と定めざるべからず、從て上の第三難は到底解釋し難きの難問に屬す、加之ならず前に述べたる如く弘仁元年は、實に高祖が　嵯峨の殿勅と南都の推選とに依り、東大寺別當に任せられて、僧坊の西室に事務を視、續て眞言院を建立し玉ふなど、七大寺との關係甚だ親密切要なる者有るの時に屬し、此際七大寺大德に依て、激烈なる反抗運動の企てらるべしとは思ふ能はず、殊に高祖が寛容温雅の性質は、最澄師の峻烈峭勁なると全く其趣を異にし、寧樂七大寺に對しても始終融和の關係を保持して違ふこと無く、南都北嶺の間、氷炭相容ざる中間に介立して、雙方へ圓滑平和の姿勢を取り、調額戒壇の激爭に際しても、全く局外中立の地位を有せられたる高祖は、到底斯る宗論の席に、雌雄勝劣を辯難討議し玉ふの仁に非ず、又斯る紛爭に煩はされ玉ふには、餘り偉大の品性ならざりし乎と覺ゆるが如何に。

勿論說を個間に爲せば又斯の如き者あらひ、曰く弘仁元年の初め清涼宗論卽身成佛のと有りしより、寧樂の諸寺皆膝を高祖に屈し、德を慕ひ行を仰ぎ、遂に東大寺別當の重職を囑するに至りし者にして、是れ後來南都諸宗の高僧が、多く門下に來樂せし、所以なり、故に別當就任は反て宗論の事實を證する者、高祖も決して最初より南都の仰慕欣從を得玉ひし者に非ざらむと、是れ眞に至當の推測たるを失はずと雖も、今は此年別當就任の月日、知り難ければ容易く此を承認し難く、到底揣摩推度の憶說たるを免れざる者なり。又彼の嘉祥官符の如きは畢竟一種歎德稱讚の形容辭なりと解し得られざるに非ざれば、强て國史に記載無き宗論を證據立つるの力有らずと排去し難きに非ず、從て此等を本據とせる後世の著作は、其著者の假令何人たりと云ふも、猶は悉く信從するを要

せざる者なりと信ずるなり。

以上敍述し來れるが如く、清涼殿宗論は進退有無疑難相半ばして、容易に決定し難き者あり、故に吾人は敢て此光彩ある事實を抹殺せんとするに非ざるも、今一層の研究を費さずんは、到底歷史的に此を證明する能はず、從て他宗徒及び無信者を信從せしめ能はざるを斷言す、或者言く慈雲尊者は實に清涼宗論を以て後人の假托說とし、弘仁五年殿上に於ける、南都と澄師との宗論を訛傳せる者と言はれたりと。吾人は其實否を知らずと雖も、兎に角八宗論顯得成佛の一事は、吾等末徒が歷史上敎義上充分研究を要すべき問題なりと信ず。あはれ天下有德の諸師、如上の考說を以て外道異端視すること無く、切實の心を以て吾が疑難を啓發せよ、是れ唯だ吾人一身の幸のみに非ざるなり。

昨大同四年高雄山寺に轉住し玉ひしよりは、專ら鎭護國家の修法と、資弟の敎育と敎義建立とに工夫を凝らし、時々餘隙を文墨に委せて、逍遙優悠せられし者の如し。四年に眞雅九歲にして高祖の許に來り仕へ、弘仁元年には實惠上足(時に二十五歲)の爲に本朝傳法灌頂の初壇を開て、灌頂の職位を授けらる。當時門下には杲隣實惠智泉(今年二十二歲)眞紹、(今年十四歲)等あり、今又眞雅の來れるを見る、密門の獅兒は實に多く、高雄寺に養はれたりと云べし。又今年東大寺別當に任せられ玉ひし後も多く高雄に住せられしことは、其の十月二十七日請爲國家於高雄山寺修仁王經大法表に、

沙門空海言(中略)伏望奉爲國家率諸弟子於高雄山門從來月一日起首至于法力成就且敎且修、亦望於其中間不出住處不被餘坊雖頓呼心靈羊犬心識此思此願常策心馬云々

と以聞せられたるに徵して知るべく、且つ別當補任が必らず其の夏秋の候なりしを推し得べきなり。

加之ならず敎義建立は當時必らず高祖の全神を支配したる者なりしならむ乎。抑〻眞言の敎義は印度に起り支那に傳はり日本に來る、其間だ敎義の確定發達の顯著なる者ありしや知るべし、殊に日本國民は世出世を問はず、外來物を鵜飮みにするを欲せず、是を固有の消化機にかけて咀嚼し消化し、我が國情と彼の本質と新舊相調合せしめて、國民

思想に適合せしめずんば止ざること由來既に久し矣。殊に印度支那に於ける眞言教は、事相の道に重きを置き、教相門の發達未だ甚だ不充分なりしと思はる、故に今其相承說を精査し、秩序と系統とを此に與へ、廣大圓滿なる學理的構建を爲す、天台智者大師の台教に於けるが如くならむこと、蓋し高祖の宿志にして、彼の十住心建心と云ひ、兩部神道と云ひ、皆な其旨の發顯に外ならず、而して是れ高雄山寺雲幽かに風靜なる所に、無限の觀智を凝し玉ひし結果なるべし。其の弘仁二年二月一日齋所に於て　嵯峨天皇（實齡二十五歲）と俱に神道灌頂を、神祇大副大中臣智治麻呂（行年三十三歲）より受け玉ひしが如き、畢竟其一準備に過ぎざりしならむ乎。

（因に我宗製用の素絹及び標帽子は高祖當時、灌頂の際帝より賜ひし所なりと言ふ）

蓋し高山湛默禽默不告勞而投歸、深水不言龍魚不憚倦而追赴、道俗風を欽し民庶影を望む、居れば卽ち生徒市を成し、出れば則ち追從雲の如し、太陽は動かざれ共衆星此を旋り、喬樹靜なれども衆鳥此に宿る、出ては東大の寺務を攝し、入ては資弟の育英を勉め、其間だ或は河州高貴寺を營み、或は上宮の聖廟に三尊の示現を感じ、或は聖主の知遇に答へて祈禱の丹誠を抽で、或は眞俗の叩問に空谷の跫音を發す、我れ湛默ならひと欲するも境遇は到底此を容ざるなり。

斯くて內外眞俗の要務我を煩はす者有りと雖も、高山深水豈に得て紛塵の埋沒する所ならむや、當時世務禪觀の餘暇、隙を筆管に馳せ、思を翰池に遊ばせ、從容自適殆んど世に待つ處無き者の如し、左の數篇は其の情態を說示して詳なる者あり。

劉希夷集四卷（闕本）右伏奉小內記大伴氏上宣書取奉進（中畧）王昌齡詩格一卷此是在唐之日於作者邊偶得此書（中畧）敢以奉進、庶令屬文之士知見之矣、遲恐招耻遮豕、貞元英傑六言詩三卷元是壹卷（中畧）比屬臨池之次寫得奉上、飛白書一卷、亦是在唐之日一見此體試書之、虎變爲犬、雖未成功夫比之獻芹、伏願天慈曲垂一覽、不任葵藿之至願、遣弟子僧實惠隨狀奉進、輕瀆震嚴伏深戰汗謹進。

弘仁二年六月二十七日　　沙門空海進

牋紙上劉廷芝集四卷、右隨先日命書得奉進、緣山窟無好筆再三諮索無應、弱輪强背、雖郢輪巧思而鉛刀盡妙乎、太不勝意　深以悚歎(中略)六言詩者紙上無界、任意下、於廷芝集者、拘以界狹容毫無地、雜擬樣詩、字勢狂逸、狹路何堪(中略)天給忽降强以揮翰、恐心翰空費、不允聖心、珍素重汚、被抛醬盞、本及樣詩共五卷副以奉進、伏乞垂檢護勒上三部信滿奉進不宣謹奉、

後ち八月に至り唐諸王臣等の書帖十本、卽ち德宗皇帝眞跡一卷、歐陽詢眞跡一首、張誼眞跡一卷、大王諸舍帖一卷、不空三藏碑一首、岸和尙碑一鋪、徐侍郎寶林寺詩一卷、釋令起八分書一帖、謂之行草一卷、鳥獸飛白一卷を獻じ、三年六月七日唐土に習得たる處法を、筆生坂井名淸川に敎へ、狸毛筆眞行草寫四管を製作せしめて奉獻し、同七月二十九日急就章王昌齡集以下雜文十卷を獻ぜらる、表に言ら〳〵、

夫尺水本無萬重之鯤、培塿何有千丈之幹、空海瓦礫之人、謬絨燕石、不謂　聖聰索金解於芻蕘、訪華藤於朽楠、雖喜聖綸之下徹、還慙亨帝之愆過云々

然れども嵯峨は決して芻蕘朽楠を咎め給はず、益〳〵新舊の文書を求めらる、是に於て弘仁五年閏七月八日、梵字釋悉曇字母、并釋義以下七部十卷を獻じ、弘仁七年八月十五日には、勅に應じて吳綾錦緣の屏風四帖に、古今詩人の警句を書して返し奉らる、其表文に添へたる古調詩に曰〳〵

蒼嶺白雲覩念人、等閑絕却草行眞、心遊佛會不遊筆、不顧揚波爾許春、豈謂明皇交染翰、鵠頭龍爪爲君陳、祥雲濃淡御邸出、瑞草秋冬感帝仁、青山翠岳見翔鳳、華苑瓊林望走麟、更有懸針與投韭、切思相伴竭丹宸、龍管臨池調漆墨、烏光忽照點豪賓、暴風驟雨莫來汗、此是君王所愛珍、松巖數霧菴中濕、恐汗望晴經月旬、蓋虎畫龍都不似、心寒心暑幾逡巡。

皇帝其書を賞して御製の詩を賜ふ

深山居住振奇名、氷玉顏容心轉淸、世上淸書言爲聖、天縱不謝張伯英、暫乘雲嶺一念隙、書得綾羅四帖屏、初見筆精鸞鳳體、倩看墨妙虬龍形、高峰堅石未動池、絕澗長松

豈揚聲、亂點乍疑舞鶴起、相連還似旅雁行、花苑正開春日色、月天遍照秋夜明、對之觀者目眩曜、共賞草書笑丹青、絶妙藝能不可測、二王沒後此僧生、既知風骨無人擬、收置祕府最開情。

高祖の草聖たる人の擬比し能はざる所、固より神知の境界に屬す、今現人神の神野帝に依りて二王沒後此僧生の辭を賜はる、高祖の如きは能く知を當代に得られたる者と云ふべし。

當時　上又た高祖の練行を慰問して綿百屯を賜ふ詞に曰く

閑僧久住雲中嶺、遙想深山春尙寒、松柏料知甚靜默、烟霞不解幾年飡、禪關近日消息斷、京邑如今花柳寛、菩薩莫嫌此輕贈、爲救施者世間難。

と高祖、鴻澤寵辭に對して喜謝する處を知らず、則ち宸韻に次して

方袍苦行雲山裏、風雪無情春夜寒、五綴持鍚覩妙法、六年羅衣覆蔬飡、日與月與丹誠盡、覆瓮今見堯日寛、諸佛威護一子愛、何須憫恨人間難云々

財法二施、眞俗互酬、菩薩と輪王との交誼、夫れ雪の如く濟く、春の如く暖なる者有るを見る見、　嵯峨は高祖を待するに始終師友を以てし玉ひ、每事下問を垂れて其加護を仰がれしと見ゆ、實に眞言密敎は其宗義を別題とし開祖其人の資望德量のみを以てするも當時優に他宗を壓倒するの勢ありしなり。尙ほ此の開僧云々の句を以て、弘仁十三年南山隱棲中に下し賜ひし者と云ふ說有りと雖も、凌雲集延曆元年より弘仁五年間の作中に之れ有るを見ば、以て其の高雄留住の際に賜ひし者と爲すの妥當なるを信ずるなり。

以上吾人は政治上より高祖の成功を輔弼せられたる　嵯峨帝と高祖との社交的關係を略敍したり、請ふ是より宗敎上に於て相提携助力し玉ひし最澄師との關係に說き及ばむ。

蓋し兩師は吾國古今佛敎界の二大棟梁にして、同一舞臺に異色の敎幢を立て、兩騎鑣を並べて競馬場に驅逐す、若し世間の常情を以て忖度揣測すれば兩雄並び立たず、龍虎相搏噬するなひどの感有るや必せり、加之ならず後世東台兩家の爭論盛なるに及びてや、互相に其祖を尊みて他を貶し、叱罵嘲笑殆んど其祖德を汚辱するを思はず、天台霞標を

して「下及努末法力内衰、各建慢幢空論外競、彼曰山家我師之弟子也、我曰野山我師弟子之弟子也、敵々相和、徒長人我、各門賢孫幸莫不揣其本而議其末者可」云々の歎を發せしむるに至る、眞に悲むべきの極に非ずや。蓋し台家に傳ふる如く、高祖が弘仁三年四月十四日書を澄師の下に致して、悉曇の疑義を質されたる或は眞なるべく、又澄師が弘仁二年二月十四日書を寄せて祕敎の傳附を請ひ、又三年九月二十七日頭陀の次を以て、高祖の乙訓寺に宿し、懇談清話更に夜の深くるを覺えず、遂に其冬高雄山に於て受法灌頂すべきの約を定め、十一月十五日先づ金剛界灌頂壇に入り、十二月十四日重ねて胎藏界の灌頂に浴せられたるは、當日受法の人名を記錄せる高祖の眞蹟、高雄山寺に存せるに徵して分明なり。其他澄師が諸種の經論疏抄を借りて謄寫幾次に亙りしは、今日諸所に現在せる澄師の書翰、明鑑疑ふべからざる所なり、然れ其今此等の關係に考へて直に兩師を輕重せんとするが如きは、偶〻以て自家の不見識と狹量とを告白する者に過ぎず、燕雀の志を以て鴻鵠の意を忖り、小指以て溟海を測らひとす、其の自ら度らず自己の卑心を曝露し劣情を吐呼する、殆んど憐笑するに堪へざる者あり。

夫れ偉人の懷胸や洋の如く虛空の如し、此を望むに瀰茫として津涯を見ず、漂渺として攀登すべからず互に主伴と成り師資と成り、以て大法の宣揚をこれ務む、豈に區々たる彼我の觀念を其間に挾むこと有らむや。孔宣禮を老子に問ひ、佛陀敎を隱仙に叩く、法の在る所はこれ吾が師事する所、道の存する所は之れ吾が從遊する所なり、傳來の祕法を傾瀉して惜まざるの雅懷固より攸すべく、膝を後進の門に屈して耻ざるの識量又感ずべし、蓋し澄師と高祖との間を觀察するに澄師の多く諮ひ問ひ、高祖の多く與へ答へられ、澄師が高祖に負ふ所多き決して疑ふべからず、往復の書翰既に其證痕を存せるを見る、觀よ高祖が澄師に答送せらるゝ常に、釋空海或は沙門遍照と單に對等の禮辭を取らるゝに反し、澄師は必らず末法弟子最澄、受法弟子、下弟子、小弟子、下資、永世弟子等と甚しき遜辭を用ひ、殊に智泉法師に對してすら泉法兄の敬語を用ひられたり、是れ豈に單に謙讓の美德とのみ見做す可けむや。然れども高祖の書中業已に「兼惠止觀妙門、頂

戴供養不知攸措」と云ひ「今思與我金闕及室山、集會一處、量商佛法大事因緣、共建法幢報佛恩德」と云ひ「從三日起首至九日一期可終、十日拂晨將參入、願留意相待是所望」等の語有るを見ば、其の膠漆の芳松柏と共に凋まず、乳水の馥芝蘭と將もに彌〻香しき者有りしや必せり、彼の天台霞標が、初祖之與野山、同出一世、俱遊南朝也、毫無有挾鷙伐愛憎之念于其間矣、故悉曇彼問于我、灌頂我受于彼、彼則專弘眞言、豈實闢字義耶、我則初異灌頂豈良乏師承、要在互爲師資相輔行化也と稱せる者、尚は稍や其祖に偏せるの嫌無きに非ずと雖も、先づ公論と云ふべきなり。故に終生音問を互絶せず、澄師の親ら高祖の室に入るあれば、又高祖の諸弟子を率て叡山西塔供養會に赴くあり、叡岳諸弟子の切りに高雄に來遊する有りて、其間毫も隔意反目の跡在るを認めず、彼の圓仁圓珍に至り、頗る眞言密教を以て東寺南山に對抗せんず氣色を萌したりと雖ども、是れ決して澄師の本心に非ざるべし、況ひや後世の婦女的反目、匹夫的罵嘲の卑陋なるに至ては、各自其の祖意を誤るの太甚しき者、兩祖共に地下に其迷妄を悲まむなり。

特に笑止に堪へざるは、高祖を以て澄師の孫弟子に當ると云ひ、以て兩師を軒輊せんと試むるの蹤なり、斯れ台家中一派の盲目論者が古來唱へ來りし者にして、其所以他無し、高祖は大安寺勤操和尚に就て出家せられ、而して和尚は澄師入唐歸朝の當時、延曆二十四年九月一日、高雄山に於て澄師より本朝最初の灌頂を享受せられたればなり、然れども個は毫も師弟の關係を以て目すべきに非ず、唯だ本朝最初の灌頂なるが故、特に宣旨を以て南都諸大寺の高僧と共に其壇に入られたる而已、若し夫れ斯る論法を以て直に師資の關係を說き得べくんば、和尚は其後ち弘仁七年諸大德を率ゐ、高雄山寺に詣りて親しく高祖の三昧耶戒壇に入り、兩部の灌頂に浴せられしが故に、反て以前の弟子に對して師禮を取られたる者と爲ざるべからず、世間豈に此理あらむや、況んや若し彼等の如く牽强附會之れ務めば、操和尚が再度高祖の灌頂壇に入られし者、是れ或は眞の澄師の灌頂の蕪雜杜撰なりしに慊焉たりしが爲めと論じ難きに非ず、殊に澄師が以前傳法大阿闍梨たりし位地を捨てゝ、其孫弟子たる關係ある高祖の門下に入壇受灌せられたる如き、

實に甚しき不見識不面目に非ずや。古人曰く弟子悟在師後故云弟、解依師生故云子と、豈に一時の受戒入壇の如き而已を以て直に長臘者を資弟視すべけむ、嗚呼後世末學の徒我見、偏執漫りに言を設けて累を高明無垢なる乃祖に及さむとす、豈に悲むべく笑ふべきの至に非ずや。

以上述べ來れるが如く高祖と澄師の交は、膠漆芝蘭尚は曾ならざる者有る而已ならず、高祖の柔和慈仁は天性佛意の揚發せる者、更に其匹儔あるべからず、然るに何等晴天の霹靂靜海の颶飈ぞ、答叡山澄法師求理趣釋經書に於て、頗る激烈にして一點の假貸無き文辭を見ること、今其書を見るに荒天の前に於ける無類の快晴靜穩の如く、初め至極丁重親密の辭を並べ了りて、「忽開封緘具覽理趣釋」と用務に入り一轉して「雖然疑理趣多端、所求理趣指何名相」と眞向一擊、又忽、愼重の態度を取りて、「夫理趣之道、釋經之文、天所不能覆、地所不能載、塵刹之黑河海之水、誰能敢得盡一句一偈之義乎」と、攻歩を進めて振姿一番、「余雖不敏畧示大師之訓旨冀子正汝智心淨汝戲論、聽理趣之句義密教之逗留」と、彼を眼下に睥睨し、論旨堂々として可聞、可見、可念の三理趣より、心佛衆生の三理趣に及び、或は文字、觀照、實相の三種を示し、或は彼我の三密を說きて、身外に法の求むべからざるを言ひ、又「余未知公是聖化耶、爲當凡夫耶、若佛化則佛智周圓、有何所闕更事求覓、（中略）若實凡求、則應隨佛敎、若隨佛敎則必須愼三昧耶、越三昧耶則傳者受者俱無益也」と攻辯し、「非法傳受是名盜法卽是誑佛」と、酷烈骨に入り。又「古人爲道求道、筆勢に、實信實修の要を說き、「自非酌海之信磨鏡之士、誰能信一覺之妙行修三磨之難思、止止舍舍吾未見其人、其人豈遠乎、信修則其人」と暗に澄師の無信修、受法を叱咤する者の如く、終に「子若不越三昧耶護如身命、堅持四禁愛均眼目、如敎修觀臨坎有績、則五智祕璽旋踵可期、況乃髻中明珠、誰亦祕惜努力自愛」云云と結せらる、是れ決して尋常一樣の往復に非ずして、頗る憤懣の逸氣を筆端に遣らるゝ者の如し、是れ或は澄師が高祖の寬懷雅量に狎れて、請法求道稍や其道を失せむとするを怒り、顏を正して公忿を發せられ

たる者に非ざる無き乎、然らずんば吾人は到底、此の青天の霹靂を解する能はざるなり、尙は高祖が　嵯峨帝と澄師に對する關係に就ては一層精究、以て其缺を補ふ所有るべし。

要するに　嵯峨の登極は、高祖の興望と勢力とを九天の上に登して、遍に澄師を凌駕するに至らしめ、一世を風靡し朝野を傾動せしめたると同時に、澄師の請問來叩は、遂に南都六宗の高僧をして到底、其の企及し難きを覺悟して、其門下に來らしむるに至りぬ、嗚呼一天の主たる嵯峨帝は、皇后、皇子、百官を率ゐて高祖に歸依し玉ひ、四海の宗たりし澄師は、圓澄、光定、泰範以下の諸高弟と共に、高雄の灌頂道場に入りぬ、高祖の聲望揚ざらむと欲するも豈に夫れ得べけむや。

是より先き弘仁二年十一月九日の官符に依り、城州乙訓寺に轉住せらる、符に曰く「伴僧住山城國高雄山寺而其處不便省宜承知令住同國乙訓寺者」云云と思ふにこれ地僻境幽、禪念持觀に適當なる高雄山寺は、南北兩京の間に往來して、朝野眞俗の歸向を一身に繫げる高祖を置くに餘り不便なるが故ゑ、遂に上下の希望是に至らしめし者乎、勿論此の移轉は寺主願演等の請に依り、其寺興隆の任に當られたる者にして、明年十月直に高雄へ還歸せられたりと雖も、亦以て朝野の希望が容易に、高雄の靜居を許さゞりし狀景を察するに足るなり。

三年十月高雄に歸住せらる、長者次第に、三年十月二十九日辭乙訓寺、永住高雄山寺文是なり此冬澄師は遽に、乙訓寺に於ける契約を踏み、傳法灌頂の壇に入らむが爲めに、諸大同法を促して高雄に赴る、十一月十五日澄師及び、和氣眞綱、同仲世、美濃稚人四人の爲めに金剛界の壇を開き、十二月十四日に至り、緇素一百九十餘人胎藏界の壇に入る、最澄、泰範、賢榮、延暹、圓澄、光定、長榮、圓琮、民部少輔高階眞人、大神朝臣廣野、麻田吉門等其人なり、當時、學徒次第に高雄に雲集し緇林鬱茂、近童駢羅として爰に、三綱を置き、制規を定むるの必要を感じ、三年季冬、近くは衆の簡に應ひ、遠く は渤海の遺制に應じて、禪師景都を上座に、苾芻實惠を摩々帝（寺主）に、智泉法師を

羯磨陀那（悅衆）に任じ、又た義惠を以て直歳と爲し、眞俗内外の寺務を處理せしめらる。

高祖が卽事而眞、當相卽道の祕密根本的思想は、些々たる三綱補任の牒書にも其の端影を顯はし、聲字卽實相名稱卽眞理の旨を、各自の稱呼に就て開示せられたるを見るべ而白き、彼の牒書の中に杲鄰、實惠、智泉諸師の名字を呼や、「杲者除雲霧於大虛滿光明於法界、鄰者養德法雲之震宮紹位大日之覺殿、名含其德實當合契」と稱し、實惠師をば實者弃虛掃僞之義、惠者剪愚破暗之稱、遊實相之三昧證金剛之妙惠、斯德斯在、省名會理、衆心共許余亦印可」とたゞへ、智泉法師を歎じては「金剛之智大悲之泉、既含自行化他二德、必須調和緇素二衆同入眞俗二諦」と云はる、其の比擬の妙、解說の巧、眞理を微言に寓し幽玄を片語に釣る、吾人は實に高祖の奇才妙想に敬伏せずんばあらざるなり、尙ほ其次でを以て佛敎學道の要旨を敎へ、學徒が日夜遵奉すべき訓戒を示さる、句々金玉、吾人末徒が拳々服膺して旦夕に忘るべからざる者あり、箇少しく其言を取りて各自が座右の銘誡と爲さむ曰く

夫剃頭着染之類、我大師淨伽梵子呼僧伽、僧伽梵名翻云一味和合等意上下無諍論、長幼有次第如乳水之無別、護持佛法如鴻雁之有序、利濟群生云云　或は

宜汝等二三子等、熱願出家之本意誰尋入道之源由、長兄以寬仁調衆、幼弟以恭順問道不得謂賤貴、一鉢單衣除煩擾、三時上堂觀本尊三昧、五相入觀早證大悉地、變五濁之澆風動三覺之雅訓、酬四恩之廣德興三寶之妙道、此吾願也」云云

以て高祖が育英養馨の本意を了知すべきなり

四年春叡山の留學生泰範圓澄光定長栄等の爲に重ねて灌頂壇を開かる、是れ昨冬、澄師自から兩部の灌頂に浴すと雖も、山務多端自ら留りて密軌の極を研究すること能はず、故に門下の俊髦を差遣して其玄底を學得せしめひとする者なり、當時澄師が祕密眞言の研究に熱心なる頗る注目すべき者あり、經論疏鈔の借寫と云ひ、門下生の差遣（言は附屬と稱するも其實留學なり）と云ひ、決して尋常一樣の請益に非ず、思ふに法華一乘の

本宗を當世に適應せしめんと欲せば、到底圓頓一實の妙理を談じ、一心三觀の觀地を凝し、寧樂舊宗の流を追ふて理談門に、驅馳するのみの能く爲す所に非ざるを覺悟し、其の渡唐の際深く眞言密乘を極めざりしを悔るの念益〻切に、遂に高祖に依て其奥秘を叩き、法華一乘の宗義を潤色せんと企てられし者の如し、去れば其借書の餘り頻繁なるを恐るゝの情、既に澄師の書翰に見え、固より心密に靑天の霹靂、頭上の震雷を期せられし者の如し、今茲正月十八日の來翰に「伏乞吾大師莫疑用奸心盜寫取御書發慢心、隨泰範佛子申意所寫本好便借與小弟子不發越三昧耶心、委曲之志具知泰範佛子、更不導以表指南志天々照稽首」云云の語有るを見る、是れ豈に虛心平氣者の發する所ならむや。

今年右大臣藤原冬嗣、家門の繁榮を祈られむため、高祖に請ふて鎭壇の法を修し、東大寺に南圓堂を立てゝ、不空羂索觀世音の尊像を祭る、其時役夫歌ふて曰く

補陀落や南の岸にすまひして北の藤波いまを榮ゆる

冬嗣は北家の人、而して其子孫永く藤原の統を受けて北の藤波いや榮に行く吉兆を見る、冬嗣の滿悅知るべきなり、斯の如く高祖は始終高雄に屛居せむと欲せらるゝも、世人の倚賴は容易に其志を遂ぐるを許さず、爲に反て棲隱の念頻〻切なる者有りしを見る。此の五月晦日諸弟子に示されたる弘仁の遺誡、卽ち「凡出家修道本期佛果、不更要輪王釋梵家、豈況人間少々果報乎」の嚴誡及び、去年十月澄師が高島泰範の下に送れる書翰に高祖の言として「卽告曰空海生年四十期命可盡、是以爲念佛故住此山寺、東西不欲宜所持眞言之法附屬最澄阿闍梨」云云と云へる者など、是れ明に棲隱遁世の熱情を洩せる者に非ずや、然れども今は高祖が、不惑の年を以て諄々遺誡を資弟に垂れ、若くは期命可盡などの語を致さるゝは、吾人が深く其眞意を解するに苦む所なり、抑〻當時高祖の位地は殆んど人天の師範と成り、朝野靡然其德になつく者ありと雖も、未だ澄師の叡岳に於けるが如き根據地の定まれる有るに非ず、附法瀉瓶の龍象決して多きに非ず、靑龍和尙の遺囑其の什一を果せるに非ず、或は又其健康を失し、弘敎傳燈に堪へざるの憂ありしとも覺ぬず、特に中壽感興之詩並序の文に徵せば、今歲中壽不惑の年に當り、俗家の親酒賀篇

に代へて文殊讃佛法身禮、四十頌の義註を撰し、兼て方圓二圖を作りて其説明を施し、生盲の徒をして、「二諦の眞俗は俱に是れ常住、禽獸卉木は皆是れ法音、安樂觀史は本來胸中」の妙理を覺らしめ、自身は靜に、彼の彩を含める雲雨、或は灑ぎ或は舞れ、絃を調ぶる風葉乍ち吟じ乍ち寂に、瀧水聲鼓の如く、伐木柷敔の如き間に、曲れる根を摩し、松柏を看膳とし茶湯一椀に滿足して、

黄葉索山野、蒼々豈始終、嗟余五八歳、長夜念圓融、浮雲何處出、本是淨虛空、欲談一心趣、三曜朗天中。

と高吟し物外に超然として逍遙また足れるの年なり加之ならず當時高祖の一身は朝野の尊信を維げる活偶像たらむとする外、本朝眞言宗の興替は一にかゝつて高祖の雙肩に有り、然るを今斯の氣細き擧措と、賴無き言辭とを見る、縱令ひ朝露電光の依身、朝夕を必すべからずと雖も、今厄前に毒瘡を患ひて快愈頗る疑はしきに際し、聖智高祖の如きも亦世俗の讒信を免れず、餘厄擾災のため山寺に閉居して、謹慎自ら遣られ爲に、此言ありたる者に非ざる乎、吾人は密に此説の當れるを信ずる者なり。

弘仁五年甲午御年、四十二歳東大寺別當の秩滿ち、職を義海法師に讓りて退かる、八月下野國司伊博士の請に應じ、勝道上人のために「日光補陀落山に上るの碑銘」を撰せらる、敍事の精妙、寫景の細緻を極め、雄大の辭、崇高の筆、高祖の作中に傑出せる長大雄篇と稱すべく、日光の山水實に高祖の靈筆に依て、初めて其美を恣にせりと云ふべし、嗚呼山の崇を寫すに心の崇を以てし、水の清を寫すに心の清を以てす、心境相應じ而も筆能くこれに如ふ、宜なる哉一たび其文に接して、歴々實境を踏破するの想あること、彼の濟公が益田池及び青龍和尚の碑銘と併せて斯碑を採錄し、三大雄篇を一卷に收むる者、其要意眞に悅ぶべき者あるを見るなり。

尚は鎌倉志によれば高祖今年東國に遊化し、相州江之島を開きて、辨才天女を勸請せられしと云へど如何にや、

一昨年斯命可盡と言玉ひし高祖は、今や反て廣く天下に法雨を降し、垂天の翼を振ふて四海に翺翔せんず、志望を旋らし給ふに至れり、而して先づ有緣の道俗を勸募し、祕密の經藏を書寫して、弘く講讀宣敎の用に致さんがため、弘仁六年弟子康守安行等を東北に遣はし、陸奥慧日寺德一菩薩、下野廣智禪師、甲州の藤太守、常州藤使君等に懇囑して、寫經募緣の妙業を助けしめ、七年六月遂に表を捧げて、高野山の地を賜はり禪院を建立せんことを奏請せらるゝに至る、以て其の中央帝都上流の傳道漸く効果を奏し、進で着々地方邊陲に敷及せしめんの意向を窺知すべきなり。

回顧すれば去ぬる大同二年御年三十四歳、九州より上京して入唐求法の厚恩を謝し、本朝開敎の勅許を得玉ひしより、烏兎匆々こゝに十歳に垂んとす、而も未だ其足跡曾て能外に印するを見ず、思ふにこれ其志たゞ早く朝廷百僚の間に眞言密敎の根礎を樹て、上より下に華より鄙に、漸次これを風化せしめんと、密宗傳來の開敎法を因襲せられたるのみならず、又當時の狀勢より考ふるも、先づ皇室貴族に近邇して社會の上流を引入し、政治上の勢力と社會上の光榮とを利用せずんば、到底以て天下を席捲し四海を風靡する望無きに由らずんばあらず、遠く呼ばんと欲する者は先づ高きに登り、水を制せんと欲せば必ず其源に於てす、特に中央集權の時に當り、國民一般の勢力は未だ政治上に認識せられず、國民の實勢は多く中等社會に在りとの確言は、容易に當代人士の腦裡に浮ばざる所、其の高祖が上下兼濟の心、遠鄙跋渉の人を以て、尚は先づ王室貴顯の間に其敎種を植ゑ玉ひし者、又止むを得ざるなり、況んや嵯峨帝の殊遇と當代の風潮とは、知らず識らず皇室と密接し、國家を抱合するに至らしめたるをや、豈に其跡を見て其人を尤むべけむや。

然れども、過去八九年間に於ける高祖の行動、未だ甚だ人心を擧動する者無きは何ぞや、抑〻其德望の一呼以て天下を動かすに足るもの無きか、或は其心力多く內部の經營構思

に消せられて、廣く社會に應ずるに足らざりし乎、鷙鳥且らく翼をゝさめて、將さに冲天の勢を養はむとす、雌伏靜息大に雄飛の機會を待つは可なりと雖も、十年の長日月間いまだ一の根據地だも設けられず、僅に高雄に禪居して英を育し訪に接し烟霞に長嘯して、文墨の餘戲に徜徉せらるゝに過ぎず、其間決して堪默不動なりと云ふに非ざるも、大々的活動力に富める偉人の擧動として吾人は轉た落莫の感無き能はず、思へば此十年は實に人生活動の最好機にして、鬱勃たる勇氣滿身に溢り、二十年期に於ける輕卒未熟の覇氣を去り、又四十年期に於ける過熱過慮、寧ろ所得の位地を維持するに傾ける時代に非ず、平人に在りても奮然決起手に唾して立ち、天下計るべしと意氣込むの時なり、然るに此を後の天長年間に比すれば、反て退隱修德の方に傾けるが如きは頗る吾人の了解に苦しむ所なり、然れ共是れ當時いまだ羽翼備はらず聲望足らず、其地位と云ひ、年齡と云ひ、以て充分南都北嶺を心服せしめ、天下民心を歸向せしむるに足ずと考へられたるが爲か、精悍剛勁の氣以て人を凌ぐに非ずして、自然に社會の尊信を惹き起し、一宗一派の開祖と仰がるゝには、偉人と雖も到底、不惑以上を待ざるべからざる者あるか乎、强て其早きを貪はるが如きは、反て其遲きを來す所以にして、彼の急性者の失敗蹉跌多きもと是がためなり、高祖の愼重韜晦、豈に深く慮る所無しとせん哉、非乎。

要するに、過去十箇年許は隱忍雌伏、靜に英を養ひ德を修め、思を練り神を澄し、自ら聲望のあがるを待ち玉ひし時代にして、其間だ朝に金闕に趨せて道を輪王に說き、夕に顯門を叩て敎を清華の間に敷き玉ふ、加ふるに世間百般の學藝に綜通し三密の修行圓滿して、身語の說法自在用無礙に達せられし高祖に於ては、一言一動悉く攝化利生の方便となり、應對談話の際、冥々の裡に偉大の感化を彼等の精神上に與へて、深く其信仰を煥發したる者ありしや必せり。蓋し德無く學無く見識無き、俗僧をして顯貴の間に出入せしめば、宮に以て彼等の信仰を煥發する能はざる而已ならず、其權に屈し其威に打たれ、俗界の虛榮と華麗とに眩惑して、遂に彼等の迷信を邀へ、負誇心に投じ、驕傲と放慢とを增長せしむる、翰間者流と化し去る者滔々皆是なりと雖も、今ま高祖の如く、深く高雄の禪關

に閉居して、深烟幽霧に長嘯し、溪聲松籟に放吟し、超然塵外に遊神して、偉大の道心と、深奥の信念と、異常の修力と、魁偉の容貌とを兼具し、且つ未だ不惑に達せざる壯齢を以てして、當時の人士が最も欽仰せる大陸文明の精を摘み萃を味ひ、世出世兼通の達識高邁を以てす、彼等俗界に翺翔せる輩を以て、時々この偉僧に接するや、恰も蟻丘を去て芙蓉を望み、暗室を出て陽光に嚮ひ、シロコを避けて清風に向ふが如く、紛情拂ひ去て心氣頓に清々、俗腸洗ひ去て宛然蘇生の感ありしや必せり、是に於てか百川の海に朝宗するが如く、翕然競ふて其清風に浴し陽光を仰がむとし、上流の人士靡然其門に集り、祕密灌頂の香水普く、彼等の心胸に浸潤するに至れり、高きに登りて遠く呼び水を其源に制せんとせし本意是に達す、此の上の計唯だ、速に教澤を萬民に及ぼし、併せて後世萬代に其惠福を被らしむるの策を致す有るのみ、是に於て乎高野開創の盛業と成りぬ。

高祖高野山に於て入定の處を請乞せらるゝ上表に曰く

空海聞山高則雲雨潤物、水積則魚龍化產、是故耆闍峻嶺能仁之迹不休、孤岸奇峰觀世之蹤相續、地勢自爾、

と然るに我國の佛教は歴代　皇室の尊信と、國民の性情と、國土の形勢とに影響せられて、頗る貴族的朝市的と成り、金刹銀臺朝野に櫛比し、談義の龍象毎寺林をなす者ありと雖も、高山深嶺尚ほ修禪の客少く、幽藪窮巖固より入定の賓稀なり、眞俗融會すべき眞教が其の一方に偏寄する斯の如きは、豈に佛教の祥兆ならむや、加之ならず是を高祖の開教事業より考へまゐらせ、眞言一宗の前途より觀察するも、此の際早く一大靈山を占トして、立脚的根本道場を定むるは實に焦眉の急務なりしなり、蓋し卽事而眞は眞言宗の要義、和光同塵は高祖の根本精神なりと云ふと雖も、唯だ朝市の間に出入し、紛塵喧雜の裡に其教を敷傳したるを以て、傳道事業の盡きたる者と爲すべからず、進んで一大根本道場の廣く、四衆の信仰を集中する者無くんば、高祖百年の後ち夫れ何を以てか、天下の信を收攬し得むや、否な教法の興替は毫も根本道場の有無に關せず、唯だ英哲吾に過ぐる者を得て、付法授統以て足れる有るは、彼の釋尊孔老基督等、東西聖賢の迹に徴して

明なりと雖も、若し修禪觀念の深院幽刹あらずんば、豈に能く其宗派の學徒を育し、潛勢力を蓄積して其尊嚴を維持することを得むや、殊に當時社會の實狀を見れば、眼前金閣寶樓甍を朝野に並ぶる有るのみならず、他方を顧れば既に、役優婆塞は大峯山を開き、越の泰澄は越中の立山を開き、勝道上人は日光山を開き、傳敎大師は叡山を開き、各自名山大岳に其本據を構へて、不朽の信仰を其山と共に維持するの計畫を爲せるあり、然るに高祖は未だ僅に高雄の一小山寺を得て是に棲隱せらるゝに過ぎず、淸懷雅量天空海濶の資に富める高祖の如きも、豈に意に慨然たる無らむや。將さに如上の諸靈峰に秀出する者を得て、鐵塔の遺敎靑龍の傳法を其峯頭に納置せんこと、蓋し寤寐に念頭を去らざりし所なるべし、是に於て乎、遂に於紀伊國伊都郡高野山請乞入定處表となりぬ。

高祖が高野山を撰定し玉ひしに就て、古來種々の異說存すと雖も、到底其いづれと決定すべきに非ず、畢竟諸因緣輻輳し機緣順熟して、祕密眞言藏と自己の定身とを斯山に留め、龍華三會の曉を期し玉ふに至りし者、强てこれを其一因に歸せんとするが如きは、固より事情に通せざる者と云ふべし。故に彼上表及び、主殿助布勢海への消息に、

空海少年日好陟覽山水、從吉野南行一日、更向西去兩日程、有平原幽地名曰高野、計當紀伊國伊都郡南、四面高嶺人蹤絕蹊云々

と記し、其少年修渉の日曾て一たび歷覩せし舊地なる旨を記したまふ者固より眞なるべく、去りとて金剛峯寺雜文に

大阿闍梨曰高野建立弘仁年中也、始大僧正問求建立伽藍處、時有良豐田丸大夫紀伊國人也、是卽圓明律師尊父也、以聞大僧正於紀伊國伊土郡、深入南山有幽仙地其內廣博無量也、於茲大和尙甚以感悅、差信叡法師爲使令臨見其地、卽信叡法師還來言、實見其地廣大無邊、其中可建國郡、大師重差泰範實惠明覽地形並版相、時兩僧還來言、甚有吉祥相、實是祕敎相應之地也、大師益歡悅自臨始立伽藍云々

と云へる、事實上眞とに爾あるべき者にして、當時の事情に勘到せば、又一槩に排斥すべきに非ず、加之ならず修行緣起に

漸厭世間囂塵、縮尋禪定靈崛、以弘仁七年孟夏之比出城外經歷矣、大和國宇知郡逢一人獵者、其形深赤長八尺計、著小袖青衣骨高節太、以弓箭帶身大小二黑犬隨從之、則見和尚遇通問不審、和尚踟躕問訊子細、獵者云我是南山犬飼、所知山地萬許町、於其中有幽平原、靈瑞至多、和尚來臨住、自以助成矣、追放犬令走之間即失」云々

と記せる者、是れ即ち飼場明神出導の由緣として、高野山撰定に關し古來、最も俗間に奉信せられ、最も有力說として今日尙ほ高野に、明神飼使の神犬ある所以なれば、是れ決して一言に指斥すべからず。

以上三說の不同ありと雖も吾人を以てこれを見れば、三者强ち調和し難き者あるに非ず、蓋し上表並に高野往來、消息分明なるが故に、前年修渉の勝地たること疑ふべきに非ず、而も此事ありしとて直に其他を否定するは抑〻、事理を辨せざるの太甚しき者なり、曾て一たび跋渉の故地なりとするも、既に數紀の往時に屬し、爾來心を敎理研究に委ね、南船北馬、席暖かなるに遑あらず、然るを今禪定適當の靈地を探尋するの際、たま〳〵其勝地を想起し且つ豐田丸大夫の進言を聞きて意益〻動き、遂に自ら之を再踏試せんとして、偶然獵夫の過ありしに非ざる乎、抑〻今根本立脚の淸域を占定せんとする者が、其撰擇を忽にせず、他に聞き自ら試み、三四熟考尙ほ其決定の難きを憚るは、固より自然のこと、豈に其の高野撰定の擧が甚だ容易ならずして、爲めに諸說を傳ふるに至りしを怪まむや、又た其深山幽谷人跡稀なる所に入らむとして、先づ地理を獵夫に質すは、もと當然の情なるのみならず、强て神怪を此間に挾み奇蹟を喋々するが如きも、亦當時の信仰と智識とが必然免れ難き所の者なり、其の日々の吉凶禍福皆な悉く神意の所爲と妄信し、卜占呪禁の術に依て公私の事務を決定せんとする當時の社會に、偉人の宗敎的動作が凡て神祕不可思議の陰影を帶て、後世に傳へられたるを訝かり要せん、吾人は飼場明神のことを以て毫も怪むべき所以を見ざるなり。

其年七月八日太政官其請を允許し、參議從三位行左大辨秋篠朝臣安人、左少史正七位上村主豐田麿の署を以て宣を紀伊國司に下し、同月廿八日、守藤原朝臣文山、介縣江繼人

の遶署を伊都郡賀有田三郡司に下し、東は丹生川上の峯を限り、南は當川南長峰に至り、西は應神山の谷に達し、北は紀ノ川に至る間の地を高祖に賜ふ、是に於て即時泰範實恵を遣し、樹を伐り地を拓き先づ一間の草庵を營み、住侶の假居に充てらる、是れ高野金剛峯寺の開創なり、峯は八葉の蓮臺に擬し、堂は都率の内院に擬す、三十六水一波に流れて東に注ぎ、老樹森々千歳の色を裝ふて斯峯を莊嚴す、潺湲たる溪水は法身常恆の説法を表し、松風靜に歌舞の菩薩の音樂を奏す、深山の平地眞に修禪入定の靈域なりと云ふべし、殊に山靈丹生津姫命、巫祝に託して其の威神力を望み、永く密教擁護の仁に當らむことを望まる、高祖の滿足慶喜果して幾許ぞや。當時高祖は開創の營を上ぐると同時に御登山あり、親く營作を觀玉ひし旨、傳ふる者あれど如何なりけむ、今茲七月勅操和尚等のために灌頂を高雄に開き、八月勅賜の屏風書了て獻ずる表あり、十月聖體除厄の修法を致され、十二月藤眞川等のために其師淨村宿彌淨豐の擧用を或大官に請ふの文あり、其社會的位地決して閑悠ならざりしを見ば、登山月を踰ゑて高雄に還るの説疑はしきなり、翌七年は時々高野へ往來せられ、先づ四至を結界して壇場伽藍の端緒を開き、次第に師資住坊の建築を設計せらる、當時四維七里、山嶺に緣ふて其外邊を連ね、以て淨域を限らる、南方寶珠峰、北方獲鉢峰、東方摩尼峰、西方阿彌陀峰、是れ結界の限地なりと云ふ、尚ほ壇場開鑿の初め、土中より寶劔經軸の類を發掘せしと言傳ふ、古佛説法の靈迹、神佛遊行の淨刹が、峰の八葉に擬ゑられる、所以あるかな。

（因に道範記曰高野八葉峰、有内外二重傳法院山東持明院山東南中門前山南藥師院山西南御社山西正智院山西北眞言堂後北勝蓮華院後東北以上内八葉大門外八葉西方葉開之云々）

弘仁九年春天下の大疫に當り、嵯峨帝親ら宸翰を染め、般若心經一卷を書寫して攘災息疫を祈り玉ふや、高祖講敍の選に當りて、深く經の幽致を極め、秘旨を開闡して鷲峰説法の玄底を演示し玉ふ、感應空からず、未だ結願の言を致されざるに蘇生の價途にたゝずみ、夜變じて日光赫々道場を照し、疫癘忽ち止み、上下其惠によりきと言傳へらる。大日本

史に「是春大疫天皇親書金字心經使令僧空海慶讃擕之」と記せる者卽是なり、彼の本朝通鑑に九年春天下大疫と記し細註に「浮屠氏說稱天下疫疾帝於嵯峨院寫般若心經斬之勅空海令慶讃堂中忽發大光明暗夜如晝疫卽止今大覺寺是也」として嵯峨院に慶讃し玉ひし旨を云へり、今日山城名勝志を見るに「大澤池乾有心經堂舊跡此堂從嵯峨天皇至後奈良院被納宸筆心經」云々卽ち慶讃了りて此を別堂に奉納せられし者と思はる。我等が今日拜し奉る般若心經祕鍵は、當時講讃の稿本なりとぞ。

今年十一月中旬より又高野に來住して營構を企てらる、其間だ諸家との往復頗る快適暢意の趣ありて存す、深山寒雪の裡に諸弟子と幽居して、靜に塵外に長嘯する者、蓋し一段の清興ならずとせず、況ひや時々禪室を出でゝ經作、營構のことを見舞ふに於てをや、左の數通の往復特に幽雅清逸の情を存するを見る

久阻清話馳仰積懷、中冬嚴寒伏惟動止如何、貧道易量辱惠擔經史一荷一悚入覲之外特思其人云々

貧道爲默念去月(十一月)十六日來住此峰、山高雪深人迹難通、限此事久不奉消息、悚息何言辱惠米油等物一喜一躍、雪寒伏惟動止如何、所命兒孫者待春交來穩便護因還云々空海去月中旬來住高野山寺被限造菴室事無人馳參久闕奉狀深以悚息前附上大史向彼略諮達消息計已體察、禪念無間不得就彼展諮悵望何言云々

羽蔭春尙は南山に在り、十年暮春月十日紀大守への返牒に

上畧開書承指南覩物想其人也、卽欲奉還答葛生下鎭西于今不歸、以此事久闕如、計必有恠、松巖之下想白雲之人、秋月一推春華再開、朝々夜々誰堪九廻、恕非故怠深幸也、今因便風奉此不具南岳沙門遍照狀上、

以て其閑寂淸高の情致を想見すべきなり

六月朔日大塔心柱を虎峰に造り、二十八日壇上に運ばる金堂裏に既に成り、今又た大塔の根本柱に及ぶ以て、壇上伽藍の造營次第に其効を運ぶを知るなり、是より先き五月高野の地主兩所大明神、并に嚴島氣比兩社及び百二十伴類の神祇を勸請し、四社大明神と

崇めて山王院に祭り、伽藍鎮守の守護神と崇め、兼て丹生津姫神の舊社天野の地に曼荼羅院を立てゝ、兩部神道の思想を發表せらる、是れ當時に於ける日本宗教界の一大現象にして、尚ほ叡山に於ける山王神社、南都興福寺に於ける春日神社の如く、爾來千有餘年の間だ我信仰界を支配する而已ならず、神佛の兩思想を調和し國家的佛教を構成するに至りたる所以の大動機、吾人は別に大に此思想の發達を研究する機會あるべし。

十一年傳燈大法師位を賜ふ、是れ或は一昨年攘災の恩賞に非ざる無き乎、今年は昨年澄師が發表したる圓頓戒の爭論益〻沸騰し、南都より述方示正論出で、北嶺より顯戒論出で、雙方火花を散して龍爭虎鬪、朝野を動す者ありと雖も、高祖は曾て爭議の渦中に投せず、固く局外中立を守りて片言隻句を其間に挾まれたるを見ず、思ふに兩方に對して始終平和の姿勢を取來られたる關係と、又此際に於ける高祖の一言一動は直に兩者勢力の均衡を破り、惹て敎家の恐慌を來すの恐あるが故に、高祖自身も勉めて此に干與するを避け、皇帝始め當路の諸有司亦爾からむことを望まれしなるべし、蓋し當時澄師の聲望意氣頗る盛に、殆んど南都七大寺を壓倒する者ありと雖も、寧樂舊宗の餘勢未だ全く侮り易からざる者あり、碩學古德多く凋落し去りしと雖も、尚ほ護命、長慧、豐安、修圓、泰演等の僧綱、儼然壘を守りて、天下敎權の大半を握り、朝廷と云へども未だ大に敬憚する所あり、南北相持して毫も下らず、俱に密に高祖の加擁を望みし者あるや必せり、其勢恰も魏蜀相對峙して孫吳其側に立てるが如し、高祖たる者固より輕動すべき時ならむや、其仲秋の交眞濟幹海等を伴ふて、颯然東海東山の諸道に發向せられたる者、一には中央京畿の開敎漸く其實績を奏せるに由り、廣く法雨を邊陲に霑被せしめんの意なりしや明なりと雖も、亦都に在りて圓頓戒論に煩はさるゝを恐れてなりしや疑無し、是に先づ往年の遊跡、豆州桂谷に赴きて結緣灌頂を修し、走湯山の神龕に入りて心經鍵を講じ、庚子七月二十六日常州より野州に入り、勝道上人の舊蹟補陀落山に上り、二荒を改めて日光とし、山中の靈區勝域悉く歷覽して、各修行の跡を殘さる、奥州慧日寺、羽州の湯殿、羽黑、月山の三山等、其他東北並に北越に於ける靈跡、皆な當時巡化の足

跡なりと云ふ、是に至て四方等しく其の教澤に浴ひ、眞言の教輒普く遠邇に麗るに至るを見る、青龍和尚の滿足果して如何ぞや。

弘仁十二年五月、社會的同情に富み、世出世兼濟に堪へ給し高祖は、遂に讃岐萬農池、築地別當として生國に下り玉ふに至りぬ、是より先き刑部少丞敢眞人濱繼等、其の任に當りて經營方を盡せりと雖も、業大に人少くして容易に成功せず、諸郡司等即ち議して請願すらく、

僧空海、部下多度郡人也、行高離日聲冠彌天、山中坐禪鳥巢歌狎、海外求道虛往實歸、因茲道俗欽風民庶望景、居則生徒成市出則追從如雲、今久離舊土常住京師、百姓戀慕實如父母、若聞師來莫不部內人衆倒履來迎、伏請宛別當令成其事云々

と即ち朝廷の允許を經て此任ありしなり、今昔物語に「讃岐國那珂郡に滿濃池（今眞野に作る）とて大なる池あり、高野大師其國の人をあはれみて、人を促して築たまへる池なり、池のまはり遙に遠く、堤は甚はだ高かりければ池とは覺えず海などのやうに見ゆけり」と言へる者、實に人を欺かず、今其の池を見るに百谷の水を滋へて、萬頃の田を灌漑し、百姓其慶による、高祖の功績眞に大なる者ありと謂べし。然れども讃州滯留は極めて短時期なりしと思はる、九月八祖の影讚を書し、故唐大使賀能の追福を營み玉へるなど以て徵知すべし。今茲十一月兩相公某々（遊方記は冬嗣緒嗣と爲す眞否を必せず）に東して近頃、相佐圖する所の曼荼の像等其業を卒へたるを謝し、兼て諸徒弟を眷顧せんことを囑せらるゝ文、頗る山林の風氣を慕ひ玉へる者有るを見る、謂く

貧道如今生年近知命二毛已颯然、生願已滿、應傳亦了、欲待少年之成立還恐風燭之速及、（中略）嗟乎在俗障道妻子尤甚、道家重累弟子是魔、不如絕弟子之愛却國家之粒、斗藪殉道兀然獨座、水菜能支命、薜蘿是吾衣、所修功德以酬國德、所有經佛等傳授某郡寶惠云々

以て當時眞言の教風漸く朝野に遍敷し、往時久米寺の塔裡に危座して「吾不二の法を得ずんば此座を起たず」と捨身新請し玉ひし誓願、業に已に滿足し、靜に山林幽地に退隱

して。上は國家の德澤に酬い、下は吾敎の無窮を念ぜんとの御希望盛なりしを見るに足る、蓋し年未だ知命に達せず、加ふるに社會的性情に富み給ひし高祖が、頻りに山林隱遁の切情を洩し玉ふ者、甚だ怪むべきが如しと雖も、思ふに是れ宮廷に出入して腐敗せる南都の僧綱等と、揚々濁浪を上ぐるは、固より吾が欲する所に非ず、加之、若し依然京師に居住せば、紛々たる俗塵吾に迫りて殆んど出世の大道を勤修するの閑無く、彼の南山を開創したる素意殆むど其過半を空くするの恐有り、是れ豈に高祖を促して斗藪殉道兀然獨座の言を致さしめたる所以に非らざるを知らむや。即ち高祖の此言を見て、吾人は當時世人が如何に高祖を景慕し來りて、汪洋たる觀智の淨水をも攪亂せんとしたる乎を察知し參らすなり、反動は衝動より來り、喧雜は靜默を想はしむ、今天空海濶の空海をして切に靜禪を希望せしむる者、其所由もとより推知し難からず、況むや崇高純潔の信仰を收攬すること、到底紛塵の內に埋沒するのみの能く、爲す所に非ざるを看破し玉ひし高祖に於てをや、又其の末文「二三弟子奉屬兩相國、伏願時々垂檢流傳祕敎」云々の如き、餘り感伏し難き者ありと雖も、遠く釋尊が法を國王に繫囑し玉ひし因緣に想到せば、專制君主時代に於ける宗敎者が固より免れ難き事情なるべし。豈に獨り高祖に於て此を怪まんや。

弘仁十三年壬寅二月、勅により東大寺に於て眞言院灌頂堂を立て、息災增益の法を修せられ。平城上皇、高祖に就て佛性三昧耶戒並に祕密灌頂を受け玉ひぬ、是れ我國　帝王密灌の權輿なり、高祖が當日の奉表に曰へらく

以大同元年奉獻曼荼羅並經等、從爾已還、愚谷無感忽經二十七年、天從人欲聖鑒人心、因緣感應故、今日奉對　龍顏、得遂愚誠、一喜一懼心神無措

と嗚呼眞に高祖の開敎は　平城の勅許に依りし者、而して藥子の亂には高祖　嵯峨帝の側に立ちて法力を顯はされ、爲に平城上皇は失敗の地位に陷り給ふて、爰に鬱々十有餘の春秋を送り玉ひし者、然るを今洒然俗情を超脫し、皓々たる心地朗々たる信念、以て久濶の情を灌頂壇に敍べ玉ふに至りぬ、上皇豈に亦今昔の感に堪へ給はざらむや、吾人は

其心の仰で彌〻高く、俯して彌〻深きを窺ひ參らすなり、是時平城の皇子、嵯太子高岳親王、亦高祖の門に歸し

斯くまでに多羅磨を知れる君なれは多々葉多さてになり登りけり

の歌を獻じて出家剃髪し玉ひしと云ふ、即ち皇子禪師眞如親王是なり、高祖其時の答歌に曰く

謂ふなら〻奈落の底に落ちぬれは利利も毘舍もへたてやはする

と蓋し佛敎の骨髓たる一視同仁、平等無邊の意を詠じて親王の失意鬱屈を慰め、併せての入佛道の心得を佩せられし者なるべし、後年親王が遼〻流沙を渡り、蒼嶺を越ゑんの大志を發し賜ひし者、豈に當時一片の感憤に基する者無しと言はひや。

抑〻高祖は既に祕密の根本道場を、高〻南山の雲鎖し縹たなび〻幽嶺靈峰に定め玉ひぬ、然れ共是れ淨侶の靜觀修禪に供すべき道場のみ、玉體安穩鎭護國家の任に當るべき吾敎の根本道場が、爾〻偏鄙に僻在するは最も朝廷の不便とせらるゝ所、是に於て弘仁十四年正月十九日、藤原良房を使者として東寺を高祖に賜ひ、永世眞言の道場と定め、諸宗の雜住を禁じ、請來の法文道具を經藏に納め、寺號を敎王護國寺と改め、灌頂院を立てゝ、春秋二季に結緣灌頂を修行せしめられ、後ち三綱を輔任し五十人の定額僧を置き（後ち永和三年實惠僧都の奏に依り、二十五口に改む）眞言宗長者の住地と確定せらる、是より東密の敎風長へに吹き、香煙遙に南山の雲に通ひ、以て今日に至る高祖の遺德仰ぐべき哉、

今年嵯峨帝亦冷泉院に於て、高祖を師主として金剛界の灌頂を受け給ひ　皇后百官また其壇に入りぬと云ふ、蓋し嵯峨帝は今年四月位を皇弟淳和に讓り、冷泉院に移り玉ひしと見ゆれば、御灌頂は御遜位の後に在りしならむ乎、蓋し導敎大師は圓頓戒論を最後の光彩、斯世の名殘として。昨年叡岳の雲に隱れぬれば、朝廷に於ける信仰は益〻高祖の一身に歸せりしなり。

要するに弘仁朝に於ける高祖は、宗敎家としての學識德行法力の絕倫なるが上に、多藝多

能、世間百般の學藝に綜通して皆な其奥に達し、萬人の願に任せて其需ひる所を供せられしが故に、上一人より下百官百姓に至るまで、皆其德を仰ぎ其澤に浴し、加ふるに其教旨の最も時勢に適する者を以てす、其勢恰も順流に帆をあげ、駟馬に鞭を加ふるが如く、秘密眞言の教義一時に其勢力を占め、遙に舊來の諸宗を凌駕するに至りしを見る、而して其門下の俊髦には智泉、泰範、杲隣、實恵、堅慧あり、眞濟、眞雅等又た嶄然頭角を顯はさんとす、眞言宗の前途益〻多望なりと云ふべし。

其二　神道との關係一班

千有餘載間、我が國民の信仰を支配したる、兩部神道説が、聖武天皇、行基菩薩の心に描かれ、最澄、空海の手に依つて成就せられたりとは、專ら史家の唱導する處なるのみならず、既に前段に於て高祖が、神道灌頂を受け、四社明神の勸請ありしを説きぬれば、吾人は茲に一言、高祖と神道との關係に論及するの、無用の業にあらざるを信ずるなり。蓋し兩部神道説は、從來一箇の學説として、相傳として、眞言、天台に於ける一大事の相承と成り、又京都吉田家の神道説は、高祖より傳はれる者頗る多しと聞く。故に深く此等の關係を研究せば、大に我が國民が思想變遷の跡を知るべしと雖ども、今は單に斷思零想を補綴して、大方諸君の意見を聞かひと欲するのみ。

抑〻佛教十二宗の多きありと雖ども、維新以前社寺として、神社の別當を勤めたる者は、天台、眞言兩宗に限りたりと聞く。是れ即ち最澄、空海兩大師が兩部神道に於ける關係に職由する者にして、我國神道研究上大に注意すべき者なり。吾人は今茲に先づ高祖が神祇に關して有せらるゝ事實上の因緣を列擧せんに、先に云へる、眞言守護の四社大明神中、彼の氣比大明神(本社は越前敦賀に在り)を崇敬するの因由は、高祖　嵯峨帝の勅を奉じて當社祭祀のこと有りしが爲なりと云ひ、丹生、高野、(即ち丹生大明神の息)の兩大明神は、高祖が、

吾居住時類有明神衛護山裏路邊有女神名曰丹生津姫命其社廻有十町計澤若人到者即時傷害方吾上登日託巫祝曰妾在神道望威福久也方今菩薩到此山妾之幸也弟子昔現人

之時食國皇命給家地以寓計町南限南海北限日本河東限大日本國西限應神山谷與也厭永世表仰信情云々

と言はれたる、最も大切なる神明にして、高祖の高野開山と最も親密なる關係を有し、眞言宗とは離るべからざる因縁を有す。今の紀州伊都郡天野の地、是の澤の遺跡なりと言ふ。彼の嚴島明神は『嚴島春秋』の記する所に依れば、入唐歸朝の當時、求聞持法を修し給ひ、明神と特別の神契ありきと言ひ傳ふる處にして、平相國淨海が高野大塔修理の次手を以て、嚴島明神を營繕したりと言ふ、『平家物語』の記錄の如き、其の兩所の關係如何に深かりし乎を示す者なり。以上四社明神は即ち是れ最澄師が山王神社を延曆寺に勸請し、天台守護の神と崇めたると同一轍にして、後世兩部神道の基礎を爲し、眞言、天台諸寺に於ける鎮守權現の濫觴を爲したる者乎。其他豐前國の賀春明神は、高祖入唐の時、佛法護持のため、高祖に隨身して、萬里の波濤を渡り給ひ、高祖歸朝の後ち、此山岩石尖高疊無有草木稱生樹木者云々の神託に從ひ、香水を加持して嚴嶽に灑ぎ給ひしより、初て草木生ずとの深き關係の存するあり。又古來佛教と關係最も深き宇佐八幡宮は大同四年十二月十日、高祖の德化を慕ふて、高雄神護寺に影向し高祖に對面ありて、相互に其の影像を寫し玉ひ、後ち藥子の亂に、高祖兵亂鎭撫の祈禱を凝らし給ふや、親しく空中に現じて應驗を示し、又東寺に影現して、伽藍守護の神と成り玉ふ。其他相州江之島は、弘仁五年大師が護摩修行の舊跡と言ひ傳へらるゝ所にして、其時天照太神八幡、春日の諸神を窟内に勸請せられたること『鎌倉志』に記す所の如し。又た『稻荷大明神流記』『藤森社緣起』等に依れば、現今の伏見稻荷は高祖が稻荷大明神勸請のため、藤森明神より拜借し給へる神地にして、高祖が東寺伽藍の總鎭守として、是處に勸請し玉へる者なり。『藤森緣起』は此事を敍べて、後ち曰く、

大師敷地借用爲報謝請來佛舍利三國傳來之旨被染空海自筆相副本尊大日像被奉當社宮中舍利堂是也同年五月五日於當社寶前空海修法味隨奇瑞初而被定申三所天王御本地本社藥師西御前十一面東御前文殊日本神國之諸神以佛菩薩稱本地事眞言請來以後傳敎弘

法兩大師始而被定之矣」(「諸社根元記」亦同じ)と。

以て高祖が神道に於ける關係の古來如何に認められたる乎を推知すべきなり。或る年高祖大師住吉に詣で給ひし時、神卽ち密敎の護持を誓ふて、

君か代の久しかるへきためしには兼てそ植ゑし住吉の松

の詠ありきと言ひ、天長二年勢州朝熊山に上り、求聞持法修行の時、太神宮の託宣に接して、身に白衣を着け、右に寶棒を逆まに持ち。左手に赤色の寶珠を持し、八十種好の相貌を備へ給へる尊容を拜し、これを圖寫し奉り玉ひしと言ひ、伊勢の神祠に於て、十種の神寶を寫し、寶殿に奉納し玉ひしと云ひ、高祖が神道に對する經營少小に非ず。其他權中納言家長の日記に、寛仁三年三月十八日、年來の懇望に依つて、叔父道綱より、兩部神道の二圖を傳はりたる由を記し、附言して曰く、弘仁十三年壬寅四月十八日於紫宸殿空海密敎之傳來也去三敎之帷薄洗室女之紅粉者」云々と。以て高祖が紫宸殿に兩部神道の深旨を談ぜられたること在るを知るべし。「尙中臣祓兩部抄」の撰ありと聞けども、吾人未だ其書に接せず。以上は事實を列擧して、外形上に於ける關係の一班を敍べたり。請ふ是より進んで、高祖が神道に於せらるゝ根本說と見るべき者を示さん。

高祖が眞雅僧正に於ける別遺誡に曰く。

夫れ金剛乘の敎は世に卽して乃ち神なり、故に神國卽ち佛土にして、神と佛と不二なり。偈に曰く、諸佛正覺金剛杵、往古菩薩智法身、樹下成道常說法、大日本國成鎭壇」と。是を以て國は是れ大日本國、敎は是れ大日の敎、神は亦大日の神なり。兩部を以て開合するに、合する時は、日神に過ぎず。開く時は、則ち三千餘社を成す。國土は是れ神の身、草木は是れ神の衣、含靈は是れ神の垂迹、六大周遍して世界を成立せり。是の故に我と伊勢(太神宮)と異なること無く、我と諸神と異ること。無し我れ諸神と盟ありり。故に不二入定の後ち、多く神社の內に在りて、國を治め、民を利すべし」云々と。

又曰く、

浮圖の言は、大日の金言なり。祝詞の言は、神明の淳解なり。我れ日輪觀に入て、不

二入定の後ち、伊勢高天殿に在て、國家を護るべし」云々と。

何んぞ其言の高莊にして、詩味多く、且は傲慢不遜に類するが如く然るや、若し偏固狹量の神道家をして、此等の語を聞かしめば、必らず罵るに、國家の大奸賊、神靈の冒瀆者を以てせん。然れども、若し公平穩健の思想を以て考へば、伊勢大廟も、單に皇室の祖廟として、是を崇敬するに過ぎず、是れに神靈的、宗教的意味を寓し、天照す日輪と同一想裡に融和するに至りしは、猶し印度人が最上神を摩訶毘盧遮那（大日）と考へたると同一思想にして、若し或學者の說の如く、天孫人種は印度に出でゝ、「チュラコヤン」族の一派なりとの說を眞ならしめば、天照大神と大日如來は同一人種の、同一思想が、異彩を飾りて東西に顯はれたる者なるやも知るべからず、其は兎まれ角まれ、大日本國に大日の教法が、一瀉千里の勢ひを以て弘まるに至りしは、天照大神と日輪と摩訶毘盧遮那の三思想を一に融會し、本地垂迹の說を立てゝ、聖武帝の遺旨を實行し、龐雜なる固有の神道思想に、神祕幽玄の哲學思想を混和して、此を深邃高妙にし、佛教を日本化し、一種特別の日本的佛教を樹立したる結果にして、兩大師の烱眼なる、夙に這般の極情深致を洞見し、巧に國民の思想に投合したる者と言ふべく、彼の親房卿が「神皇正統記」に、

我國は神代よりの緣起、此宗の所說と符合せり。

と言へるは、適評なりと言ふべし。殊に國土は是れ神の身、草木は是れ神の衣、含靈は是れ神の垂迹」と云ふに至つては、是れ純然たる「ウバニシャッド」的思想にして、我が神道と佛教とを融會し、乳水一味の醍醐と爲すに於て、最も力ありし者と言ふべく、其の詩趣に富み、神祕幽玄の旨義を寓することの深き、實に凡神的宗教の神髓を一言に道破したる者と云ふべし。彼の溪聲卽是廣長舌山色豈非淸淨身」とは文學的眼光を以て、此間の消息を漏したる者、高祖は此を今宗教的直觀に依りて、看取されたる者にして、我が日本人中、斯かる壯大の詩想を吐きたる者、恐くは「古事記」の神譚（ミソロジー）を除きて、容易に見當り難き處なるべし。殊に「我（ト）與伊勢無異」と言ふに至つては、大に神道家の叱罵

を免れざるべしと雖ども、是れ六大周遍、事々無礙圓融の深理を思想の奥底に有し、高法一如の秘旨を説示したる者にして、是を今日の學理に依りて説明せば、亦復た一大思想たるに耻ぢず。是れ眞言宗に於ける、六大體大説にして、即ち弘法大師の宇宙論の要素なり。

要するに、高祖の眼中には偏執無し、野心無し。故に後世人が考ふるが如き、神佛の差別無く、唯だ靈妙の理性を具へたる吾人々間は現在の身心を外にせずして、神となり、佛と成り得る性質を具ふる者而して是が印度に於ては大日と呼ばれ、日本に於ては、神と唱へられたるに過ぎずと信ぜられたるのみ。斯く考へ來らば、其の靈能の類同に依りて、大日如來と天照太神とを同一眞體と考ふる。何の妨かあらむ、地藏菩薩の存日大明神となる、何の憚かあらむ。況んや八幡太神宮の大自在王菩薩と託宣あるに於てをや。是れ高祖が神道に對する見地にして、前來述べ列ねたる諸種の關係は、益〻此の見地を高めて、兩部神道の説を固めたる者ならむ。故に高祖が兩部神道に關係深きや、勿論なりと雖ども、高祖既に兩部神道の灌頂を大中臣氏に受く。其の兩部神道説が高祖等の發明にあらずして、單に大成者たるに留まりしこと知るべきのみ。尚此の關係の精細は。一層研究の上、大方諸君の是正を請ふことあるべきなり。

其三　天長に於ける高祖

弘仁十四年四月辛亥淳和天皇卽位あらせらる、同二十四日高祖上表奉賀し玉ふ文に曰く

沙門空海言空海聞四序代謝日月斡於穹窿五才更生萬物成于盤薄故能青昊黃軒乘時出震雙瞳八彩揖讓相推萬方宅心四海擊腹蕩々之稱千古仰之伏惟　皇帝陛下道超善貸德均拱鑪箇鍾堯心位握舜寶天兄天弟前　皇後　皇仁高往帝幾凌后僻明才之詩滿巷何力之頌可期幽顯俱歡動植憑惠況乎於微僧誰任手足不任鬼蕘之至謹奉表陳賀以聞經驚宸嚴伏深戰越沙門空海誠惶誠恐謹言、

淳和は其の潛龍の日、既に筆管を獻じ玉ひし等の誼あり、未だ　嵯峨の高祖に於かせらるが如き厚眷優遇之れ無しと雖も、信仰友誼共に頗る深かりし者の如く爾り、故に　帝

も即位後幾許も無く灌頂の壇に入り高祖の弟子と成り玉ひぬ、請ふ是より進みて　天長帝の下に於ける高祖と眞言宗との情態如何を見む。

抑〻人生の經過を以て四時の循環に對比し得べくんば、高祖の御生涯も豈に此の比擬に洩るべけんや、其の延曆大同間は奇才縱横妙想氤發、まさに百花の燦爛たるに比すべく、弘仁年間は前季に咲き亂れたる百花皆な菓實を結び、漸く秋候收穫の好望を齎らす、是れ夏日の香稻穰々、菓實累々たるに比すべき乎、今天長年間に至ては正しく是れ成熟收穫の季節、眞に穰々たりし者累々たりし者、皆豐熟して次第に穀倉に入り果盆に上り來る、方さに是れ人生大得意の時期、高祖に於ても亦全く其の爾るを見る、若し夫れ承和年代に至ては、既に三冬伏藏の季節即ち退隱靜修の期に屬して、人生の希望業に已に圓滿せるを見るなり、請ふ是より正しく高祖の秋收期を描寫せん乎哉。

今茲七月　嵯峨上皇宣して高祖を高野山より召す、高祖即ち京に上りて中務省に寓し、供修月餘、更に移て高雄に居玉ふ、當時公務多端と雖も春秋の間、必ず一度高野に往來せらる、是に於て帝高祖に賜ふに、大和國高市郡、飛鳥川原の弘福寺を以てし、往返の宿所に充てしめ玉ふ、水鏡には「天長九年十一月十二日に弘法大師高野より高雄に歸り居給ふべきよしを申給ひしかば、太上天皇弘福寺を給はせき、高野より都に通ひ給はむ路の宿り所と仕給へとぞ曰はせし」云々と明に天長九年と記し、又太上天皇と云ふ未だ孰れか是なるを知らずと雖も、其の恩寵の優渥なりし知るべきのみ。

此の十月太政官符を以て東寺の定額僧五十人を定めて堅く他宗の雜住を禁じ、十二月更に符を下して曰く

右大臣宣奉　勅任寺令住眞言宗僧五十人海公乘杯訪道傳祕密眞言杖錫安群持神力之妙呪又夫東寺者遷都之始爲鎭護國家柏原先朝所建也乞察此狀率僧徒等讚揚眞教轉禍修福鎭國家者云々

と國家朝廷の高祖に待つ所、廣く且つ大なりと云ふべし、當時東寺に於ける年中行事、僧衆の威儀悉皆、靑龍寺の風を移すと云ふ、彼の纂要鈔が評言して夫海内伽藍幾千乎或擬

本處纔萬之一乎、至眞言一家者全移佛國風範豈同日可論乎と云へる者、頗る偏見たるを免れずと雖も亦一理無きに非ず。

天長元年春大に旱す高祖　勅を奉じて雨を神泉苑に祈られ、數日にして驗あり、善女龍王應現して身を顯はし、和氣眞繩幣帛を奉じて來り祭る、密敎請雨の規模、後來一にこれに依る、三月二十日功を以て少僧都に任せられ、密敎の綱位此に初まる、律師を經ずして直に少僧都に補任せらるゝは非常の超任なりとかや、四月六日上表固辭し玉へども許されず、六月六日又東寺の別當に任せらる、前別當大僧都長慧、今年西寺の別當に轉じたればなり、蓋し東寺を高祖に賜ふて眞言の道場と定めたると既に久しく、又其の他宗の雜住を禁じたるは昨年に在り、然るを尙ほ他宗の長慧僧都が依然別當の職に在りし者、甚だ怪むべしと雖も或は、年限の規定ありて漫りに變改を許さず、止む無く今に至りし者乎、或は又今年の補任を以て別當に非ず、長者職なりと稱する者ありと云へども、長者は承和年間、實惠僧都の補任を以て濫觴と爲すが如ければ眞僞如何にや、吾人は到底此等の些事に向て、餘り穿鑿の勞を取る能はず。

此月二十七日神願寺を改めて高雄寺に替へ、神護國祚眞言寺と名けて定額二十一口を置き、得度經業を定む、納涼房に雲雷を望み、雲蒸霧似淺、雷渡空如地、颯々風滿房、祁々雨伴颸、天光暗無色、樓月待難至、魑魅媚殺人、夜深不能寐、の淸吟ありしは當時ならむ乎。

天長二年、爾來每年東寺の安居會に於て、守護國界主陀羅尼經一部十卷を講じて、轉禍作福鎭護國家の業に資せんことを請ひ允許せらる、是れ三月十日の奏請に依てなり、尋で四月二十日　勅を奉じて東寺の講堂を創建せらる　勅使は參議左大辨直世王、檢校參議右大辨伴宿禰國道にして、是より先き　聖體不豫の初に於ける　御願によりて此の建立あり、爾後恆に國家の爲に仁王會を修するの道場と成りぬ、斯の如く外界に於ける宗旨の發暢開展と共に、內部門下の事情如何んと見れば、眞濟法師昨年二十五歲にして傳法灌頂を禀け、實惠眞雅兩師の受法又た今年に有り、門下弟子の發達必らず括目すべき

者ありしや必せり、然れ共人生素より悲喜を免れず、爰に一大悲音を傳ふるの止無きに會せり、何ぞや門下の顔回、智泉法師が今茲二月十四日、高野山東南院に逝去せし一事是なり、是れ此の一事卒然見れは、單に一門下生の圓寂に過ずと雖も、智泉大德は實に孔門の回愚、釋家の慶賢、高祖の肉甥、法門の長子、幼より高祖に隨て道を問ひ奥を極め、密教將來の棟梁皆な斯人を推し、高祖も亦自ら智泉難替實惠眞雅云々と歎せさせ給ふ、然るを春秋僅か三十七、法臘二十一を以て百人の嘱望を背にし、優然都率の紫雲に隱る、其の痛悼慟哭高祖をして、尙は涕御影を今日に殘さしめたる者、豈に偶然ならむや、吾人は敢て實惠、眞雅兩大德を以て、高祖の繼嗣に堪へ玉はずと信ずる能はずと雖も、若し智泉大德にして其法壽を全くせられなば、眞言の法脈恐く斯人の手裡に歸し、我宗の歷史に今一層、光榮と異彩とを添へたるべきを信じて疑はず、其の永和以後に於ける眞言宗の景勢、常に台家に一着を輸するの觀ある者、豈に斯人の亡逝に基する無きを知らむや、

吾人は今爰に、斯歳に於ける高祖の事業を畧擧して、如何に其社會的關係の繁なりしやを示さむ乎、即ち上に敍擧せる者の外、正月十六日勢州朝熊岳に登りて、求聞持法を修するの因み、金剛證寺を創立し、其後ち伊勢神祠に於て神寶を圖寫せられ（神寶圖後批云、天照太神十種神寶、奉於伊勢寶殿寫之耳、右天長二年乙巳三月日記、入唐沙門空海）六月朔前周防權守のため求官啓を作り與へ、同月阿國大龍寺に於て本刹の緣起を撰し、本殿を營修して、求聞持等の法を行ひ、閏七月十九日東宮の講前に於て仁王讀誦の願文を作り、八月十一日雨寶童子啓白の文を制し、九月二十五日和州益田池の碑文を撰み、十一月二十八日群臣と共に、嵯峨上皇四十の賀算を賀し奉り玉ふ杯、社會的要務の頻繁なる願る注目すべき者有るを見るなり。

三年正月十一日初て仁王會を高野山下政所（慈尊院）に行はる、蓋し東寺の例に依る者にして、高祖の施設が徹頭徹尾、鎭護國家天下泰平等の觀念と相離れざるを見る、三月桓武皇帝の菩提を祈らむため　嵯峨上皇玉管を冷泉の菴室に振ふて、法華八軸を書寫し

給ひ、十月三日此を西寺に講せしめ玉ふ、護命、永淨、明定、安仁、勝哲、壽全、修圓、及び高祖等此の法席に與り、文武百官雲の如く集り微妙の講演を開き、就中く薩遠摩の翻譯に就て議論問答盛なりしと云ふ、當時梵語學に於ては我國固より高祖の右に出づる者有りと覺ぼず、爲に此の講會は專ら高祖の伎倆を顯はす爲に開かれたる者の如くなりしならむ乎、十一月東寺の塔を建立するに當り、春官坊、八省、左右近衛府、兵衛府、衛門府、馬寮諸親王家等に至る迄、皆な其材を曳き以て高祖の經營を助く、蓋し東寺は眞に桓武の勅願に依りて建立すと雖も、國事多端の際未だ全く其功を畢らず、故に今高祖首唱の下に、朝野心を竭くし、上下力を合はせ、六衛八省乃至親王家に至るまで誠を致し勞を厭はず、以て其成功を急ぎし者なるべし。

天長四年五月　勅を受けて百僧と共に大極清涼兩殿に於て諸雨の祈禱を凝らし、佛舍利を內裏に拳じ禮拜灌浴す。天陰り雨降り果して靈驗あり功を以て同二十八日大僧都に任せらる、固辭すること再三遂に許されずして就き玉ふ、五年四月先師勳操和尙のために梵網經を講じ其冥福を修せらる、今日殘る所の梵網經開題は當時の御作なりとかや、高祖が勳操に對する生前死後の恩謝、頗る厚き者有りと謂ふべきなり。

今や吾人は、百尺竿頭一歩を進めて、高祖の建設にかゝる綜藝種智院の上に及び、以て其の敎育上に於せらるゝ高見を伺はむと欲す、蓋し高祖が當時の俗僧或は頑僧に數頭地を抽んでゝ、天空海濶の大雅量大胸襟を發揮し、宇宙を呑吐し乾坤を呼吹するの大度量を顯示せられたるは、今茲に於ける綜藝種智院の創立是なり。抑〻綜藝種智院は今日に所謂る一種の私立學校にして、當時の流行物たりし藤氏の勸學院、在原氏の奬學院、恆貞王の淳和院、橘氏の學館院、和氣氏の弘文院等と同性質の私塾たるに過ぎと雖も、彼等諸校の單に其氏族の子弟に限り敎育して、各自吾族の發達顯榮を欲望する念に基き、貴族的主義を以て成立せるに反し、此は萬民平等の主義に基き、貴賤を問はず上下を擇ばず、普く佛陀無邊的慈眼を以て無限の智眼を開かしめんとす、其目的の高下、思想の廣狹實に、霄壤月鼈井海溝江の比のみに非ざるなり。殊に此の慈善主義の礎上に成立せる綜藝種智

院が、既に其名に顯はれたる如く兼綜衆藝、通達三乘の廣濶遠大なる希望を有し、三敎並べ敎へ、世出世兼ね學ばせ、世間に着する者に世法を敎へ、出世を庶幾ふ者に無漏道を敎へ、眞俗を一堂の内に會して、一大異彩を當時の敎育界裡に放ちたる、是れ最も注目すべき處なり。蓋し當時は、内外兩學共に唐朝より傳來し、兩者の懸隔素より今日の如く太甚しからずと雖も、支那的思想と印度的思想とは又、容易に調和すべき者に非らず、一方は大學國學及び諸種の私費に研究せられ、其目的實際的政事的官人を養成するに存し、他方は南北兩京諸大寺の論筵に講議せられて、其主旨全く精神的道德的宗敎家を養成するに在り、前者は眼を官位爵祿に附け、後者は多く心を僧綱補任に注ぎぬ。而して今高祖は斷然兩者の目的を超脫し、濟世利人の器を養成する大希望を以て世の慈善家を誘導し、遂に斯院の創建あり。其眼光の高、思望の遠、到底以て滔々たる俗流の企及する所に非ず、吾人は其が式幷序に依りて、高祖が學事に對して懷抱せられたる思想の跡を尋ね參らせんと欲するなり。

抑〻斯院創立の尊意は全く「貧道有意濟物、庶幾置三敎院云々」と「毘訶方袍徧翫佛經、槐序茂蔭空耽外書、至若三敎之策五明之簡蹇泥不通、肆建綜藝種智院普藏三敎招諸能者」と及び「緇素逍遙何必山林、」等の數語に在り、卽ち高祖は當時、僧侶敎育が山林枯木的に非ざれば、紫衣綿袍的に赴きて、各自一方に偏傾し、從て其學の專ら佛敎的否な宗派的に陷り、各狹隘なる門戸を構へ、蝸牛角上の論爭に我慢嫉視の弊風を增し、自讚毀他の惡習を長せるを憂ひ、是をして思想を濶大にし、精神を圓滿ならしめ、寬容の性優和の質を養はしむるは一に、狹偏ならざる敎育の下に、完全圓滿なる智識の開發を遂げしめ、自己の性情と智識とが圓滿に發達したる如く、又他人を發達せしめて、理想的僧侶たらしむると同時に、彼の社會の中流以下に住せる庶民の子弟が、師を尋ね學を修むるの便を缺き、可惜ら希望と能力とを具へ有爲の資を抱き乍ら、空しく無學文盲に終る者多きを憐み、茲に斯院を立てゝ一方に、僧侶學道の門戸を大ならしめ、他に庶民子弟に修學の便路を與へ、平民的私學校に由りて一般、學事上の進歩を計らひと試みられたるに外な

らず。

聞く斯院は、天長三年に薨去したる藤原冬嗣の遺旨に依り、三守朝臣其志を繼で、高祖と共に其經營を勉められたる者なりと。即ち高祖が濟物利民の志は廣く人智を開發せんが爲め、熱心に有志者を說き附け玉ひ、一言響を吐けば千金卽ち應じ、給孤の金を數くこと多嗣卿とし、緘石鈔、性修房古注等は三守卿とす、果して孰れか是なるを知らず）の林を勞せずして、忽ち勝軍（辭納言藤大卿と記さるゝ者にして東寶記、要集壇、寶集等は泉を得、本願爰に忽ち成就したるなり。而も此の大業固より僅々兩三人の支持し得る所に非ず、類多き者は竭き難く、偶寡き者は傾き易し、故に益〻諸氏の英貴諸宗の大德を誘導して、社會多數の同情同感の上に千歲の基礎を橫へられんとす。其要意の周密、到底枯禪者流の考及ぶ所に非ざるなり。

蓋し高祖既に、毘訶方袍徧翫佛經、槐市茂廉空耽外書と謂玉へるより勘到せば、當時俗俗共に其學甚だ偏狹に陷り、各〻學ぶ所に固執して、溢りに他を排譏し、井底の蛙見に無益の論鼓を張り、高祖の如き三敎に綜通し佛敎全體に明にして、廣大の思想海洋と比すべき眼光より觀察せば、甚だ笑ふべく憐むべく悲むべく、歎ずべき者多々なりしなるべく、到底「一味作美膳片音調妙曲」の難きを覺り、今日謂ふ所の普通敎育の最も初學者に必須なるを覺り、修學の初より圓滿寬濶なる性情の發達を、期望すべきの切要を感じ玉ひし者なるや疑無し。故に曰はく、九流六藝濟代之舟梁、十藏五明利人之惟寶、故能三世如來兼學而成大覺、十方賢聖綜通而證遍智云々、と以て高祖が學道の要心の存する所を推知し奉るべく、又其の一講堂內に三敎並び敎へて、校名を綜藝種智院と名けられたる所以を知るべし。

然れ共是れ其の目的の一半なり、從來既に修學の便を有せる貴族の子弟、法門の俊兒を して、益〻廣く宏濶の氣宇を養はしむる者、大美事たるに相違無しと雖も、是れ元來至當のこと、又在俗者に於ても尙ほ能く企圖し得る處の者、豈に必ずしも高祖の手腕を要すと云はむや、唯だ其の「今是華城但有一大學無有圓塾、是故貧賤子弟無所問津、遠方